埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第356集

菖 蒲 町

小林八束１／小林八束２

河川改修工事（元荒川／小林調節池）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

２００８

埼 玉 県

財 団 法 人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

１　小林八束１･２遺跡遠景

２　小林八束１遺跡遠景

１　小林八束２遺跡遠景

２　筒型土偶　正面（小林八束１遺跡）

３　筒型土偶　斜め（小林八束１遺跡）

小林八束１・小林八束２遺跡の紹介

小林八束１遺跡、小林八束２遺跡は菖蒲町の中央に位置しています。周辺は水田が一面に広がり、水田下に沈降した埋没ローム台地上に遺跡がつくられていました。この台地が沈降して形成されたものであるため、遺跡の発見は遅れていました。

本遺跡は元荒川・小林調節池の整備に伴って調査され、縄文時代早期（約7,000年前）と後期（約3,800年前）の集落跡が発見されました。また、古墳時代前期（約1,700年前）に集落跡から墓域へと変遷したことがわかりました。

縄文時代では多くの土器や石器の他に珍しい筒型土偶が、古墳時代では方形周溝墓が発見されるなど、地域の歴史を語るうえで、貴重な資料が追加されました。

序

埼玉県では、「誰もが安心して暮らせる安心・安全　埼玉」を目指し、あらゆる危機や災害に強い体制の整備に努めております。現在、菖蒲町で進めている総合治水対策特定河川事業、元荒川／小林調節池の整備はこうした課題に対する治水対策の一つで、集中豪雨による浸水等の災害を最小限に食い止めるための取り組みです。

総合治水対策特定河川事業地内には、小林八束１遺跡・小林八束２遺跡の存在が知られており、埋蔵文化財の取り扱いについて埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は埼玉県の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

調査の結果、縄文時代と古墳時代前期の集落遺跡であることが明らかになりました。特に、縄文時代早期では屋外で調理をした炉穴が多数検出され、後期の住居跡からは、非常に珍しい筒型土偶が出土しました。また、古墳時代前期ではこの地域で類例の少ない住居跡や方形に溝を廻らした方形周溝墓が発見されました。

本書はこれらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の資料として広く活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力を頂きました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部河川砂防課、埼玉県杉戸県土整備事務所、菖蒲町教育委員会並びに地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成20年11月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　刈　部　　博

例 言

1．本書は、南埼玉郡菖蒲町大字小林に所在する小林八束１遺跡第１次調査・小林八束２遺跡第１次調査の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

小林八束１遺跡第１次（OBYS１）

埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字小林字八束4740－１他

平成20年２月６日付け　教生文第２－63号

小林八束２遺跡第１次（OBYS２）

埼玉県南玉郡菖蒲町大字小林4675番地他

平成18年９月20日付け　教生文第２－44号

3．発掘調査は、総合治水対策特定河川事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．発掘調査・整理報告書作成事業は、Ⅰ－３の組織により実施した。調査実施期間および担当者は以下のとおりである。

小林八束１遺跡

平成20年２月１日から平成20年３月24日まで、宮井英一・新屋雅明が担当した。

小林八束２遺跡

平成18年９月28日から平成18年10月31日まで、小野美代子が担当し、橋本勉の協力を得た。

整理・報告書作成事業は河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（整理）で、平成20年６月２日から平成20年９月30日まで、山本禎が担当して実施し、平成20年11月28日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第356集として印刷・刊行した。

5．遺跡の基準点測量は小林八束１遺跡を株式会社東京航業研究所、小林八束２遺跡を精進測量株式会社に、遺跡の空中写真撮影は、小林八束１遺跡を株式会社 GIS 関東、小林八束２遺跡を株式会社東京航業研究所に委託した。

出土木炭の年代測定と樹種同定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

6．発掘調査時の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は富田和夫・山本が行った。

7．出土品の整理・図版作成は、山本が行ない、小野美代子・金子直行・宮井英一・新屋雅明・上野真由美・中島淳子・山北美穂の協力を得た。

管玉の石材同定は大屋道則の分析に依った。

8．本書の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、Ⅲ－２の遺物・Ⅵ－２（１）を新屋が、土偶とⅥ－２（２）を小野が、Ⅳの遺物を金子直行が、その他は山本が行った。

9．本書の編集は、山本が行った。

10．本書に掲載した資料は、平成20年12月以降は埼玉県教育委員会が管理・保管する。

11．本書の作成にあたり下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）

菖蒲町教育委員会　三ツ木貞夫

凡 例

1．本書におけるＸ・Ｙの数値は、世界測地系(新測地系)による国土標準平面直角座標第Ⅸ系(原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図内における方位はすべて座標北を示している。

2．調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく、10m×10m の範囲を１グリッドとし調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3．グリッド名称は、北西隅を基準とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…)、西から東方向に数字（１・２・３…）を付した。呼称はアルファベットと数字を組み合わせた。（例Ｃ－３グリッド）

4．本書における本文・挿図・表に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

ＳＪ	住居跡	ＳＲ	方形周溝墓
ＳＫ	土壙	ＳＤ	溝跡
ＳＸ	炭焼窯	ＦＰ	炉穴
Ｐ	ピット		

5．本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。

遺構図

住居跡・土壙・炭焼窯・炉穴群・炉穴・ピット　１：60

方形周溝墓　１：100

溝跡　１：200　溝断面　１：50

遺物実測図

縄文土器・土師器　１：４

縄文土器拓影図・石器　１：３

石製品・土製品　１：２

その他、埼玉県地形図、遺跡周辺地形図、周辺の遺跡、遺跡全体図は個別に縮尺率を設定した。

6．遺構断面図に表記した水準数値は、海抜標高を示す。

7．土器挿図中の網掛けは、赤彩を示す。

8．遺物観察表については以下のとおりである。

・口径・器高・底径は㎝、重さはｇを単位とする。

・（　）内の数値は口径・底径は復元推定値を示し、器高は現存高を示す

・胎土は肉眼で観察できるものを示した。

Ａ：石英　Ｂ：長石　Ｃ：雲母　Ｄ：角閃石
Ｅ：片岩　Ｆ：白色針状物質　Ｇ：赤色粒子
Ｈ：白色粒子　Ｉ：黒色粒子　Ｊ：砂粒
Ｋ：礫

・焼成は、良好・普通・不良の３段階に分けた。

・土器の色調の表記は『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に従った。

・残存は残存率を指し、残存率は破片の場合、図示した器形の部分に対する割合を示した。

9．なお、本報告では、調査時に付した遺構番号を使用したため、遺構番号は順不同である。

10．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の１／50,000地形図、菖蒲町発行の１／10,000菖蒲町全図を使用した。

目 次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1．発掘調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　（1）発掘調査 …… 2
　（2）整理・報告書の作成 …… 2
　3．発掘調査・報告書作成の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
　1．地理的環境 …… 4
　2．歴史的環境 …… 6
Ⅲ　小林八束１遺跡の調査 ……11
　1．遺跡の概要 ……11
　2．縄文時代の遺構と遺物 ……13
　（1）住居跡 ……13
　（2）土壙 ……21
　（3）グリッド出土遺物 ……25
　3．古墳時代の遺構と遺物 ……35
　（1）住居跡 ……35
　（2）方形周溝墓 ……46
　（3）グリッド出土遺物 ……52
　4．その他の遺構と遺物 ……53
　（1）炭焼窯 ……53
　（2）土壙 ……55
　（3）溝跡 ……55
Ⅳ　小林八束２遺跡の調査 ……58
　1．遺跡の概要 ……58
　2．遺構と遺物 ……59
　（1）炉穴群 ……59
　（2）土壙 ……70
　（3）溝跡 ……77
　（4）ピット ……77
Ⅴ　自然科学分析 ……79
Ⅵ　調査のまとめ ……86
　1．小林八束１・２遺跡の時期的変遷 ……86
　2．縄文時代 ……87
　（1）土器について ……87
　（2）筒型土偶について ……88
　3．古墳時代 ……90
写真図版

挿 図 目 次

第１図　埼玉県の地形 ……4
第２図　遺跡周辺の地形図 ……5
第３図　周辺の遺跡（旧石器・縄文時代）　…8
第４図　周辺の遺跡（古墳時代以降）　……9
第５図　小林八束１遺跡全体図 ……12
第６図　第４号住居跡 ……13
第７図　第４号住居跡出土遺物（１）　……14
第８図　第４号住居跡出土遺物（２）　……15
第９図　第12号住居跡 ……16
第10図　第12号住居跡出土遺物（１）　……17
第11図　第12号住居跡出土遺物（２）　……18
第12図　第12号住居跡出土遺物（３）　……19
第13図　第12号住居跡出土遺物（４）　……20
第14図　土壙 ……21
第15図　土壙出土遺物（１）　……22
第16図　土壙出土遺物（２）　……24
第17図　グリッド出土遺物（１）　……26
第18図　グリッド出土遺物（２）　……27
第19図　グリッド出土遺物（３）　……28
第20図　グリッド出土遺物（４）　……29
第21図　グリッド出土遺物（５）　……30
第22図　グリッド出土遺物（６）　……31
第23図　グリッド出土遺物（７）　……32
第24図　グリッド出土遺物（８）　……34
第25図　第１号住居跡 ……35
第26図　第１号住居跡出土遺物 ……36
第27図　第２号住居跡 ……37
第28図　第２号住居跡出土遺物 ……38
第29図　第３号住居跡 ……39
第30図　第５号住居跡 ……40
第31図　第５号住居跡出土遺物 ……40
第32図　第６号住居跡 ……40
第33図　第６号住居跡出土遺物 ……41
第34図　第７号住居跡 ……41
第35図　第７号住居跡出土遺物 ……42
第36図　第８号住居跡 ……42
第37図　第９号住居跡 ……42
第38図　第10号住居跡 ……43
第39図　第10号住居跡出土遺物 ……44
第40図　第11号住居跡 ……45
第41図　第11号住居跡出土遺物 ……45
第42図　第１号方形周溝墓 ……47
第43図　第１号方形周溝墓出土遺物 ……48
第44図　第２号方形周溝墓 ……49
第45図　第２号方形周溝墓出土遺物 ……50
第46図　第３号方形周溝墓 ……51
第47図　第３号方形周溝墓出土遺物 ……52
第48図　グリッド出土・表採遺物 ……53
第49図　第１号炭焼窯 ……54
第50図　第１号炭焼窯出土遺物 ……54
第51図　第４号土壙 ……55
第52図　第１・２号溝（１）　……56
第53図　第１・２号溝（２）　……57
第54図　小林八束２遺跡全体図 ……58
第55図　第１号炉穴群 ……60
第56図　第２号炉穴群 ……62
第57図　第３号炉穴群 ……63
第58図　第４号炉穴群（１）　……65
第59図　第４号炉穴群（２）　……66
第60図　炉穴出土遺物（１）　……67
第61図　炉穴出土遺物（２）　……68
第62図　土壙（１）　……71
第63図　土壙（２）　……72
第64図　土壙（３）　……74
第65図　土壙（４）　……75
第66図　土壙・溝跡出土遺物 ……76
第67図　ピット ……78
第68図　壺形土器の分類 ……91

第69図　甕形土器・高坏形土器の分類 ……92
第70図　器台形土器の類 ……93
第71図　小林八束１遺跡出土遺物（１） ……94
第72図　小林八束１遺跡出土遺物（２） ……95

表 目 次

第１表　周辺の遺跡一覧 ……10
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表 ……36
第３表　第２号住居跡出土遺物観察表 ……39
第４表　第５号住居跡出土遺物観察表 ……39
第５表　第６号住居跡出土遺物観察表 ……41
第６表　第７号住居跡出土遺物観察表 ……42
第７表　第10号住居跡出土遺物観察表 ……43
第８表　第11号住居跡出土遺物観察表 ……44
第９表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表 …46
第10表　第２号方形周溝墓出土遺物観察表 …50
第11表　第３号方形周溝墓出土遺物観察表 …52
第12表　グリッド出土・表採遺物観察表 ……52

写 真 図 版 目 次

図版１　１　調査区全景（南西より）
　　２　調査区全景（北東より）
　　３　第１号住居跡
図版２　１　第２号住居跡
　　２　第２号住居跡遺物出土状況（１）
　　３　第２号住居跡遺物出土状況（２）
図版３　１　第２号住居跡遺物出土状況（３）
　　２　第３・４号住居跡
　　３　第５号住居跡
図版４　１　第６号住居跡
　　２　第９号住居跡
　　３　第10号住居跡
図版５　１　第10号住居跡遺物出土状況
　　２　第11号住居跡
　　３　第12号住居跡
図版６　１　第１・２号方形周溝墓
　　２　第１号方形周溝墓
　　３　第１号方形周溝墓遺物出土状況
図版７　１　第２号方形周溝墓
　　２　第３号方形周溝墓
　　３　第１号炭焼窯
図版８　１　第１号炭焼窯遺物出土状況
　　２　第１号炭焼窯土偶出土状況（１）
　　３　第４号住居跡　正面（第８図）
図版９　１　第４号住居跡　側面（第８図）
　　２　同左　底面
　　３　第12号住居跡（第10図２）
　　４　第12号住居跡（第10図３）
　　５　第１号炭焼窯　表（第50図１）
　　６　同左　裏
図版10　１　第４号住居跡（第７図）
　　２　第４号住居（第７図）
　　３　第12号住居跡（第10図１）
図版11　１　第12号住居跡（第11図）
　　２　第12号住居跡（第11図）
　　３　第12号住居跡（第12図）
図版12　１　第12号住居跡（第12・13図）
　　２　土壙（１）（第15図）
　　３　土壙（２）（第16図）
図版13　１　グリッド（１）（第17図）
　　２　グリッド（１）（第17図）
　　３　グリッド（２）（第18図）

図版14　1　グリッド（２）（第18図）
2　グリッド（３）（第19図）
3　グリッド（３）（第19図）
図版15　1　グリッド（４）（第20図）
2　グリッド（４）（第20図）
3　グリッド（５）（第21図）
図版16　1　グリッド（５）（第21図）
2　グリッド（６）（第22図）
3　グリッド（６）（第22図）
図版17　1　グリッド（７）（第23図）
2　グリッド（７）（第23図）
3　グリッド（８）（第24図）
図版18　1　第１号住居跡（第26図５）
2　第１号住居跡（第26図３）
3　第１号住居跡（第26図２）
4　第１号住居跡（第26図４）
5　第２号住居跡（第28図１）
6　第２号住居跡（第28図６）
図版19　1　第２号住居跡（第28図10）
2　第２号住居跡（第28図11）
3　第２号住居跡（第28図７）
4　第２号住居跡（第28図14）
5　第６号住居跡（第33図１）
6　第６号住居跡（第33図３）
図版20　1　第６号住居跡（第33図４）
2　第10号住居跡（第39図１）
3　第10号住居跡（第39図２）
4　第10号住居跡（第39図６）
5　第10号住居跡（第39図５）
6　第10号住居跡（第39図７）
図版21　1　第11号住居跡（第41図１）
2　同左（細部）
3　第11号住居跡（第41図４）
4　第11号住居跡（第41図６）
5　第11号住居跡（第41図５）
6　第１号方形周溝墓（第43図４）
図版22　1　第１号方形周溝墓（第43図12）
2　第１号方形周溝墓（第43図13）
3　第１号方形周溝墓（第43図14）
4　第１号方形周溝墓（第43図21）
5　第１号方形周溝墓（第43図23）
6　第２号方形周溝墓（第45図３）
図版23　1　第２号方形周溝墓（第45図８）
2　グリッド（第48図１）
3　グリッド（第48図２）
4　グリッド（第48図６）
5　グリッド（第48図８）
6　表採（第48図９）
図版24　1　調査区全景（南西より）
2　第１号炉穴群
3　第２号炉穴
図版25　1　第３・４号炉穴遺物出土状況
2　第３号炉穴遺物出土状況
3　第４号炉穴遺物出土状況
図版26　1　第５・８号炉穴
2　第２号炉穴群
3　第３号炉穴群
図版27　1　第４号炉穴群
2　第24～32号炉穴
3　第32号炉穴遺物出土状況
図版28　1　第１号土壙
2　第９号土壙
3　第10号土壙
4　第15号土壙
5　第17号土壙
6　第18号土壙
7　第25号土壙
8　第33号土壙
図版29　1　第３・４号炉穴（第60図）
2　第１号炉穴群・第16・18・19・26号炉穴（第60図）
3　第32号炉穴（第61図１）

Ⅰ　発掘調査の概要

１．発掘調査に至る経過

総合治水対策特定河川事業元荒川（小林調節池）は、治水施設の重点的な整備を実施する事業で、主に野通川流域の水害対策のために計画されたものである。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業に係る埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成14年11月20日に実施した「平成15年度公共事業と埋蔵文化財の調整会議」において河川砂防課から工事箇所や工事計画の説明があった。文化財保護課（当時）では、周辺に埋蔵文化財包蔵地が所在しないこと、現在の地形から低湿地と想定されること、菖蒲町教育委員会の意見等を踏まえて、工事に着手して差し支えない旨、口頭で回答し、平成14、15年度に北側の調節池「池Ⅱ」の一次掘削が施工された。

一次掘削終了後の平成16年４月８日、菖蒲町教育委員会から調節池法面において、多量の土器が発見されたとの報があり、翌９日、当課職員が現地を確認したところ、縄文土器片が多数確認され、さらには遺構断面が法面に露出しており、周辺は埋没ローム台地であることが判明した。

４月12日に河川砂防課に状況説明を行い、今後の工事計画や取扱いについて協議し、未掘削部分について確認調査を実施することが了承された。

なお４月22日に菖蒲町教育委員会から当該箇所について「新規遺跡の発見届」が提出され、県教育委員会は同日付で受理し「池Ⅱ」周辺を「小林八束１遺跡」として埋蔵文化財包蔵地に登載した。

平成16年４月22日付け河砂第70号で、河川砂防課長より文化財保護課長あて「小林調節池改修事業地内における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の照会があり、５月24日～28日、６月22～24日の計８日間で未掘削の「池Ⅰ」予定地の確認調査を実施し、縄文時代早期の遺構、遺物を検出し、７月14日付けで小林八束２遺跡として新規の埋蔵文化財包蔵地として登載した。その結果をもとに７月15日付け教文第563号で、埋蔵文化財が所在する範囲について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査が必要な旨、回答した。

小林八束１遺跡範囲内「池Ⅱ」の未掘削箇所については、出水期明けの11月10日～11月12日の３日間で確認調査を実施した結果、遺構・遺物が濃密に分布することが判明し、平成16年11月17日付け教文第1220号で、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査が必要な旨、回答した。

その後、関係機関で協議を重ね、工事計画上、優先して小林八束２遺跡の発掘調査を実施することとなり、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたり、平成18年９月28日から10月31日まで実施された。

また、小林八束１遺跡については、当初計画どおり事業が施工された場合は、１万３千㎡以上の発掘調査が必要になることから、工事計画自体の見直しが図られ、その結果、500㎡の発掘調査が平成20年２月１日から３月24日まで実施された。

なお、文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から平成18年10月20日付け河砂第495号で提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成18年12月28日付け教生文第３－1419号で行った。また、第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成18年９月20日付け　教生文第２－44号
平成20年２月６日付け　教生文第２－63号
（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

２．発掘調査・報告書作成の経過

（１）発掘調査

小林八束２遺跡は平成18年９月28日から平成18年10月31日まで実施した。

９月末に事務手続きと事務所設置を行い、10月に入り重機による表土掘削に着手した。遺構確認面まで表土を除去し、その後人力による遺構確認作業・基準点測量を経て、各遺構の掘り下げ・土層断面図・平面図などの作成・遺構写真撮影等の調査記録の作成を実施した。

10月下旬に、遺構の調査をほぼ終了し、調査区全景写真及び空中写真撮影を実施した。その後、遺構平面図の確認・補足作業を行い、遺構の調査を終了した。

その後、事務所の撤去及び調査区の埋戻し、事務手続きを行い10月末に本事業に伴うすべての調査を完了した。

小林八束１遺跡は平成20年２月１日から平成20年３月24日まで実施した。

１月末に事務手続きを行い、２月に入り事務所設置を行い、重機による表土掘削に着手した。遺構確認面まで表土を除去し、その後人力による遺構確認作業・基準点測量を経て、各遺構の掘り下げ・土層断面図・平面図などの作成・遺構写真撮影等の調査記録の作成を実施した。

３月下旬に、遺構の調査をほぼ終了し、調査区全景写真及び空中写真撮影を実施した。その後、遺構平面図の確認・補足作業を行い、遺構の調査を終了した。

その後、事務所の撤去及び調査区の埋戻し、事務手続きを行い３月末に本事業に伴うすべての調査を完了した。

（２）整理・報告書の作成

整理・報告書の作成事業は、平成20年６月１日から平成20年９月30日までの４ヶ月間にわたって実施した。

遺物の水洗・註記作業を行った後、接合・復元作業を実施した。接合の終了した遺構から順次、遺物実測を開始した。縄文土器・土師器等は機械実測（３スペース）を利用して素図を作成し、その素図をもとに実測図を完成させた。実測図・断面図は製図ペンで墨入れ（トレース）し、必要に応じて拓影を採った。実測図・断面図と拓影図を組み合わせてレイアウトを行い、遺物図版の版下を作成した。

遺構図面は図面整理と修正を経て第二原図を作成した。第二原図はスキャナーでコンピューターに取り込んだ後、グラフィックソフトでデジタルトレースし、スクリーントーン・諸記号・土層説明等の入力データを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

実測遺物はその属性をパソコンに入力し、データ処理・編集して遺物観察表を作成した。また、遺存度の高い遺物を中心に石膏による復元作業を行い、一部写真撮影を実施した。併行して調査時に撮影した写真を選択し、パソコン内で編集を行い、写真図版を作成した。

作成したデータを基に原稿を執筆し、遺構図版・遺物図版・写真などを組み合わせて割付を作成した。編集作業を９月中にほぼ完了させ、下旬に印刷業者を選定し入稿した。校正は３回行い、平成20年11月末に報告書を刊行した。

図面類・写真類・遺物は整理分類して、収納作業を実施した。

３．発掘調査・報告書作成の組織

平成18年度（発掘調査）

理事長	福田陽充	**調査部**	
常務理事兼総務部長	岸本洋一	調査部長	今泉泰之
総務部		調査部副部長	小野美代子
総務部副部長	昼間孝志		
総務課長	髙橋義和		

平成19年度（発掘調査）

理事長	刈部博	**調査部**	
常務理事兼総務部長	岸本洋一	調査部長	村田健二
総務部		調査部副部長	礒﨑一
総務部副部長	昼間孝志	整理第一課長	宮井英一
総務課長	松盛孝	調査第二課主査	新屋雅明

平成20年度（報告書作成）

理事長	刈部博	**調査部**	
常務理事兼総務部長	萩元信隆	調査部長	村田健二
総務部		調査部副部長	礒﨑一
総務部副部長	昼間孝志	整理第二課長	富田和夫
総務課長	松盛孝	主査	山本禎

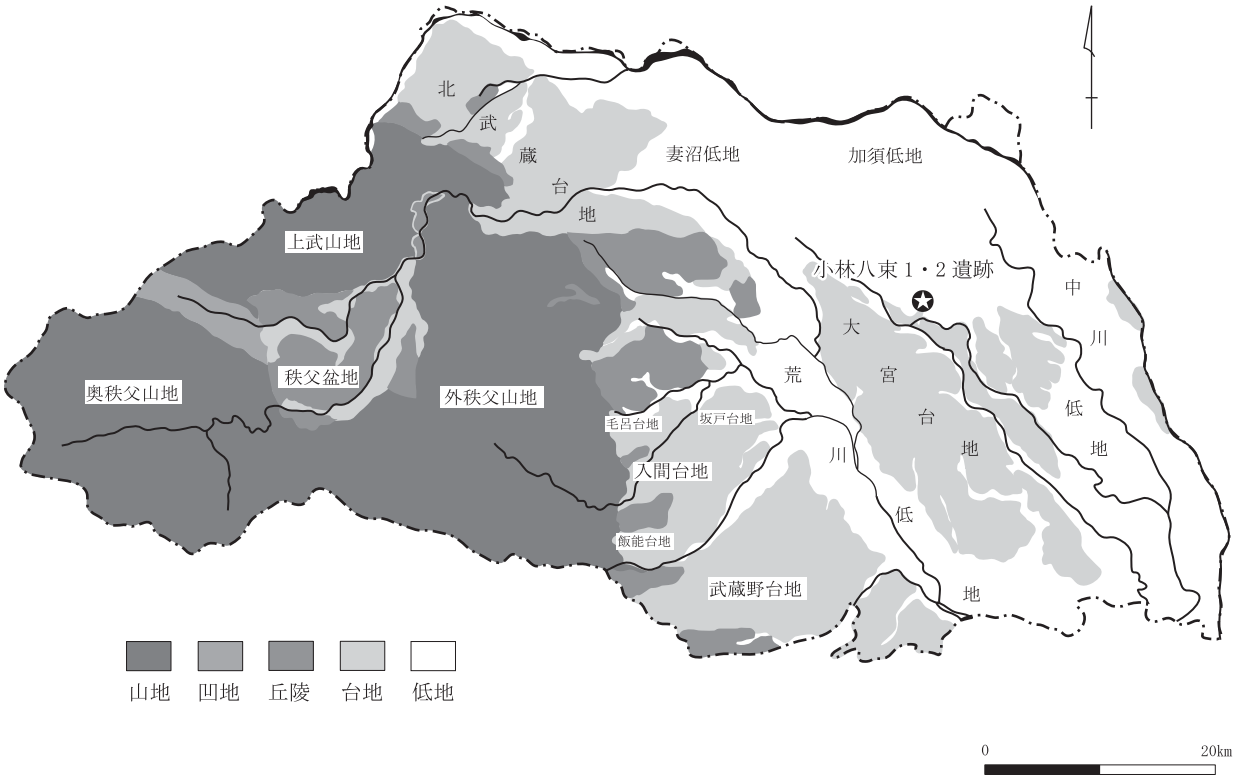
Ⅱ　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

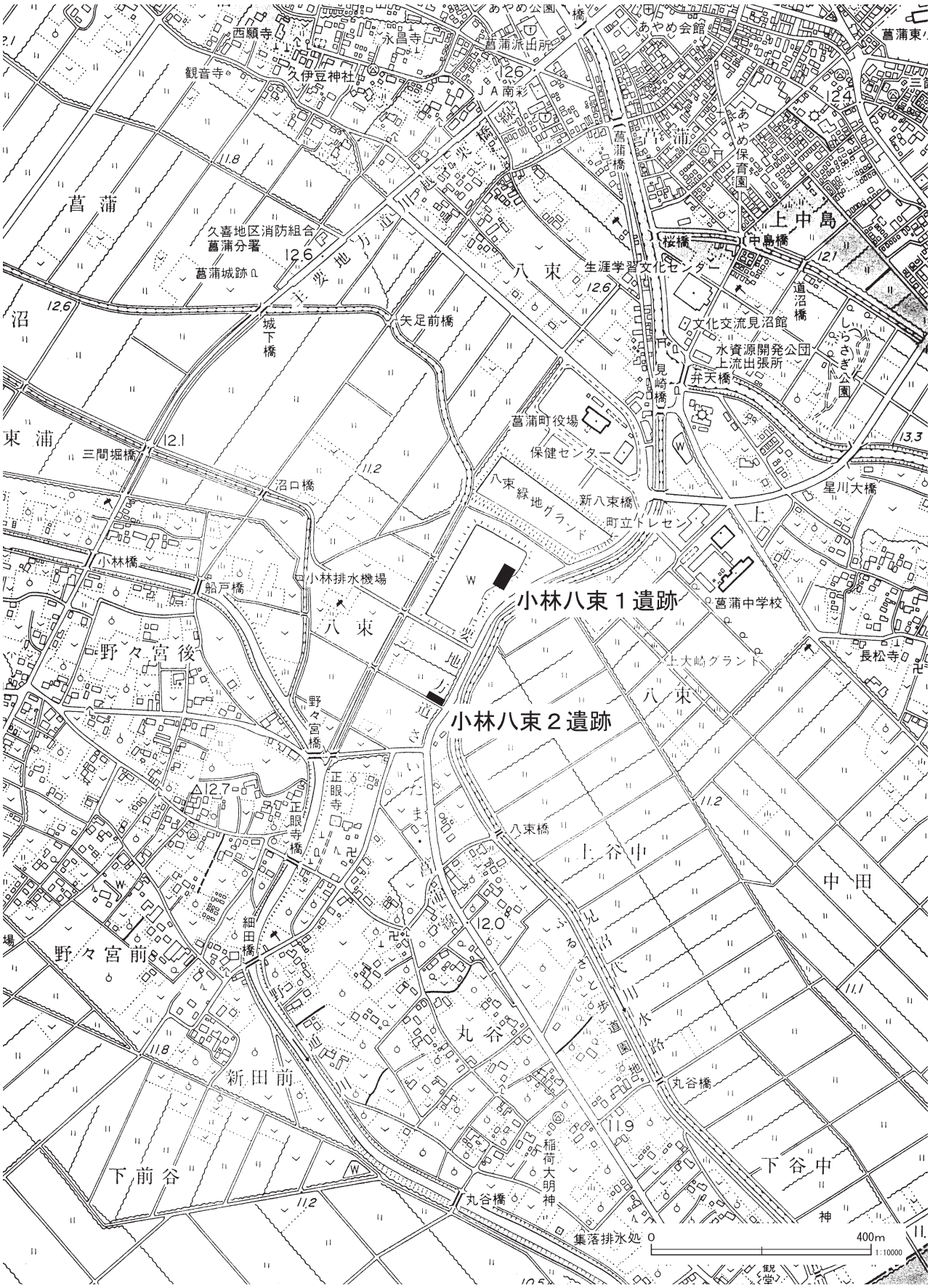
小林八束１遺跡・小林八束２遺跡は菖蒲町小林に所在する。遺跡は新幹線がJR大宮駅以北で二股に分かれる上越新幹線と東北新幹線の間にあり、JR高崎線桶川駅の北東約７㎞、JR宇都宮線の久喜駅の西方約７㎞に位置している。

菖蒲町は埼玉県東北部にあり、商業中心の市街地と南東部の工業団地からなり、星川、野通川、元荒川を始めとする大小の河川や用水が南東方向に流れ、肥沃な水田地帯を形成している。

周辺の地形は、主に大宮台地と加須低地からなり、大宮台地が北方の加須低地に移行する部分で、概して平坦な地形となっている。大宮台地は長さ約30㎞、幅約８～10㎞の北西から南東方向に延びる台地で荒川に接する西側が高く、元荒川が流れる北・東・南東側が低くなる。加須低地は利根川と中川の氾濫により形成された利根川中流域に発達する低地で、西は妻沼低地、東は中川低地と連なっている。遺跡周辺は比較的平坦な地形ではあるが比高１～２ｍの起伏が島状に認められ、島状ローム台地の微高地と低地からなる。微高地は大宮台地の北方の延長部にあたる台地と自然堤防がある。起伏が島状に認められるところは菖蒲町の栢間地区・柴山枝郷地区・小林地区のほかさらに北方にも島状の台地が分布している。自然堤防は星川流域に形成され新堀地区や上大崎地区・河原井地区などで認められる。低地は微高地の間に広く発達しており、現在は水田として利用されている。



第１図　埼玉県の地形



第２図　遺跡周辺の地形図

２．歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、多くは台地上にまとまっているが、加須低地の埋没台地でも見つかっている。台地では、伊奈町の向原遺跡では後期旧石器時代前半の石器群が、赤羽遺跡・大山遺跡ではナイフ形石器群が出土している。北遺跡と戸崎前遺跡（41）からは槍先形尖頭器が検出されており、他に蓮田市の天神前遺跡などがある。低地では神ノ木２遺跡（４）・九宮２遺跡（６）ではナイフ形石器を含む石器集中、騎西町の前遺跡（21）で槍形尖頭器を主体とする石器集中が検出された。また石器集中はみつかっていないが下崎中郷遺跡（16）、道上遺跡（20）などがある。

縄文時代早期は、小林八束２遺跡（２）から早期の野島式期の炉穴群が検出されている。伊奈町の薬師堂根遺跡(39)・戸崎前遺跡・大針貝塚(45)、蓮田市のささら遺跡・宮の前遺跡・天神前遺跡・馬込新屋敷遺跡などがあり、天神前遺跡・馬込新屋敷遺跡では炉穴が検出されている。

縄文時代前期は、蓮田市に標式遺跡として著名な関山貝塚と黒浜貝塚がある。元荒川に沿う台地縁辺に宿上貝塚・天神前遺跡、白岡町のタタラ山遺跡・茶屋遺跡がある。騎西町の小沼耕地遺跡（14）では住居跡が検出されている。

縄文時代中期は、九宮１遺跡（５）では住居跡１軒であるが、神ノ木２遺跡では100軒を超える大集落が確認された。丸谷下遺跡（７）は住居跡・Ｔピットが検出された。栢間小塚遺跡（８）は中期～後期にかけての遺跡で土偶・石剣などが出土している。騎西町には萩原遺跡（17）・修理山遺跡（18）などがある。伊奈町には拠点集落の北遺跡・原遺跡（44）は大型環状集落であり、戸崎前遺跡からは住居跡30軒と埋甕が検出された。薬師堂根遺跡（39）は住居跡26軒が検出されている。

縄文時代後・晩期は、後期の小林八束１遺跡からは住居跡・土壙が検出されており、住居跡等から小型の筒型土偶や木菟土偶が出土し、遺跡全体から同時期の土器や石剣などの遺物が出土している。九宮２遺跡は住居跡３軒と埋甕が検出されている。地獄田遺跡（９）では安行式期の住居跡が５軒検出され、土偶・土版が出土している。神ノ木遺跡（３）は土壙が確認されている。その他に、蓮田市の久台遺跡・雅楽谷遺跡・ささら遺跡、白岡町前田遺跡などがある。雅楽谷遺跡では環状盛土が確認されている。桶川市の後谷遺跡（47）は河道状くぼ地から多量の土器・石器・木製品・獣骨などが検出された。

弥生時代の遺跡は少なく、いくつかの遺跡で遺物が少量検出されているが集落はほとんど見つかっていない。神明神社東遺跡（10）は、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡で、遺構は伴わないものの弥生土器が出土している。蓮田市の宿下遺跡では再葬墓２基が検出されている。

古墳時代前期は、小林八束１遺跡から住居跡10軒と方形周溝墓３基が検出された。九宮２遺跡では住居跡３軒が検出されている。丸谷下遺跡からも住居跡１軒が検出されている。蓮田市のささら遺跡では住居跡21軒を検出し、隣接する馬込新屋敷遺跡でも住居跡14軒が検出されている。久台遺跡では方形周溝墓４基が調査され、周溝から完形の壺が複数出土している。その他、騎西町の修理山遺跡では方形周溝墓３基・小沼耕地遺跡では方形周溝墓19基が検出されている。

古墳時代中・後期は、騎西町の萩原遺跡から中期の住居跡１軒、後期の住居跡12軒が検出されている。蓮田市の荒川附遺跡から後期を主体とし住居跡が110軒以上検出されている。

菖蒲町の神明神社東遺跡からも古墳時代の住居跡が確認されている。神ノ木遺跡（３）・神ノ木２遺跡からは中期中葉から後期初頭の方墳跡・円墳跡が確認されている。栢間古墳群には３基の前方後円があり、天王山塚古墳（A）は、全長109m、後円部径55m、前方部幅62m で、円筒埴輪片や須

恵器突帯付甕片から６世紀後葉の築造と推定されている。墳頂には角閃石安山岩が点在している。夫婦塚古墳（Ｅ）は現存長が42mで円筒埴輪が出土している。本村１号墳（Ｉ）は全長約30mで埴輪片が出土している。№14－２号古墳（Ｂ）は円筒埴輪や形象埴輪が出土し、打出塚古墳（Ｃ）・富士塚古墳（Ｄ）・№14－６号墳（Ｆ）・禿塚古墳（Ｇ）・芝原古墳（Ｈ）等の円墳がある。東裏古墳（11）は前方後円墳で口縁部径25mで、白色を帯びた埴輪が出土し、このような埴輪は鴻巣市新屋敷遺跡などの後期初頭の古墳から徐々に見られるようになってくるものである。また、低地を挟んで北東3.3㎞に物見塚古墳（12）があるが詳細は不明である。騎西町の小沼耕地遺跡は墳丘長39mの前方後円墳１基と径15mの円墳が見つかっており、上種足三番遺跡（15）では５基の円墳が検出され埴輪を伴っている。

奈良・平安時代は菖蒲城跡（13）から平安時代の住居跡が１軒確認された。伊奈町の大山遺跡では平坦部に住居跡が約50軒、斜面部に製鉄炉や炭焼窯が検出されている。蓮田市の椿山遺跡からは平安時代の住居跡が50軒ほど見つかっている。

中世は小田原北条氏関連の城がいくつかあるが、菖蒲城と騎西（私氏）城である。菖蒲城跡は小林八束１遺跡の北西に位置し堀跡・土塁が検出され、在地、瀬戸・美濃産陶器、常滑、中国産陶磁器の他に轡・弾丸が出土している。騎西城跡（19）は根古屋城とも呼ばれ、城跡・武家屋敷の調査が行われ溝・土壙・井戸跡・掘立柱建物跡・障子掘が確認された。12～19世紀にかけての遺物が出土し、龍泉窯系青磁・渥美・常滑・瀬戸美濃・中国染付け・在地産陶器等があり、16世紀末から17世紀前半のものが多い。伊奈町の薬師堂根遺跡では溝に囲まれた掘立柱建物跡・土壙・井戸が多数検出され、中世の集落や墓制を考える上での貴重な遺跡である。

第３図　周辺の遺跡（旧石器・縄文時代）

第４図　周辺の遺跡（古墳時代以降）

第１表　周辺の遺跡一覧

菖蒲町	1	小林八束１遺跡	縄（後）、古（前）
	2	小林八束２遺跡	縄（早）
	3	神ノ木遺跡	縄（後）、古（後）
	4	神ノ木２遺跡	縄（中）、古（中・後）
	5	九宮１遺跡	縄（中）
	6	九宮２遺跡	旧、縄（後）、古（前）
	7	丸谷下遺跡	縄（中）、古（前）、平
	8	栢間小塚遺跡	縄（後）
	9	地獄田遺跡	縄（後・晩）、平
	10	神明神社東遺跡	弥、古
	11	東裏古墳	古
	12	物見塚古墳	古
	13	菖蒲城跡	平、中
	栢間古墳群		
	A	天王山塚古墳	
	B	№14－２号墳	
	C	打出塚古墳	
	D	富士塚古墳	
	E	夫婦塚古墳	
	F	№14－６号墳	
	G	禿塚古墳	
	H	芝原古墳	
	I	本村１号墳	
騎西町	14	小沼耕地遺跡	古（前・後）、中
	15	上種三番遺跡	弥、古、奈、平、中
	16	下崎中郷遺跡	旧、縄（中）、奈
	17	萩原遺跡	旧、縄(中・後)、古(中・後)
	18	修理山遺跡	旧、縄(早・中・後)、古(前)
	19	騎西（私西）城跡	中
	20	道上遺跡	旧、縄（早～晩）、古（後）、奈
	21	前遺跡	旧、縄（早・中～晩）
久喜市	22	医王院遺跡	縄（中）、中
	23	江川東遺跡	縄（中）
	24	部井遺跡	縄（後・晩）
	25	不動寺遺跡	縄（中）、古
白岡町	26	嶋岡遺跡	縄（前～中）
	27	上荒井ヶ崎西遺跡	縄（早・中）
	28	柏崎遺跡	縄（中・後）
	29	上荒井ヶ崎遺跡	縄（早・中）
	30	皿沼遺跡	縄（中）、古（前）
	31	下荒井ヶ崎遺跡	縄（中・後）
	32	天神山東遺跡	縄（早～中）
	33	天神山遺跡	縄（早）、古（前）
蓮田市	34	上閏戸貝塚	縄（前）
	35	根金大山遺跡	縄（後）
	36	的場遺跡	縄（中・後）、古、近
	37	井沼遺跡・館跡	縄（中～晩）、中、近
	38	榎戸遺跡	縄（中・後）、古（後）、中、近
伊奈町	39	薬師堂根遺跡	縄（早・中）、古（前）
	40	向原遺跡	旧、縄、古（前）、奈、平、中、近
	41	戸崎前遺跡	縄（早～後）
	42	相野谷遺跡	縄、古（前）、中、近
	43	八幡谷遺跡	中、近
	44	原遺跡	縄（中）
	45	大針貝塚	縄（前）
桶川市	46	新田東遺跡	縄、弥（後）、古（前）
	47	後谷遺跡	縄（後・晩）
	48	堀ノ内Ⅰ遺跡	縄（早・中）

旧＝旧石器時代　縄＝縄文時代　弥＝弥生時代
古＝古墳時代　奈＝奈良時代　平＝平安時代
中＝中世　近＝近世　（早）＝早期　（前）＝前期
（中）＝中期　（後）＝後期　（晩）＝晩期

Ⅲ　小林八束１遺跡の調査

１．遺跡の概要

小林八束１遺跡は、埼玉県の東部、菖蒲町大字小林八束に所在する。菖蒲町役場の南側に造られた調節池の東に位置し、小林八束１遺跡の南方約250m に小林八束２遺跡がある。周辺は、星川、野通川、元荒川を始めとする大小の河川や用水が南東方向に流れ、肥沃な水田地帯を形成している。

この地域を含む低地は、縄文時代以降の関東造盆地運動と呼ばれる沈降現象に伴う沖積土の流入により、起伏に富んだローム台地は現在の水田の下にあり、埋没ローム台地と呼ばれている。遺跡は北を流れる星川によって形成された後背湿地に立地している。遺跡の標高は10m ほどである。

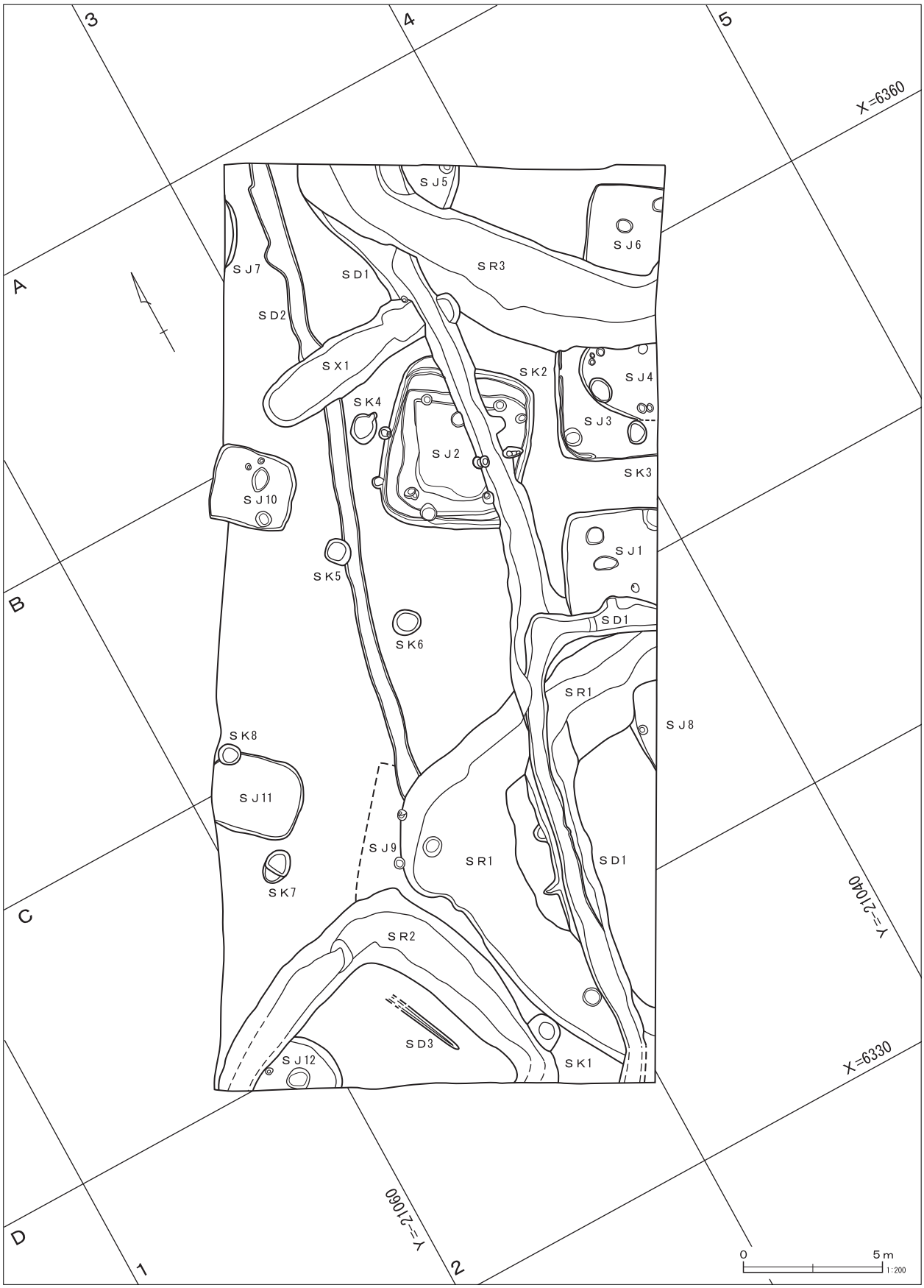
小林八束１遺跡で検出した遺構は、縄文時代後期の住居跡２軒と土壙７基、古墳時代前期の住居跡10軒と方形周溝墓３基、古代から近世の土壙１基、溝跡３条、炭焼窯１基である。遺物は縄文時代後期・古墳時代前期の土器が主体で、遺構からだけでなく調査区全体から出土している。土器のほかに石剣、縄文時代後期の第４号住居跡からは小型の筒型土偶、炭焼窯からは木菟土偶・管玉が出土している。

古墳時代前期の住居跡は、一辺３m～４m 前後の規模のものが主体であるが、第２号住居跡は一辺５m×６m 前後の大型の住居跡である。住居跡は方形周溝墓と重複することによって一部が壊されていることから、集落が形成されていたが集落衰退後に方形周溝墓の墓域へと変遷したとみられる。

方形周溝墓は、３基とも周溝の一部が調査区内に入るのみで全体の大きさは不明であるが、第２号方形周溝墓は一辺10m ほどで、他の２基は第１号方形周溝墓が一辺12m を超え、第３号方形周溝墓は一辺14m ほどの大型のものとみられ、大型の２基には土層断面より墳丘の存在が確認された。また、大型の第１号周溝墓が小型の第２号方形周溝墓を壊して築造されていることから、周溝墓にも時期差があることが確認できた。

炭焼窯は、焚口部が第１号溝に壊されているが、検出規模は長さ８m ほど、幅1.5m、の長楕円形で東側に焚口を持つもので、炭化材が確認されている。炭焼窯からは木菟土偶と管玉が出土している。

溝は２条が調査区を縦断し、縄文時代・古墳時代・中近世の陶磁器が出土し、他の遺構を切っており、第４号土壙とともに本遺跡のなかでは最も新しい遺構である。



第５図　小林八束１遺跡全体図

２．縄文時代の遺構と遺物

（１）住居跡

第４号住居跡（第６～８図）

Ｂ－４グリッドに位置する。東側は調査区域外で、北側は第３号方形周溝墓、西側壁際で第２号土壙と重複し、第３号住居跡が住居跡の上に重複している。土壙との新旧関係は不明であるが、他の遺構より本住居跡が最も古い。全体の１/４ほどの検出である。

平面形は円形を呈すると推定され、確認できた規模は、東西が2.95m、南北が3.30m、深さ５㎝程度を測る。床面には長軸1.8m、短軸1.0mほどの範囲で黒色土の貼床が確認された。その他には炉跡・ピットが検出された。また、炉跡は住居跡中央部に位置すると推定され、北側が第３号方形周溝墓に切られているが、平面形は円形を呈すると推定され、規模は径30㎝を測る。ピットは５基検出され、壁寄りに位置する。平面形はほぼ円形である。規模はＰ１が径25㎝、深さ７㎝、Ｐ２が径16㎝×18㎝、深さ５㎝、Ｐ３が径22㎝×25㎝、深さ４㎝、Ｐ４が径31㎝×37㎝、深さ９㎝、Ｐ５が径25㎝×32㎝、深さ６㎝を測る。

遺物は土器・石鏃・土偶が出土している(第７・８図)。

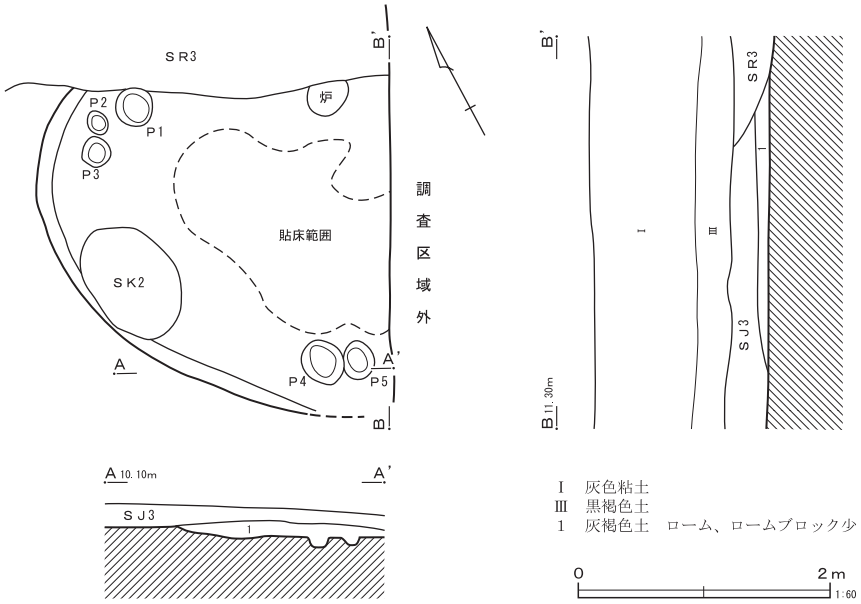
土器（第７図１～53）は縄文時代後期前葉の堀之内２式を主体とする。沈線文を施した１は堀之内１式の可能性もあるが、他には確実な堀之内１式はない。粗製土器・胴部破片の中には判然としないものも含むが、ここではいずれも堀之内２式として捉えておきたい。

２～12・15・16は朝顔形深鉢形土器。２～11は横位の隆帯、２～５は８の字状の貼付文を施す。７は波状口縁土器。一部に隆帯を施す。12・15・16は隆帯を施さない。

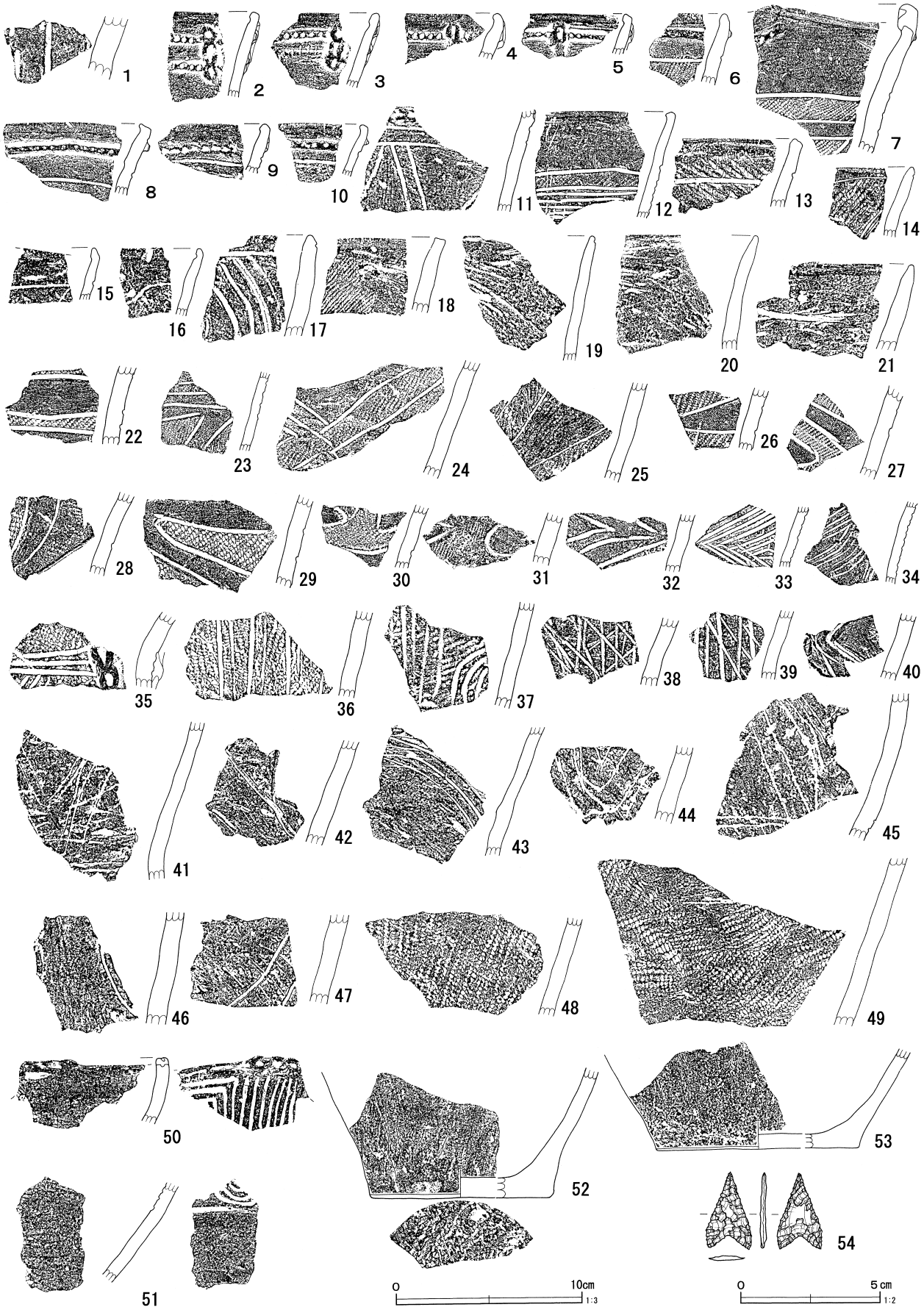
13・14は直線的に立ち上がる形態の深鉢形土器で、地文縄文上に沈線文を施す。13は横線、14は曲線文を施す。17は直立気味に立ち上がる形態の深鉢形土器で横線下に曲線的な文様を施す。一部に縄文を施す。

18は器面全体に縄文を施す深鉢形土器、19～20は無文、21は粗雑な沈線を施す。

22～49は深鉢形土器の胴部破片、52・53は底部である。22～31は沈線間に充填縄文、32～34は沈線文を施した朝顔形深鉢形土器の胴部破片。35～



第６図　第４号住居跡



第７図　第４号住居跡出土遺物（１）

37は地文縄文上に沈線を施す。35は括れを有する形態で８の字状の貼付文を施す。38～47はやや粗雑な沈線文、48・49は縄文のみを施している。

50・51は浅鉢形土器。50は丸みを帯びた形態。口縁部に貼付文、内面に直線的な文様を施す。51は口縁部内面に同心円状の文様を施す。

54は出土した石鏃である。無茎で、基部には逆Ｖ字状に抉りが入る。長さ2.7㎝、幅1.7㎝、厚さ0.2㎝、重さ0.8g で、石質はチャートである。

土偶が１点出土している。第４号住居跡は、古墳時代の第３号住居跡と重複して検出されたため、遺物の出土位置は、把握が困難であった。

検出された土偶は、高さが4.4㎝と小型の筒形土偶であるが、全身像として作られており、胴下半部の最大径が約4.2㎝、頭部と胴部を分ける括れ部までの高さが２㎝強と、二頭身大で下半身が寸詰まりの形状を呈する。

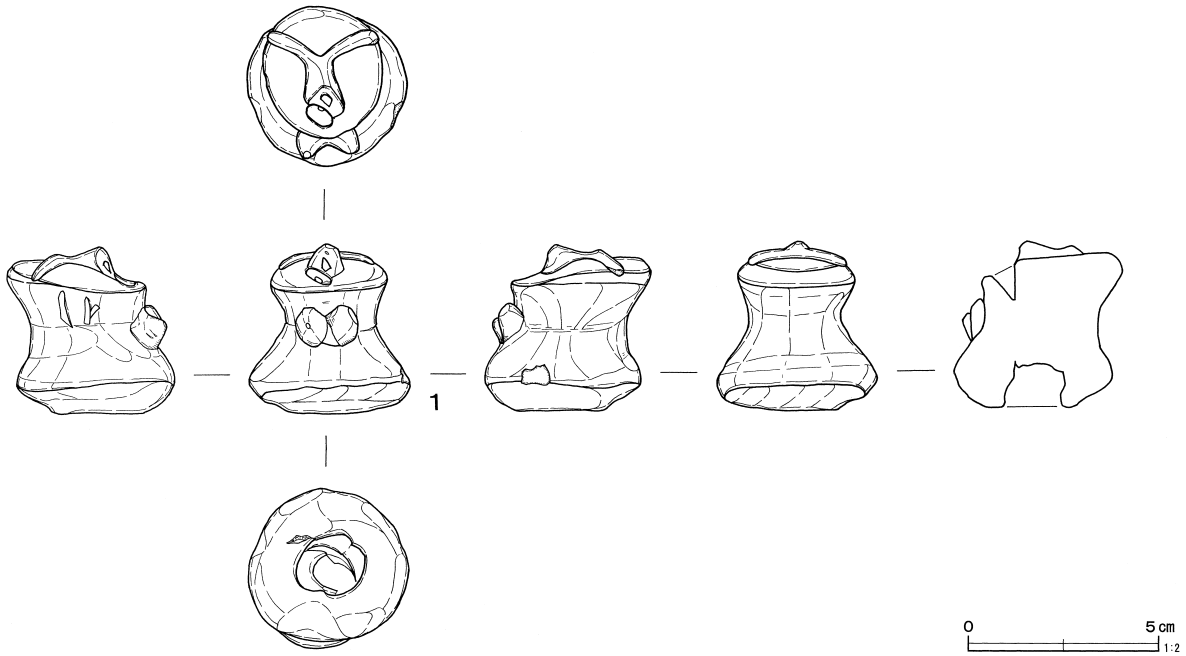
顔面は、最大幅3.1㎝、奥行き3.7㎝と、ほぼ楕円形を呈し、眉と鼻はＹ字状に貼り付けられた粘土で表現される。鼻孔は、小さな刺突で表現される。眼の表現はなく、口は、深さ約８㎜の、ロート状に凹む楕円形刺突で表現されている。

胴下半部は、括れ部に向って円錐状に収束し、括れ部正面の真ん中には、両乳房が近接して貼り付けられる。胴部底面は自然な丸みで表現される。土偶底面のほぼ中央には、径1.5㎝、深さ1.2㎝ほどの凹みが無作為に抉られる。

土偶には文様らしき文様はまったく観られないが、頭部の右側面に、幅２㎜前後の短い沈線が３本観察できる。

土偶の色調は明るい褐色で、焼成もしっかりしている。胎土中には白色および褐色の粒子、輝石などが混じる。

土偶の形態および顔面の表現、乳房の位置や大きさ、口腔がロート状の刺突で表現されていること、底面の開口を意識した凹みが設けられている点などから堀之内２式に伴う筒形土偶の一種と考えられる。



第８図　第４号住居跡出土遺物（２）

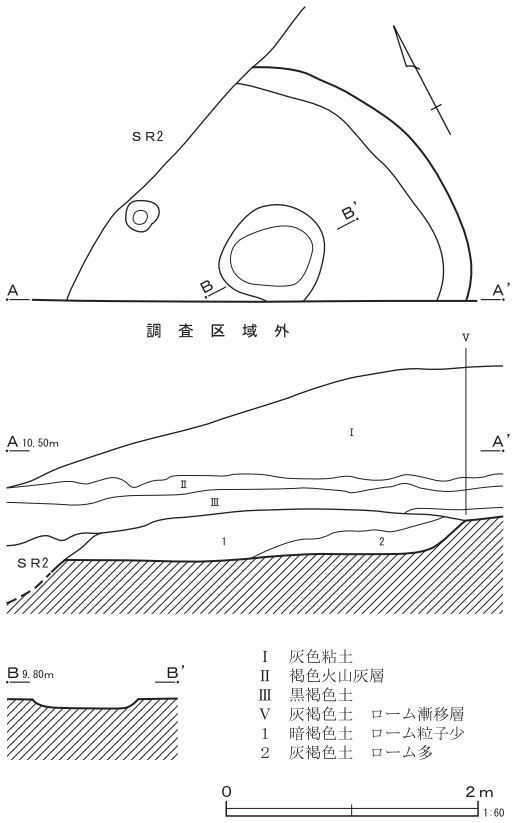
第12号住居跡（第９～13図）

C・D－２グリッドに位置する。南西側は調査区域外で、北側は第２号方形周溝墓と重複し、当住居跡の方が古い。全体の１/７ほどでの検出である。

平面形は円形を呈すると推定され、確認できた規模は東西が3.15m、南北が1.85m、深さ25㎝程度を測る。床面には土壙・ピットが１基ずつ検出されたが、炉跡は確認できなかった。土壙の平面形はほぼ円形で、規模は径75㎝、深さ10㎝を測る。ピットの平面形は円形で径26㎝、深さ11㎝を測る。

遺物は縄文時代後期前葉の堀之内式が出土している（第10～13図）。堀之内１式を含むが、２式を主体としている。第13図３～９以外はいずれも深鉢形土器である。

第10図１は朝顔形の深鉢形土器で、波状３単位の土器である。波頂部には円孔を含む突起を施す。波頂部から隆帯を垂下させて縦位に区画し、地文縄文上に三角形の文様を多条に施している。縄文は単節LR。残存度は20パーセントである。口縁部に沿って１条沈線が施される。第11図９～12・第12図１は同種の土器で、同一個体と思われる。



第９図　第12号住居跡

第10図２は屈曲する括れ部、外反する無文の口縁部を有する深鉢形土器である。胴部最大径以下の土器で、地文縄文上に多条の曲線文を施す。底部は穿孔されている。残存度は30パーセント。

第10図３は胴部で丸みを帯び、直立気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。器面全体に単節LRを横位・斜位に施す。胴部下半は無文である。底部近くを欠損する。残存度は70パーセント。

第11図１～７・９～22・27は地文縄文上に各種の沈線文を施す。１～７は口縁部の破片である。口縁部に沈線を施す土器は５だけで、堀之内１式の典型的な口縁部形態が認められない。７は口縁部に沿って、点文を施す。９～13は朝顔形の深鉢形土器である。14～22・27は地文縄文上に沈線を施した胴部破片である。

第11図８は屈曲する括れ部、外反する無文の口縁部を有する深鉢形土器と思われる。円文を口縁部内外面に施す。

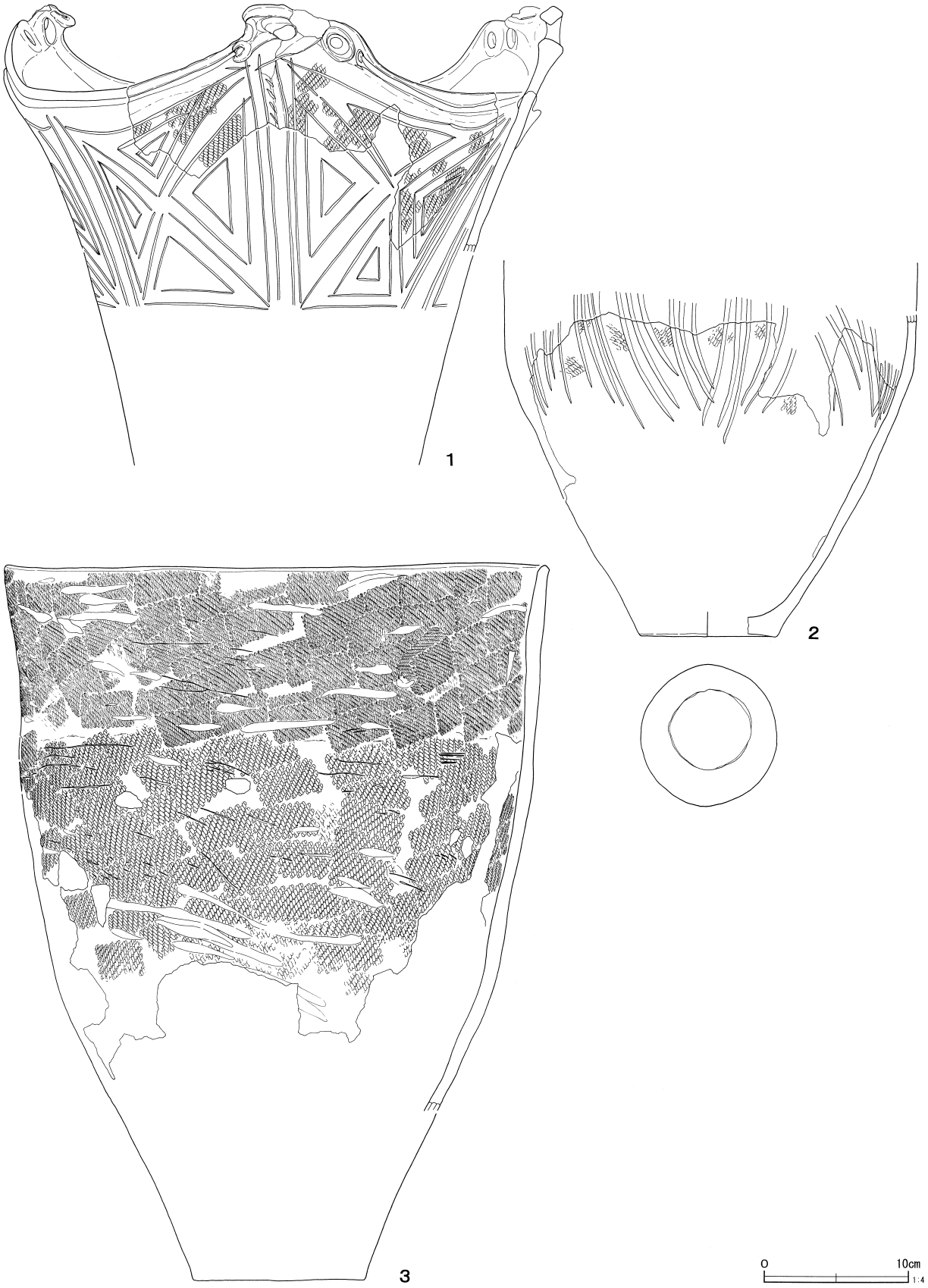
第11図23～26・28～36は沈線間に縄文を充填施文する。弧状の沈線、縦位の沈線を施す。

第11図37～47は沈線のみの施文による土器である。37は横位と縦位、38は縦位と斜位、39・43・45・47は縦位の沈線を施す。40は弧線を斜沈線でつなぐ、41・42は称名寺式の流れを汲む文様、44・46は粗雑な格子目文を施す。

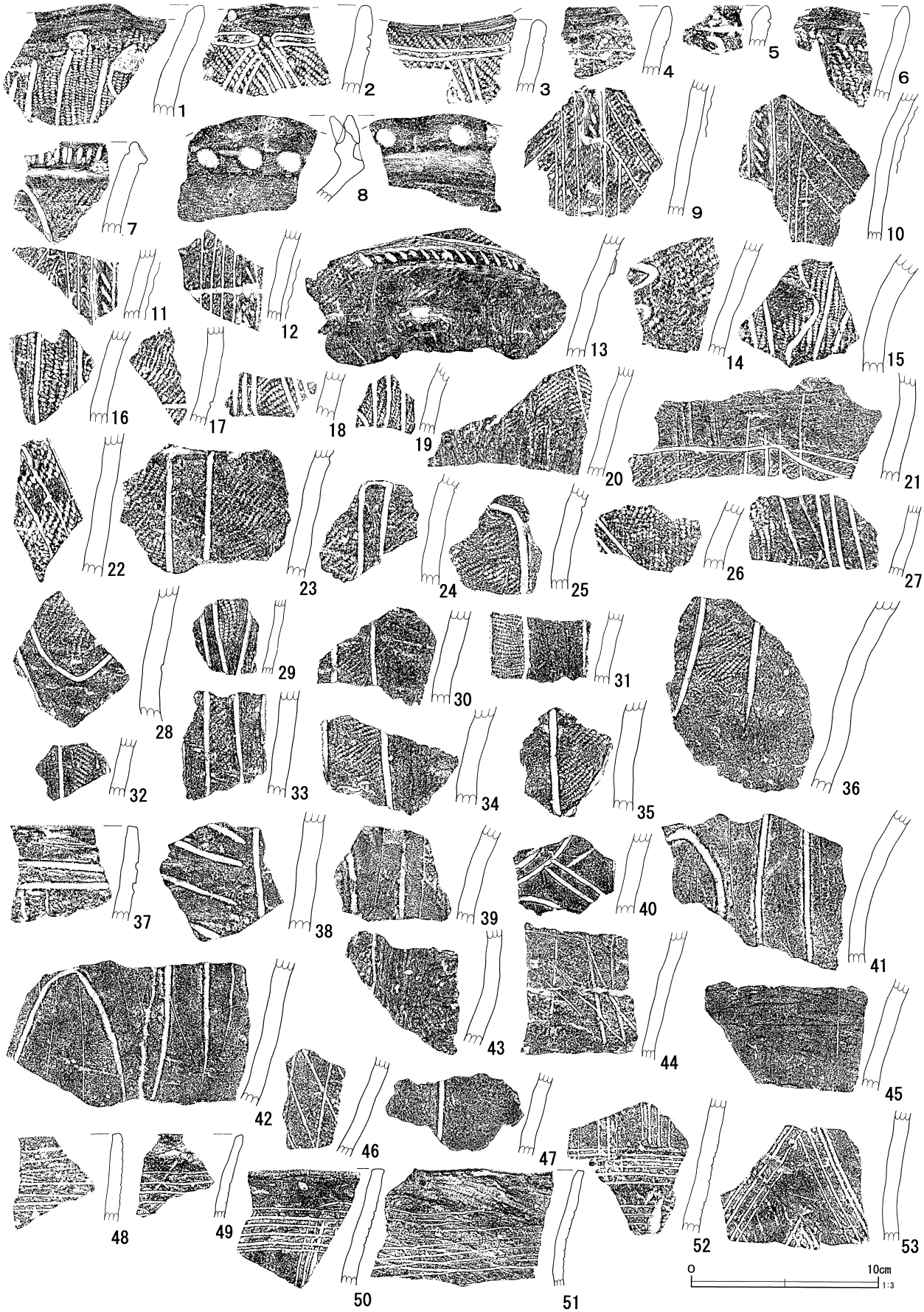
第11図48～53は櫛歯状工具による文様を施す土器である。48～51は口縁部破片でいずれも横位の文様を施す。50・52は横位に加え、縦位にも文様を施す。53は斜位に施す。

第12図には朝顔形の深鉢形土器をまとめた。

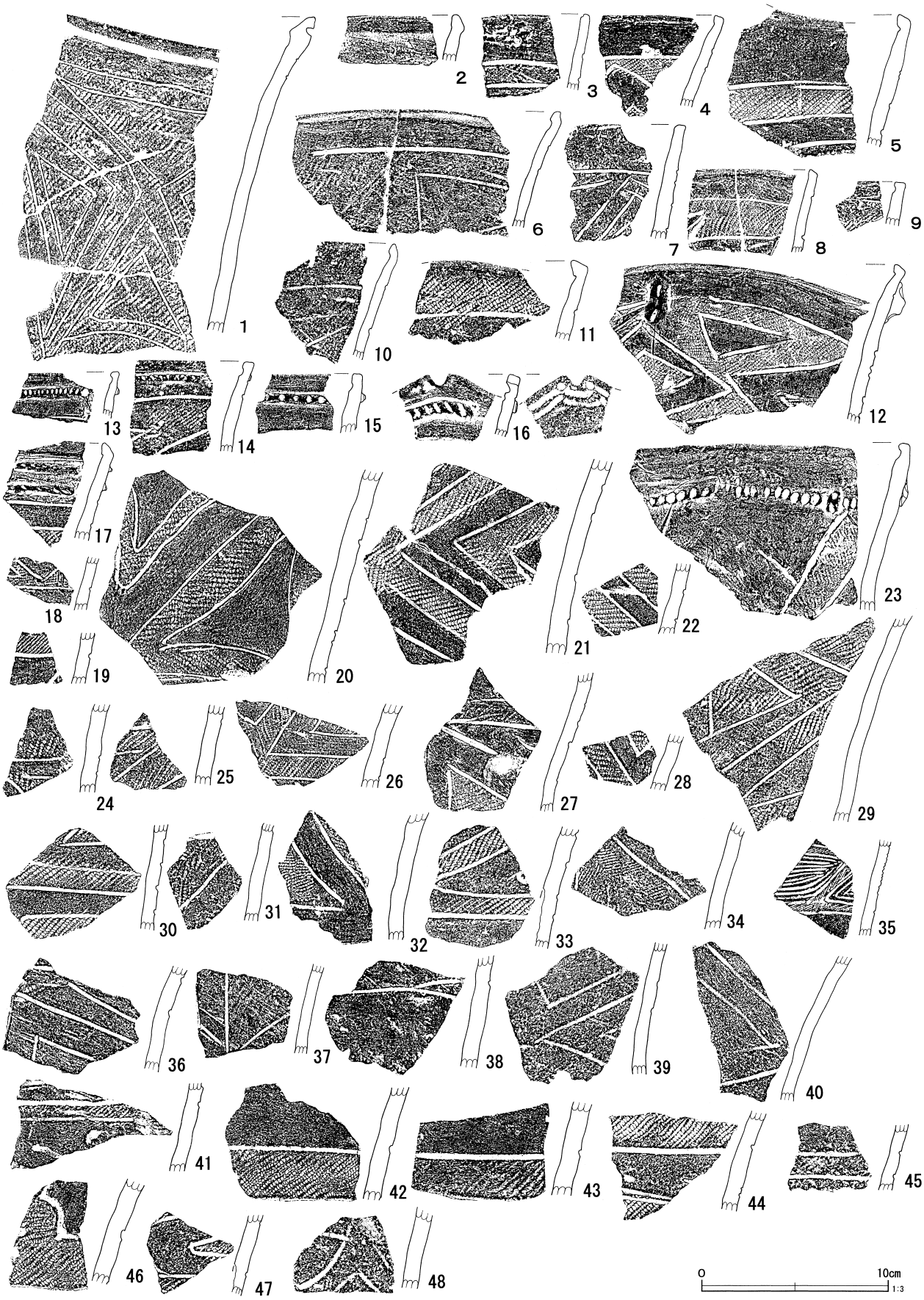
第12図１は先の第10図１、第11図９～13と同種の土器で堀之内１式である。第12図２は口縁部に段差が巡る。



第10図　第12号住居跡出土遺物（１）



第11図　第12号住居跡出土遺物（２）



第12図　第12号住居跡出土遺物（３）

第12図３～12は堀之内２式の朝顔形深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部の隆帯がなく、堀之内２式でも古い段階のものと考えられる。11は本来の縄文施文部と磨消部が反転した構成をとる。12は８の字状の貼付文を施す。

第12図13～17・23は朝顔形深鉢形土器の口縁部破片のうち口縁部に隆帯が巡る土器である。16は内文、17は２条の隆帯を施す。

第12図18～22・24～48は朝顔形深鉢形土器の胴部破片である。18～22・24～40は三角形、菱形の文様を施す。29は地文縄文上に沈線を施した古い様相を示す。18～22・24～28・30～37・40は沈線間に縄文を充填、38・39は沈線のみの施文である。41～45は横線間に縄文を充填施文する。46～48は曲線的な文様を施す土器である。

第13図１・２は胴部にゆるい膨らみをもつ深鉢形土器の胴部下半の破片である。１は横位区画下端の横線が認められる。２もやはり横位区画下端の横線・充填縄文が認められる。

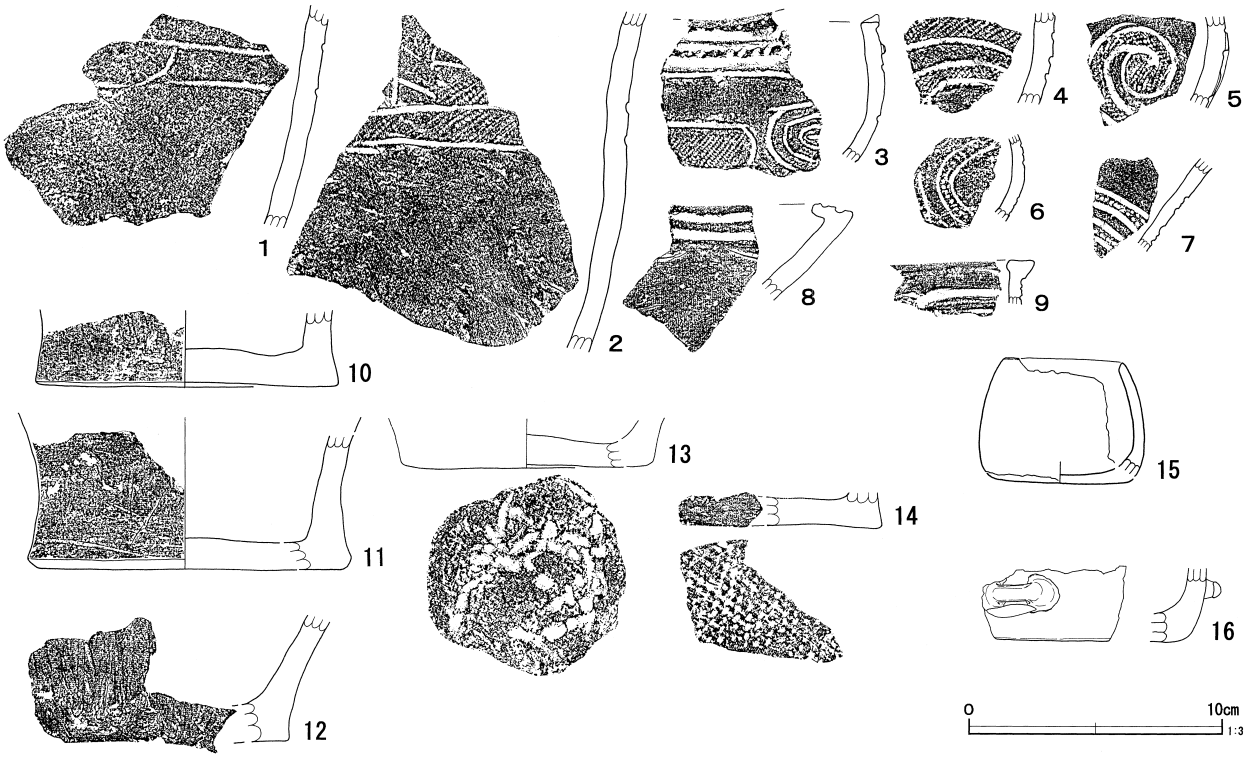
第13図３～５は体部に丸みを帯びて立ち上がる形態の浅鉢形土器である。３は口縁部に隆帯を巡らせる。曲線的な文様を施し、縄文を充填施文する。

第13図６は沈線間に刺突を施す。注口土器と思われる。第13図７～９は浅鉢形土器である。７は沈線間に刺突を施す。８・９は口縁部に沿って沈線を施す。

第13図10～14はいずれも深鉢形土器の底部である。

第13図15・16は小形の土器である。15は口縁部から底部付近にかけての土器で、全体に内湾する形態。残存度は30パーセントである。16は底部付近の破片で橋状の把手を施す。

第10図１・２、第11図５・９～13、第12図１は堀之内１式と思われるが、その他は堀之内２式が主体を占めると考えられる。



第13図　第12号住居跡出土遺物（４）

（２）土壙

第１号土壙（第14・15図）

Ｄ－２グリッドに位置する。西側が第２号方形周溝墓に切られ、東側は第１号方形周溝墓と接している。平面形は不明であるが、規模は南北方向が1.20m、確認できた東西方向は0.9m、深さ0.75mを測る。

遺物は第15図１～31に示した。後期前葉の堀之内式土器である。１～29・31は深鉢形土器、30は鉢形土器と思われる。

１～10は縄文の施文がない土器である。１～４は口縁部の破片である。１・３は沈線文と点文、２・４は沈線文を施す。５～10は沈線文のみを施す胴部破片である。９・10は朝顔形の深鉢形土器である。

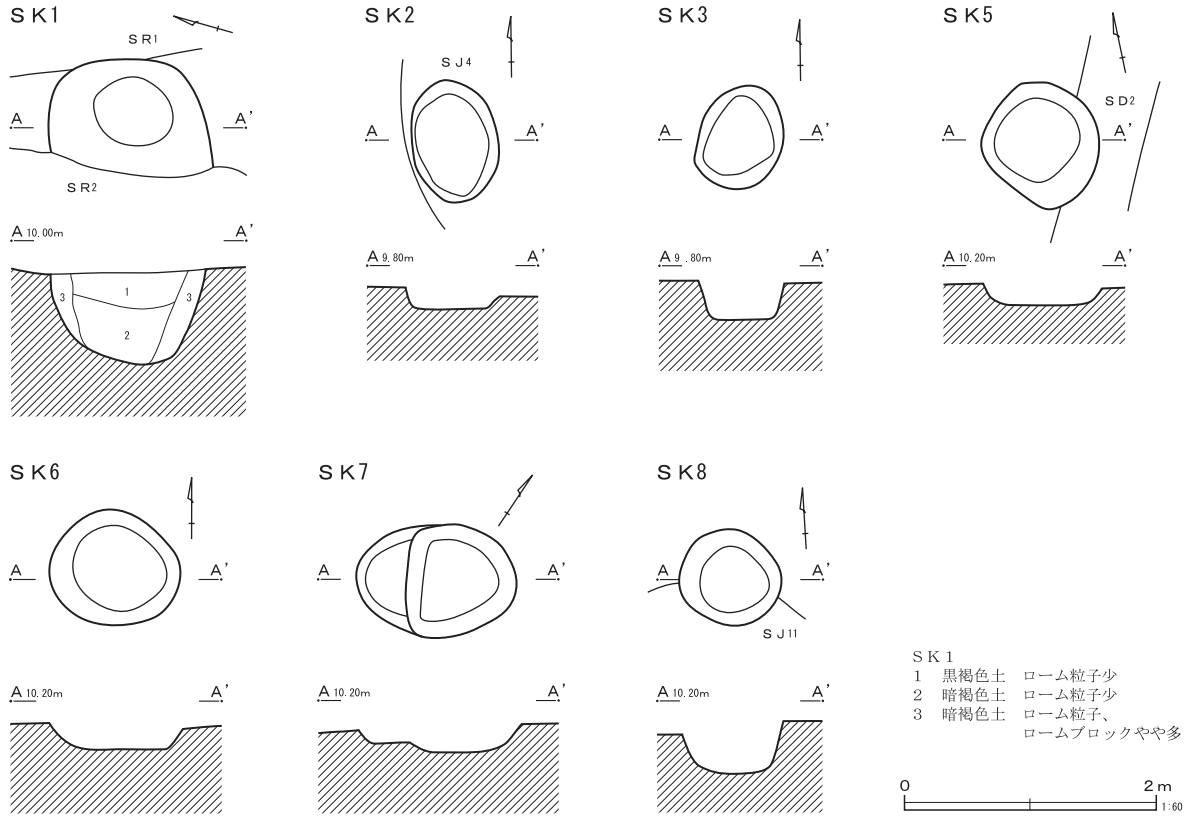
11は地文縄文上に縦位の隆帯と多条の沈線を施した朝顔形の深鉢形土器。12は屈曲する形態の土器で、磨消部がある。13～20は縄文、沈線文を施す胴部破片である。21～26は縄文のみを施す胴部破片である。

27～29は無文の口縁部破片である。30は口縁部に沿って、沈線文と点文を施す。31は無文の底部である。

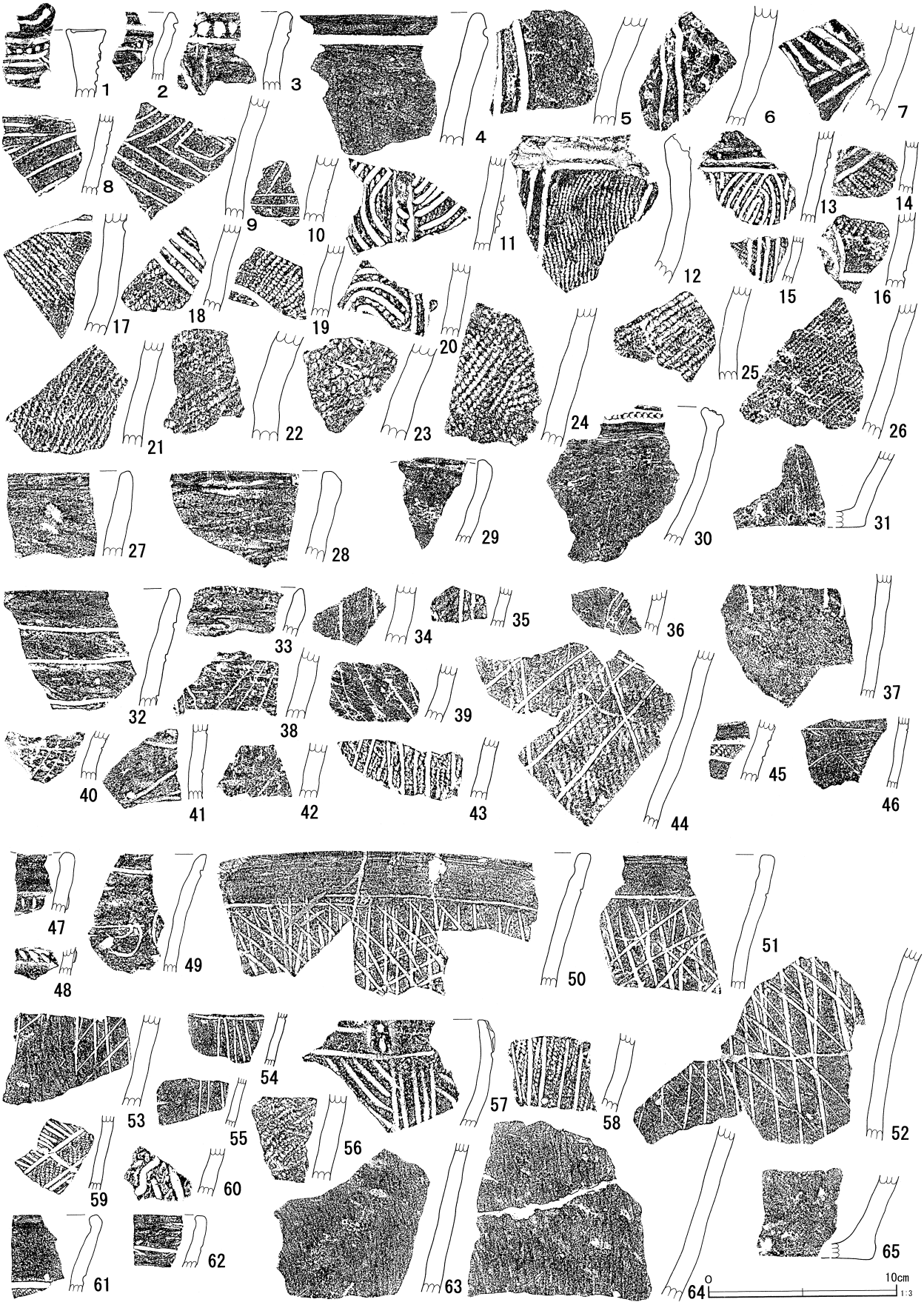
第２号土壙（第14・15図）

Ｂ－３・４グリッドに位置する。第３・４号住居跡と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.98m、短軸0.68m、深さは第４号住居跡の床面より0.60mを測る。覆土は１層のみで暗褐色土にローム粒子・ロームブロックを含むものである。主軸方位はＮ－８°－Ｗを指す。

遺物は第15図32～46に示した。後期前葉の堀之内式土器が出土した。いずれも深鉢形土器である。32～42は沈線文のみを施文する。43・44は地文縄文上に沈線文、45・46は沈線間に縄文を充填施文



第14図　土壙



第15図　土壙出土遺物（1）

する。

第３号土壙（第14・15図）

B－４グリッドに位置する。第３号住居跡と重複し住居跡下から検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.85m、短軸0.68m、深さ0.30mを測る。覆土は１層のみで暗褐色土にローム粒子・ロームブロックを含むものである。主軸方位は、N－22°－Wを指す。

遺物は第15図47～65に示した。後期前葉の堀之内式土器が出土した。いずれも深鉢形土器である。47・48は口縁部に沿って沈線間の点文、49は沈線が巡る。50・51は横線下に粗雑な格子目文を施す。52・53も粗雑な格子目文を施す胴部破片である。54・55・57は沈線文、58は地文縄文上に沈線文を施す。57は丸みを帯びた形態の土器で、口縁部に８の字状の貼付文を施す。59・60は沈線、縄文を施文する。61・62は朝顔形の深鉢形土器である。63～65は無文部の破片である。

第５号土壙（第14・16図）

B－２グリッドに位置する。第２号溝と重複し、東側が壊されていたが溝の深度が浅く全体を検出できた。平面形はほぼ円形を呈し、規模は長径0.10m、短径0.90m、深さ0.16mを測る。覆土は１層のみで暗褐色土にローム粒子・ロームブロックを含むものである。主軸方位は、N－０°－Eを指す。

遺物は第16図１～７に示した。後期前葉の堀之内式土器が出土した。いずれも深鉢形土器である。１は口縁部に沿って沈線を施す。２は口縁部近くの破片で、内面に沈線を施す。３は沈線のみを施す。４・５は地文縄文上に沈線を施す。４は底部付近の破片である。６は沈線間に縄文を充填施文する。７は底部である。

第６号土壙（第14・16図）

B－２・３グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、規模は長径0.10m、短径0.90m、深さ0.70mを測る。覆土は１層のみで暗褐色土にローム粒子・ロームブロックを含むものである。主軸方位は、N－62°－Wを指す。

遺物は第16図８～11に示した。後期前葉の堀之内式土器が出土した。いずれも深鉢形土器である。８は無文土器の口縁部。９は沈線文、11は縄文を施文する。10は底部付近の破片である。

第７号土壙（第14・16図）

C－２グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.26m、短軸0.89m、深さは途中で段差を有し北東側が深くなり、浅い部分は0.08m、深い部分は0.22mを測る。覆土は１層のみで暗褐色土にローム粒子・ロームブロックを含むものである。主軸方位は、N－56°－Wを指す。

遺物は第16図12～47に示した。後期前葉の堀之内式土器が出土した。いずれも深鉢形土器。

12～14は沈線文のみを施す。12は口縁部に沈線が巡る。

15～18・25・27は地文縄文上に沈線文を施す。

19は横線下に縄文を施す。

20～24・28～30は沈線間に縄文を充填施文する。

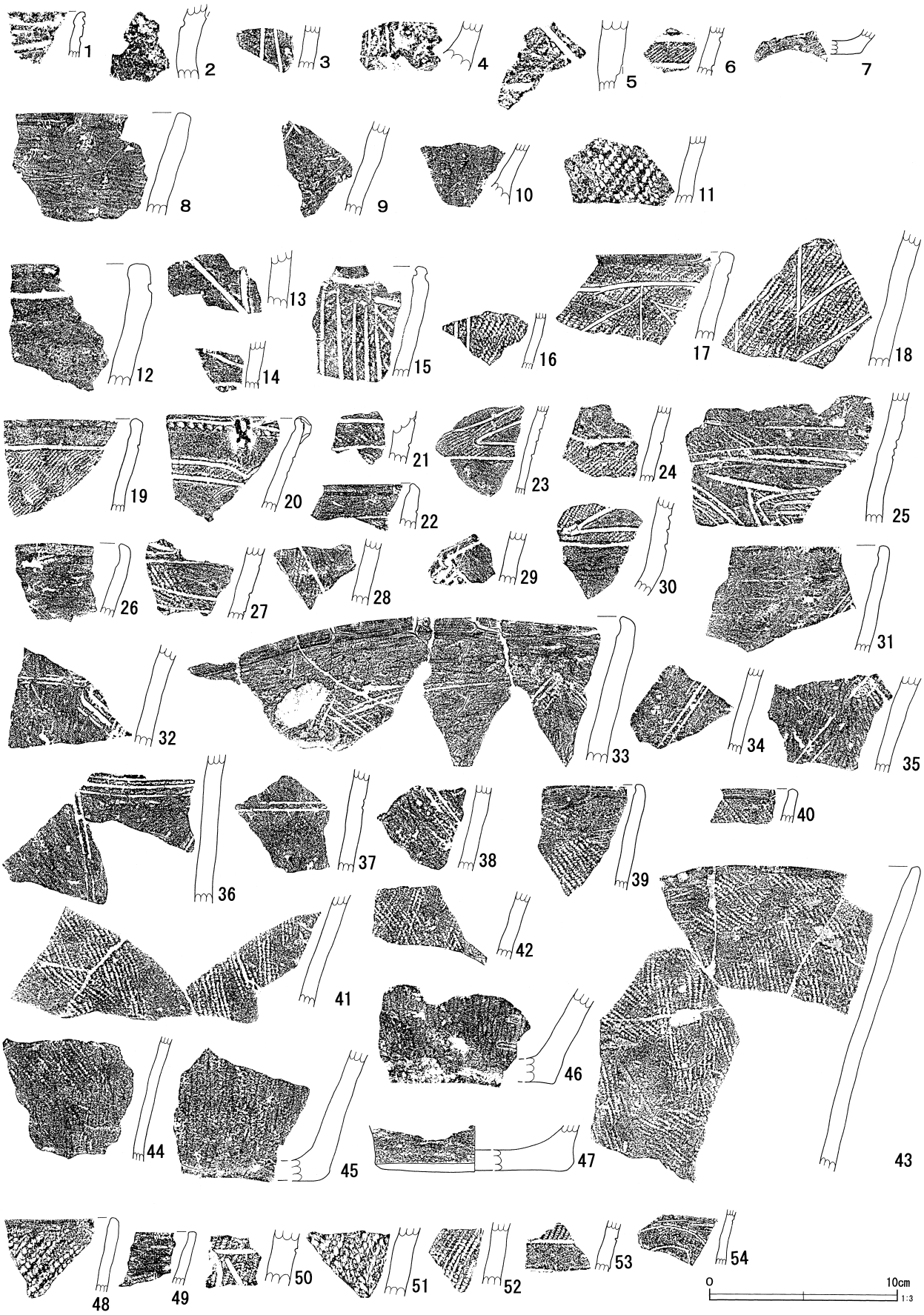
26は無文土器の口縁部破片である。

31～38は櫛歯状工具による文様や細沈線を施す土器である。39～44は縄文のみを施す土器である。45～47は底部である。

第８号土壙（第14・16図）

B－２グリッドに位置する。第11号住居跡と重複し、第11号住居跡に切られている。平面形はほぼ円形を呈し、長径0.80m、短径0.75m、深さ0.35mを測る。覆土は１層のみで暗褐色土にローム粒子・ロームブロックを含むものである。主軸方位はN－56°－Wを指す。

遺物は第16図48～54に示した。後期前葉の堀之内式土器が出土した。いずれも深鉢形土器である。48・49は口縁部の破片である。48は縄文のみを施す土器である。49は無文の土器である。50～54は胴部の破片である。50・54は地文縄文上に沈線文、51・52は縄文、53は横線間に縄文を充填施文する。



第16図　土壙出土遺物（２）

（３）グリッド出土遺物

出土土器（第17～23図）

縄文土器は後期の堀之内式を主体とし、早期から晩期の土器を含む。

第Ⅰ群土器（第17図１～26）

縄文時代早期後葉の条痕文系土器群を一括する。胎土に繊維を少量含み、内外面に条痕整形、もしくは擦痕整形を施す。

１は縦位区画をさらに斜位の並行細沈線で区画する。区画内に押引状の集合太沈線文を充填施文する。野島式と思われる。

２～４は口縁部破片で、２・３は波状口縁を呈する。２はやや先細りする丸頭状口唇部に、丸棒状工具でやや斜位の押圧による刻みを施す。条痕は外面横位、内面縦位に施す。３は口縁部が若干外反する器形を呈し、丸棒状工具の刻みを斜位に施す。条痕は内外面とも横位から斜位に施す。４は先細り状に尖る口唇部に、繊維の茎状工具による２連の刺突文を押引文状に施文する。内外面に、縦横の条痕を施す。

５～26は胴部破片。５～11は内外面に擦痕状もしくは細かな条痕整形を施し、繊維を若干含むものが多い。12～26は内外面に条痕整形を施す。12～18・21は比較的明瞭な条痕。他は内面の条痕整形が弱い。いずれも繊維を若干含むが堅緻な土器で、19は繊維をほとんど含まない。

第Ⅱ群土器（第17図27～38）

中期後葉の土器群を一括する。

27～37は口縁部文様帯をもつ加曽利Ｅ式系のキャリパー系土器群である。27は内湾しながら開く口縁部文様帯に隆帯の渦巻文と楕円区画文から成るモチーフを構成する。28は２本隆帯で口縁部に渦巻文を構成する。口縁部文様帯の地文には、単節 RL を横位施文する。

29～34は胴部破片で、沈線懸垂文や蛇行沈線懸垂文が垂下する。地文は33が複節 LRL の縦位施文以外、単節 RL の縦位施文である。

35は磨消懸垂文を垂下するもので、地文は単節 RL の縦位施文である。また、36は地文条線上に沈線懸垂文を垂下するもので、37は隆帯文区画内に単節 RL を充填施文するものである。

38は両耳壷系の土器。把手部分は剥落。頸部文様帯を持ち、区画内に沈線を施文する。

以上、加曽利Ｅ式の後半段階のものが多いが、27～34は磨消縄文が成立する以前のＥⅡ式段階、他は磨消縄文の成立以後のＥⅢ式段階に比定されるものと思われる。

第Ⅲ群土器（第18図～第22図、第23図１～26・39～41）

縄文時代後期前葉から中葉の土器群を一括する。堀之内式を主体とする。

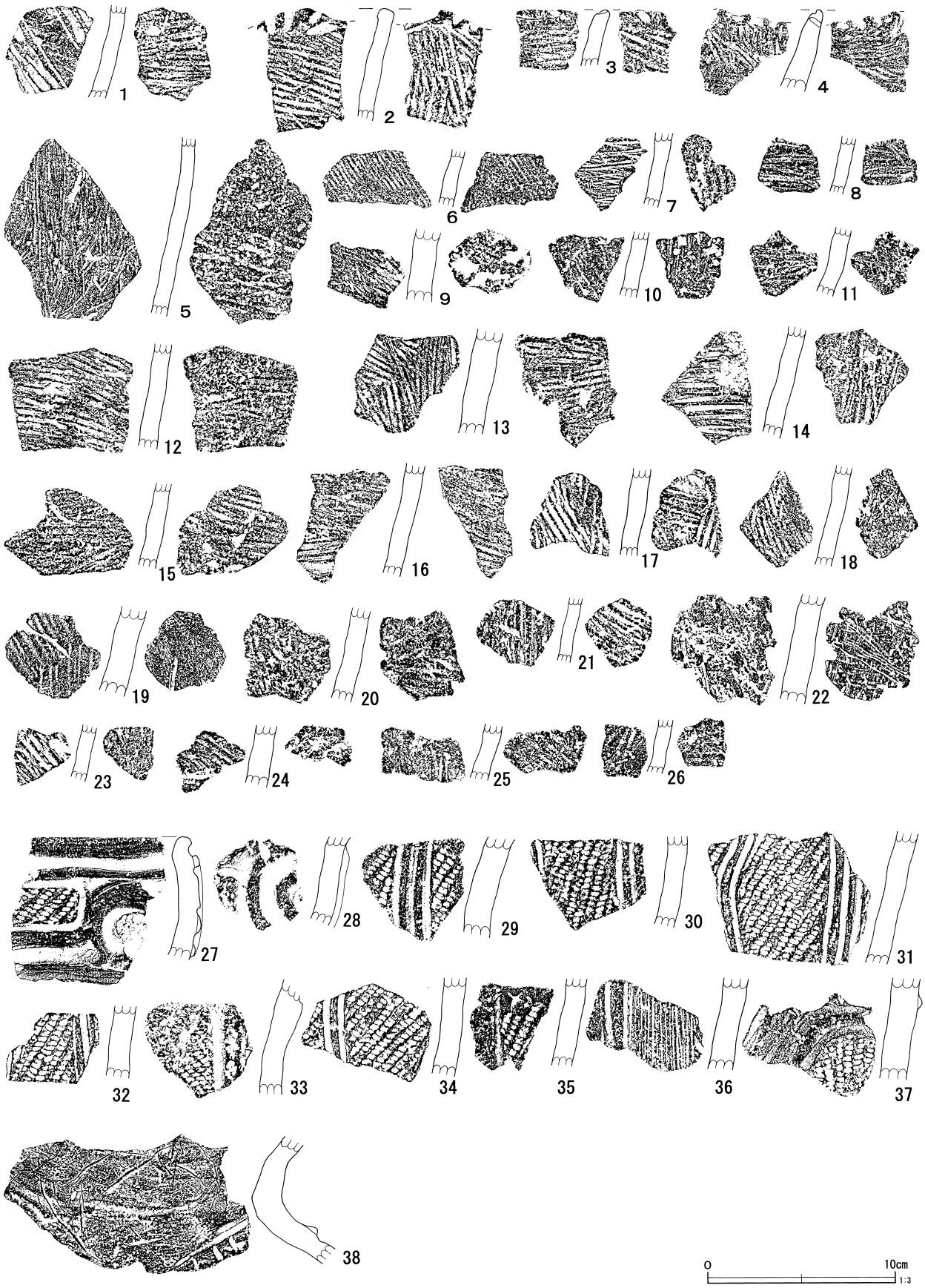
第18図１～10、第19図36～46は地文縄文を施さない土器。称名寺式からの系統を引く土器を含む。36～46は胴部破片である。堀之内１式。

第18図11～28は屈曲する括れ部、外反する無文の口縁部を有する土器群と思われる。26～28は括れ部の破片である。堀之内１式。

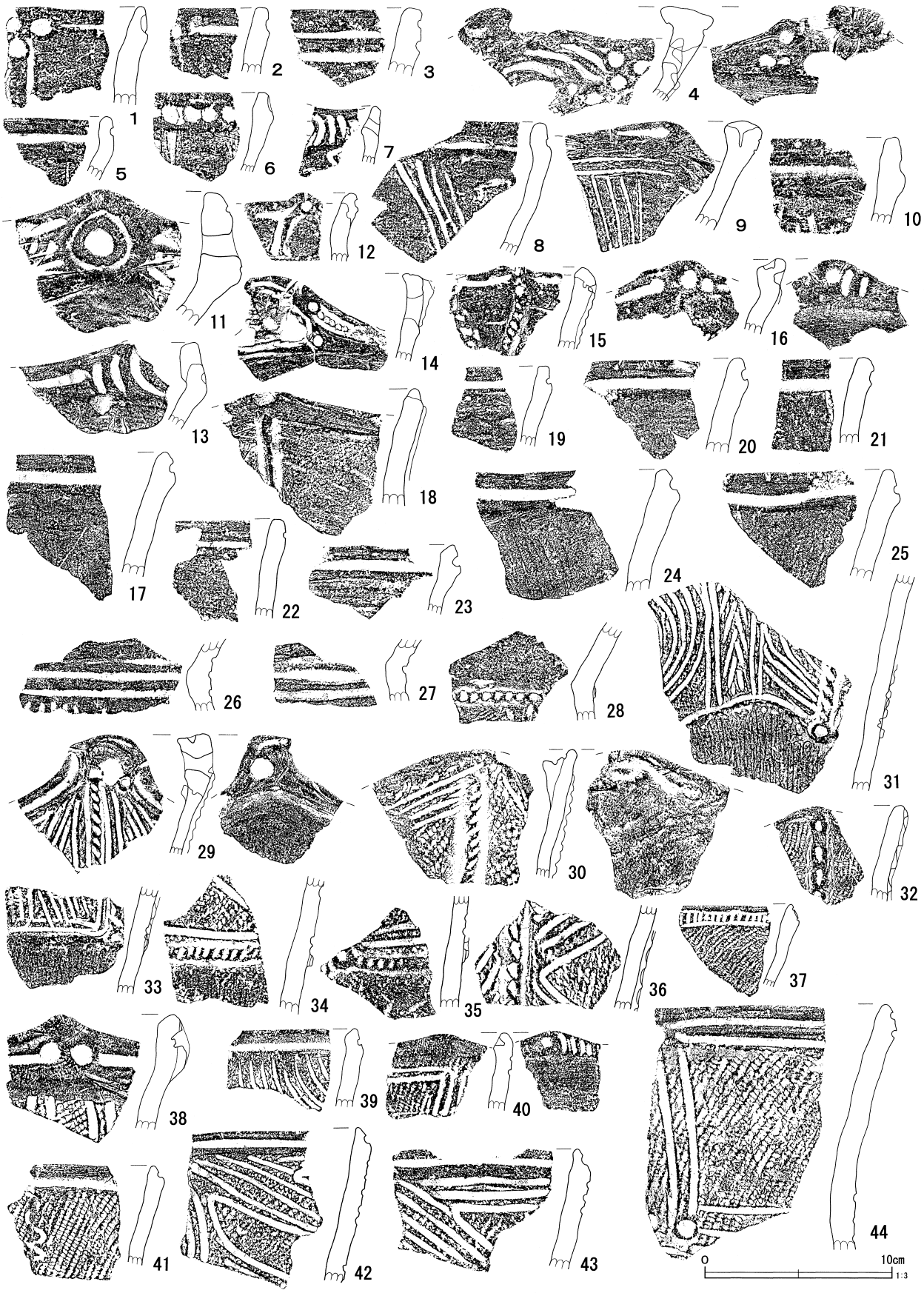
第18図29～44、第19図１～35は地文縄文を施す土器群である。堀之内１式である。第18図29～36は朝顔形の深鉢形土器で、縦位の隆帯を施す。第18図37～44、第19図１～24はゆるく括れる形態のものや括れをもたず口縁部が直立気味に立ち上がる形態のもの。第19図25～35は胴部破片である。

第19図47～51、第20図１～32は朝顔形の深鉢形土器のうち、口縁部に横位の隆帯を施さない土器群である。堀之内２式。後述する隆帯を施すものよりも総じて古い段階の土器が多いが、第20図32のように内文を施す新しい段階のものも含む。第19図47・48・50・51、第20図１・３は地文縄文上に各種の沈線文を施しており、古い段階の様相を示している。それ以外は沈線間に縄文を充填施文する。

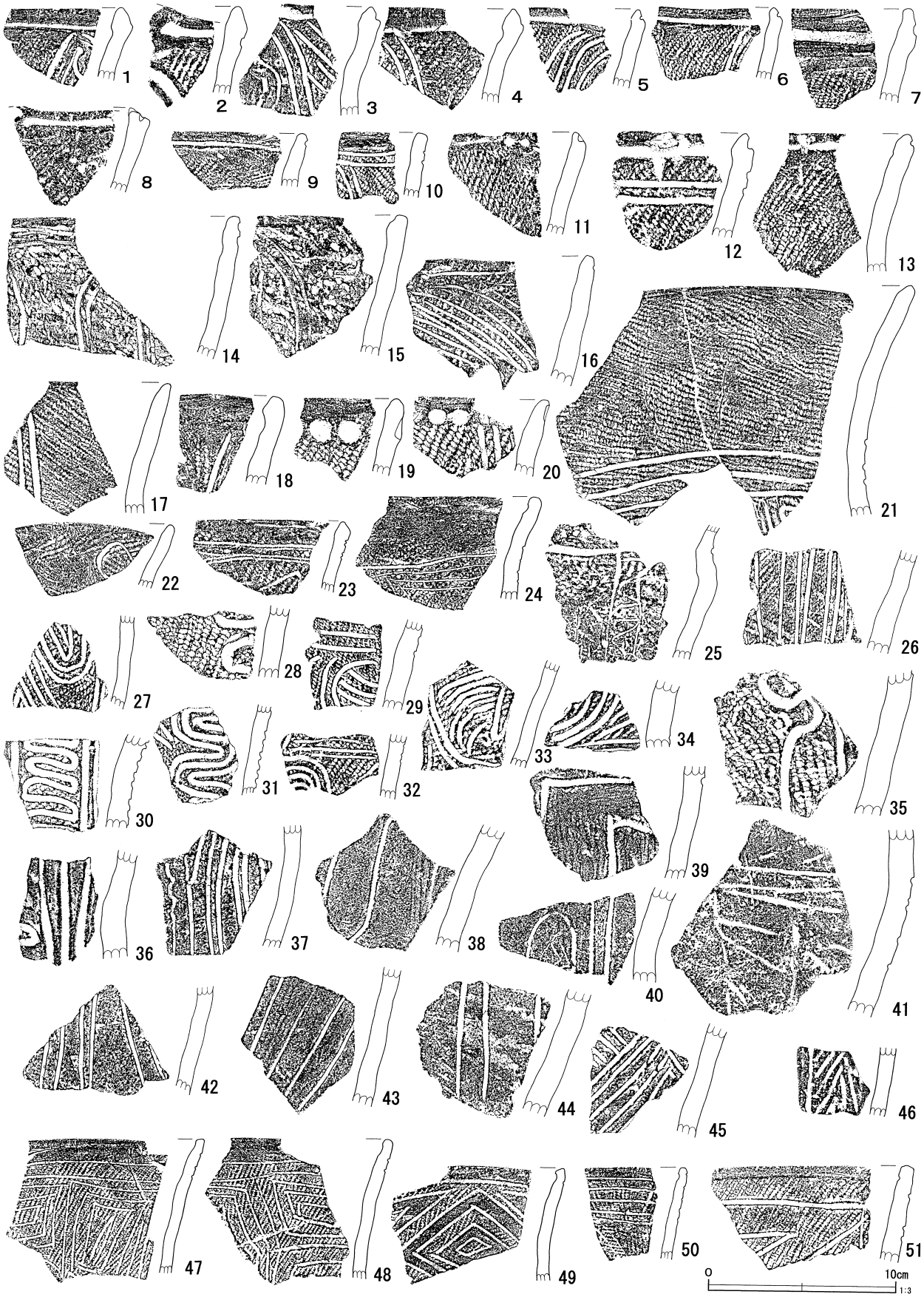
第20図33～52、第21図１～16は朝顔形の深鉢形



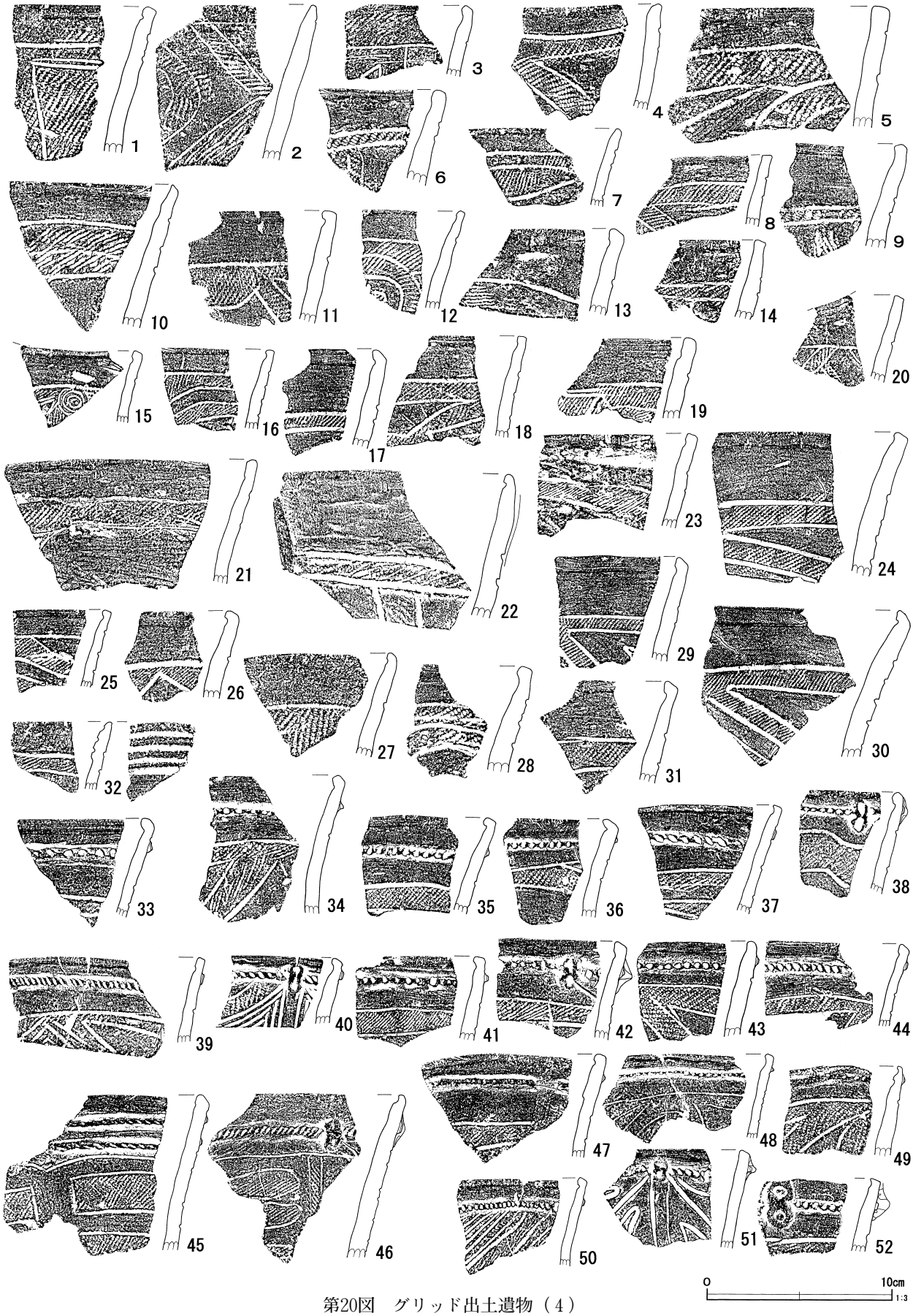
第17図　グリッド出土遺物（1）



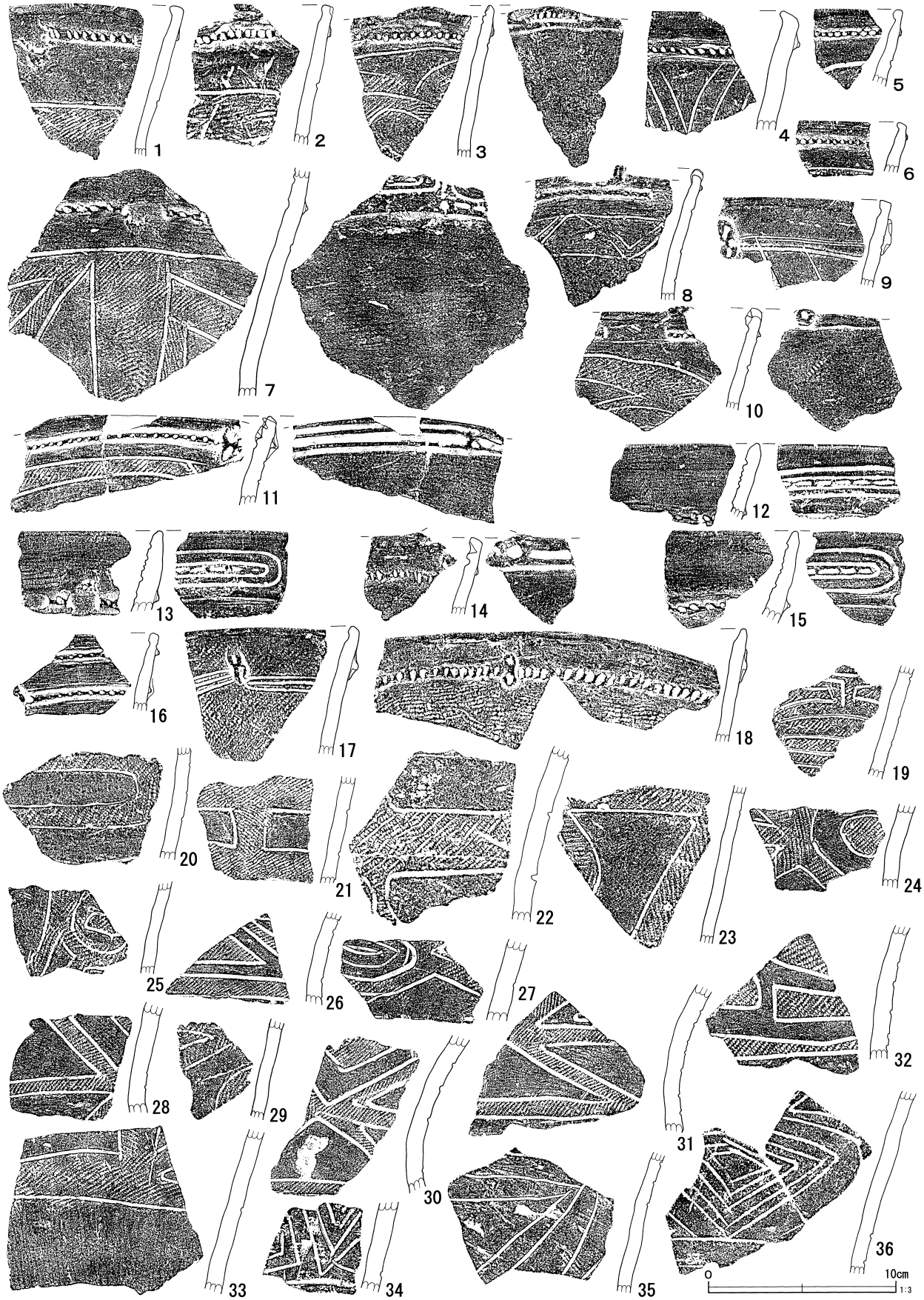
第18図　グリッド出土遺物（２）



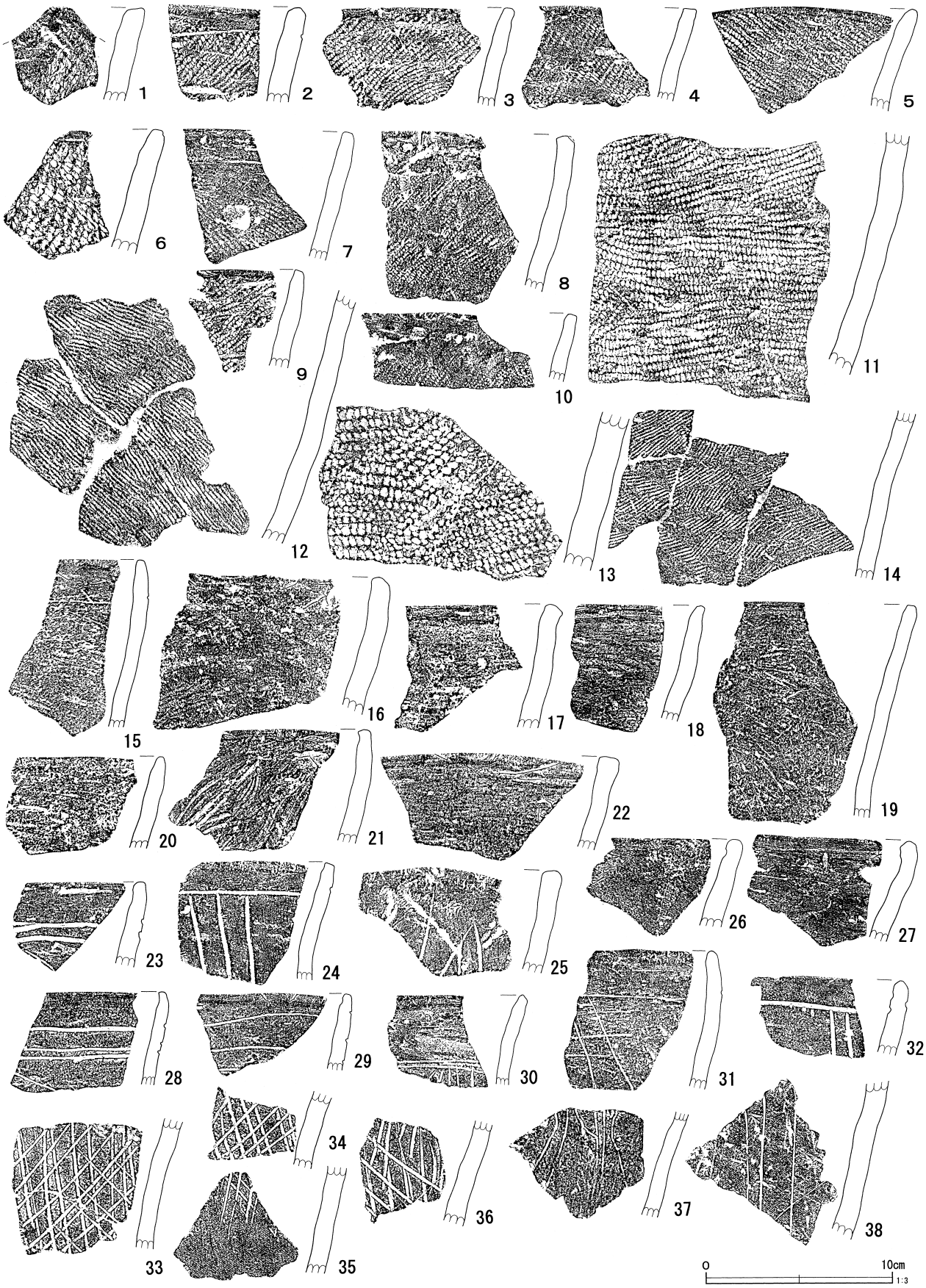
第19図　グリッド出土遺物（3）



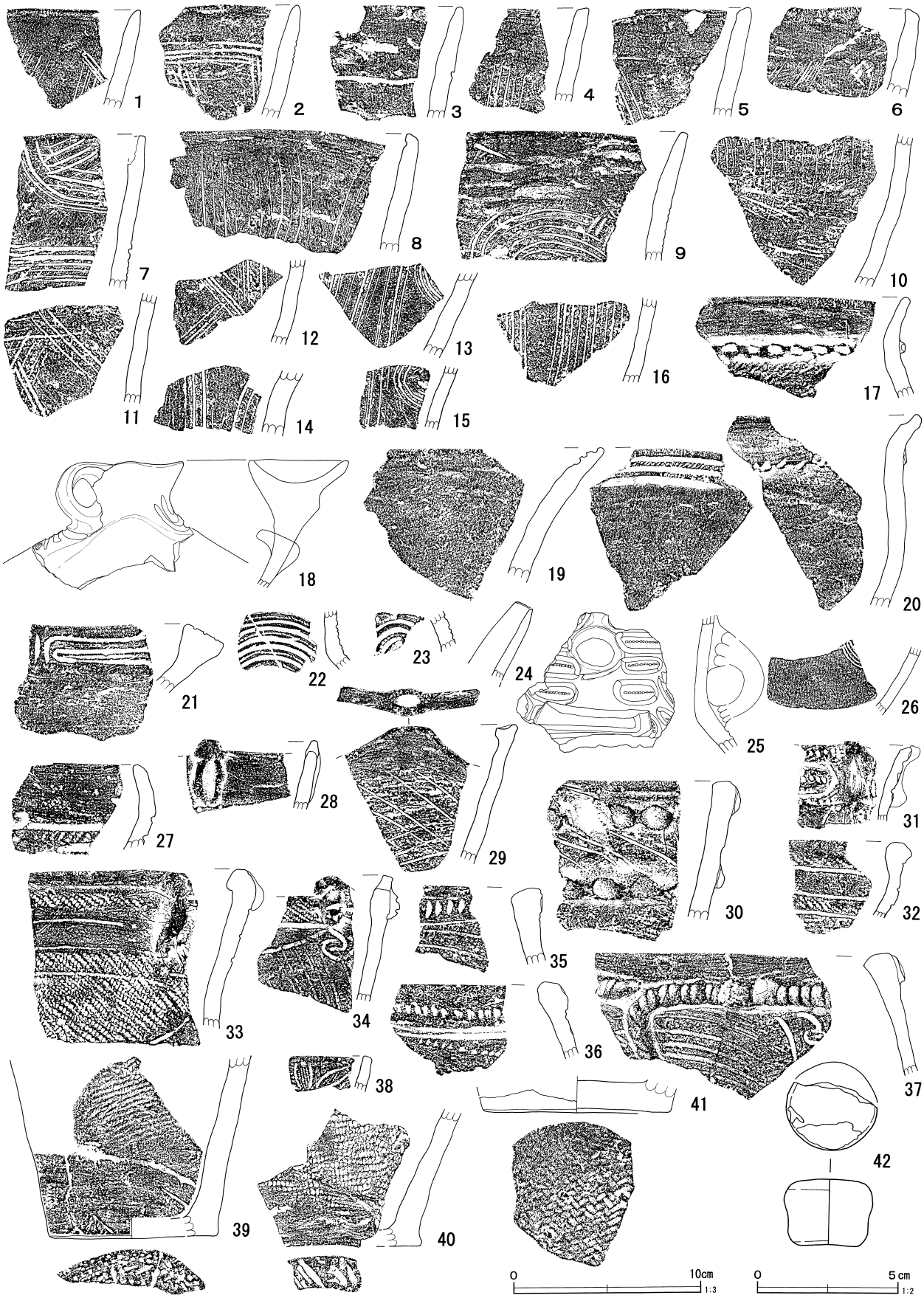
第20図　グリッド出土遺物（４）



第21図　グリッド出土遺物（５）



第22図　グリッド出土遺物（６）



第23図　グリッド出土遺物（7）

のうち口縁部に横位の隆帯をめぐらせる土器群である。隆帯下に各種の文様を施す。縄文は沈線間に充填施文する。50は多条の沈線と縄文を施す。第21図11～15は内文を、16は２条の隆帯を施す。堀之内２式。

第21図17・18は器面全体に縄文を施す土器である。17は８の字状貼付と３条の横線、18は８の字状貼付と隆帯を施す。堀之内２式。

第21図19～36は朝顔形深鉢形土器の胴部破片である。各種の文様を施す。19は地文縄文上に沈線文を施す。20～33は沈線間に縄文を充填施文する。34～36は縄文を施さず沈線のみの施文である。堀之内２式。

第22図・第23図１～16は粗製の深鉢形土器である。単純な形態、ゆるく括れる形態の土器である。いずれも堀之内式と思われる。

第22図１～14は器面全体に縄文のみを施す土器である。第22図15～22・26・27は無文の深鉢形土器である。第22図23～25・28～38は各種の沈線文を施す。第23図１～26は櫛歯状工具による直線文・曲線文を施す。

第23図17～26はその他の形態や深鉢形以外の器種である。18は堀之内１式、他は堀之内２式である。17・20は口縁部近くで括れ、口縁部が外傾する形態。括れ部に隆帯を巡らせ、17は隆帯以下に縄文を施す。18・19・21は浅鉢形土器、22～26は注口土器である。

第23図27～30は後期中葉の加曽利Ｂ式である。27は鉢形土器。28～30は深鉢形土器である。27・30は加曽利Ｂ１式、28・30は加曽利Ｂ３式と思われる。

第23図39～41には底部をまとめた。

第Ⅳ群土器（第23図31～38）

縄文時代後期後葉から晩期の安行式土器を一括する。

31～34は後期安行式の平口縁土器である。帯縄文、縦長の貼付文等を施す。

35～37は紐線文土器である。35・37は安行２式、36は安行３ａ式である。38は磨消縄文を施した安行３ｂ式の浅鉢形土器と思われる。

出土土製品（第23図42）

臼形の耳飾りである。およそ半分を欠損する。残存する最大径1.7㎝、高さ2.5㎝である。

出土石器（第24図１～11）

１は無茎石鏃で、長さ3.3㎝、幅1.3㎝、厚さ0.4㎝、重さ1.2g、石質はチャートである。

２は刃部を欠損する定角式の磨製石斧で、長さ12.2㎝、幅4.65㎝、厚さ2.75㎝、重さ247.7g、石質は緑色凝灰岩である。

３・４は打製石斧で、側縁の中央に抉りを入れるものである。３は石皿の転用と考えられ、器面には敲打痕が認められる。長さ13.3㎝、幅7.8㎝、厚さ3.1㎝、重さ433.2g、石質は緑泥片岩である。４は長さ14.0㎝、幅5.0㎝、厚さ1.9㎝、重さ191.9g、石質は砂岩である。

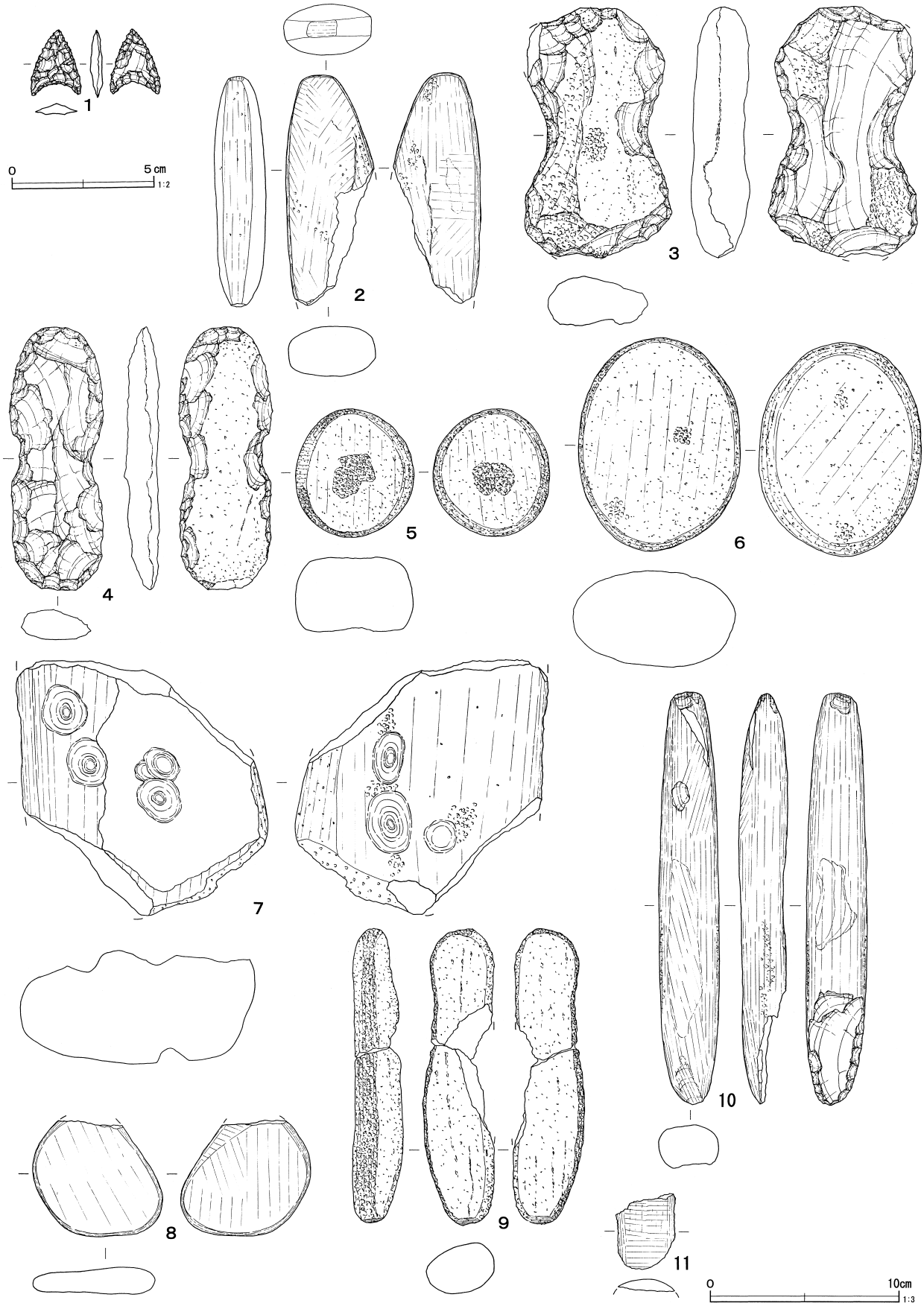
５・６は磨石類で、敲石としても使用されている。５は長さ6.8㎝、幅6.25㎝、厚さ3.95㎝、重さ308g で、石質は安山岩である。６は長さ11.3㎝、幅8.6㎝、厚さ5.1㎝、重さ721.5g、石質は安山岩である。

７は石皿の破片で、表裏面には凹部が複数認められる。長さ13.4㎝、幅13.5㎝、厚さ7.4㎝、重さ1358.3g、石質は緑泥片岩である。

８は砥石で、長さ6.15㎝、幅6.9㎝、厚さ2.3㎝、重さ88.4g、石質は砂岩である。

９は棒状の敲石で、側縁の一部を欠損する。長さ15.6㎝、幅3.8㎝、厚さ2.75㎝、重さ181.5g、石質は絹雲母片岩である。

10・11は石剣である。10は先端部分を欠損後に再加工を施しているもので、長さ21.8㎝、幅3.2㎝、厚さ2.6㎝、重さ300.7g、石質は緑泥片岩である。11は長さ4.0㎝、幅3.2㎝、厚さ0.7㎝、重さ11.2g で石質は緑泥片岩である。



第24図　グリッド出土遺物（8）

３．古墳時代の遺構と遺物

（１）住居跡

第１号住居跡（第25・26図）

Ｂ・Ｃ－３グリッドに位置する。東側は調査区域外で、南側は第１号方形周溝墓・第１号溝と重複し、両者に切られていることから本住居跡が最も古い。確認できた西辺を基準とすると主軸方向はＮ－27°－Ｅを指す。

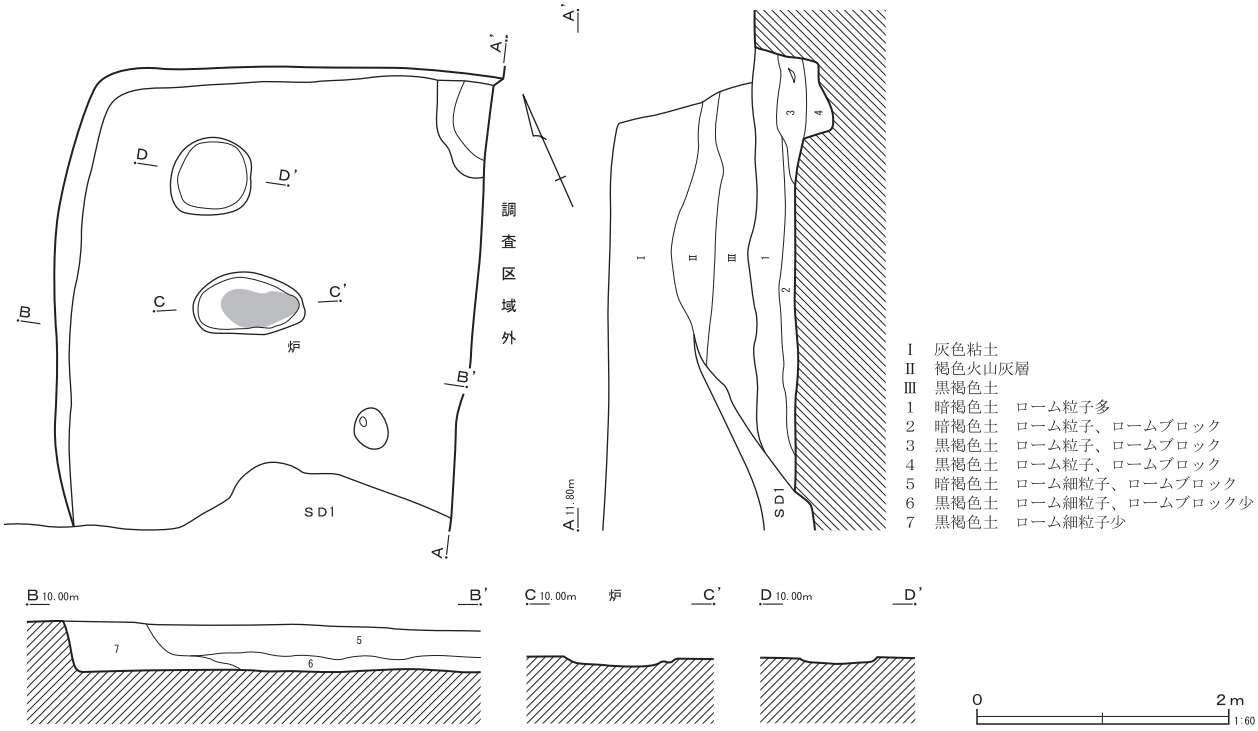
平面形は正方形と推定され、確認できた規模は西辺が3.60m、北辺が3.30m、深さ33㎝を測る。炉跡は西辺寄りにあり、楕円形で規模は長軸87㎝、短軸50㎝、深さ７㎝ほどの浅い掘込みを検出した。土壙は２基検出し、北西隅寄りのものはほぼ円形で規模は径61㎝、深さ６㎝ほどを測る。他の１基は北東部の壁際にあり一部は調査区域外となっている。確認できた規模は、長軸73㎝、短軸44㎝、深さ15～20㎝を測り、貯蔵穴の可能性がある。ピットは南東部で検出し、平面形は楕円形で、規模は長軸33㎝、短軸27㎝、深さ24㎝を測る。

遺物は、土師器台付甕・壺が出土した。壺口縁部（１）は炉から出土した。

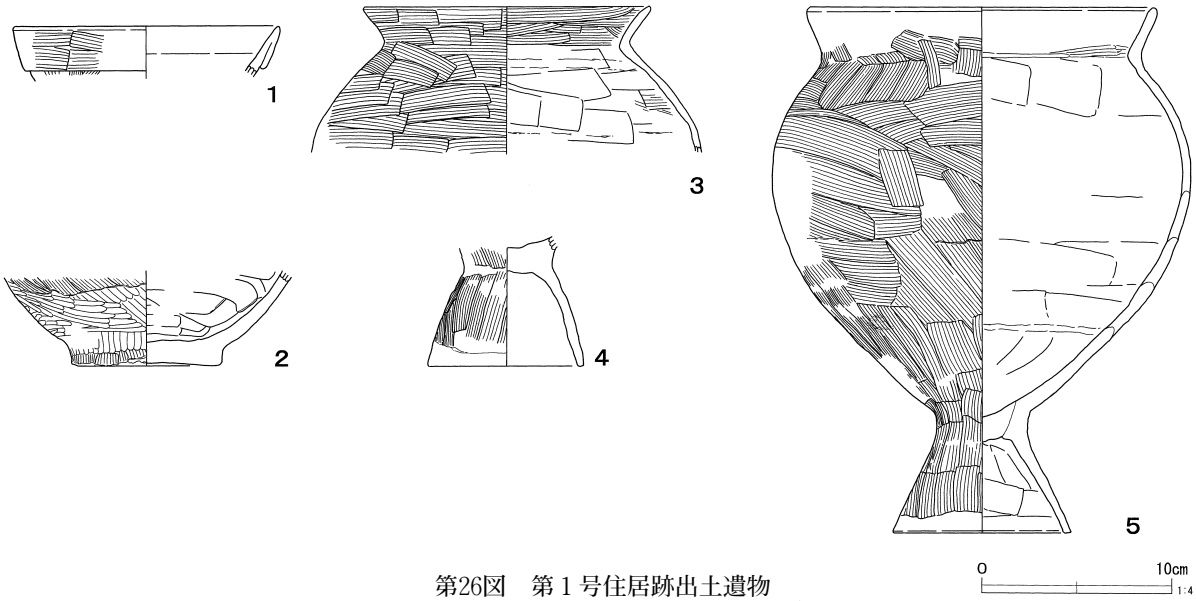
第２号住居跡（第27・28図）

Ｂ－３グリッドに位置する。第１号溝と重複し、壊されていることから溝より古い。主軸方向はＮ－37°－Ｅを指す。

平面形は僅かに台形を呈し、規模は長軸5.75m、短軸5.15m、深さ17㎝ほどを測る。床面の中央部は南北3.5m、東西2.3mの方形範囲が僅かな高まりをもち、高まりの外周に幅0.4～1.0mの極浅い溝状のものが東辺を除いて廻っている。壁溝は全周し、炉跡及びピットが検出された。炉跡は住居跡北東辺寄りにあり、東部が第１号溝に壊されており確認できた規模は東西43㎝、南北53㎝、深さ１～３㎝の浅い掘込みを検出した。ピットは６基検出した。Ｐ１～Ｐ４は主柱穴とみられ、径30～45㎝の円形を主体とし深さは40～60㎝である。



第25図　第１号住居跡



第26図　第１号住居跡出土遺物

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	壺	(13.8)	(2.7)	―	15	ＧＨ	普通	にぶい黄橙	炉出土	
2	土師器	壺	―	(5.0)	7.5	90	ＨＪ	普通	灰黄		18-3
3	土師器	台付甕	(15.0)	(7.7)	―	40	ＨＪ	普通	にぶい黄橙		18-2
4	土師器	台付甕	―	(6.9)	(8.2)	60	ＨＪ	普通	灰黄褐		18-4
5	土師器	台付甕	(18.0)	27.8	(9.3)	40	ＧＨ	普通	にぶい黄橙		18-1

Ｐ５は楕円形で長軸43㎝、短軸32㎝で深さ23㎝であるが、柱痕が確認できた。Ｐ６は円形で径57㎝×60㎝、深さ50㎝を測る。

遺物は、土師器台付甕・甕・壺・小型壺・高坏・器台が出土し、小型壺（１・２）、壺（６）、台付甕（11）、器台（14）は床面で検出された。

第３号住居跡（第29図）

Ｂ－３・４グリッドに位置し、東側は調査区域外で、北側は第３号方形周溝墓・第４号住居跡・第２・３号土壙と重複し、当住居は方形周溝墓より古く、住居跡・土壙より新しい。確認できた西壁・南壁を基準とすると、主軸方向はＮ－25°－Ｅを指す。

平面形は正方形と推定され確認できた規模は西辺3.98m、南辺3.48mで、深さ20㎝を測る。壁溝が西辺と南辺の一部と西隅に土壙が検出された。壁溝は幅10～20㎝、深さ４～９㎝を測る。土壙は平面形はほぼ円形で、規模は長径68㎝、短径60㎝、深さ20㎝を測る。炉跡やピットは確認できなかった。

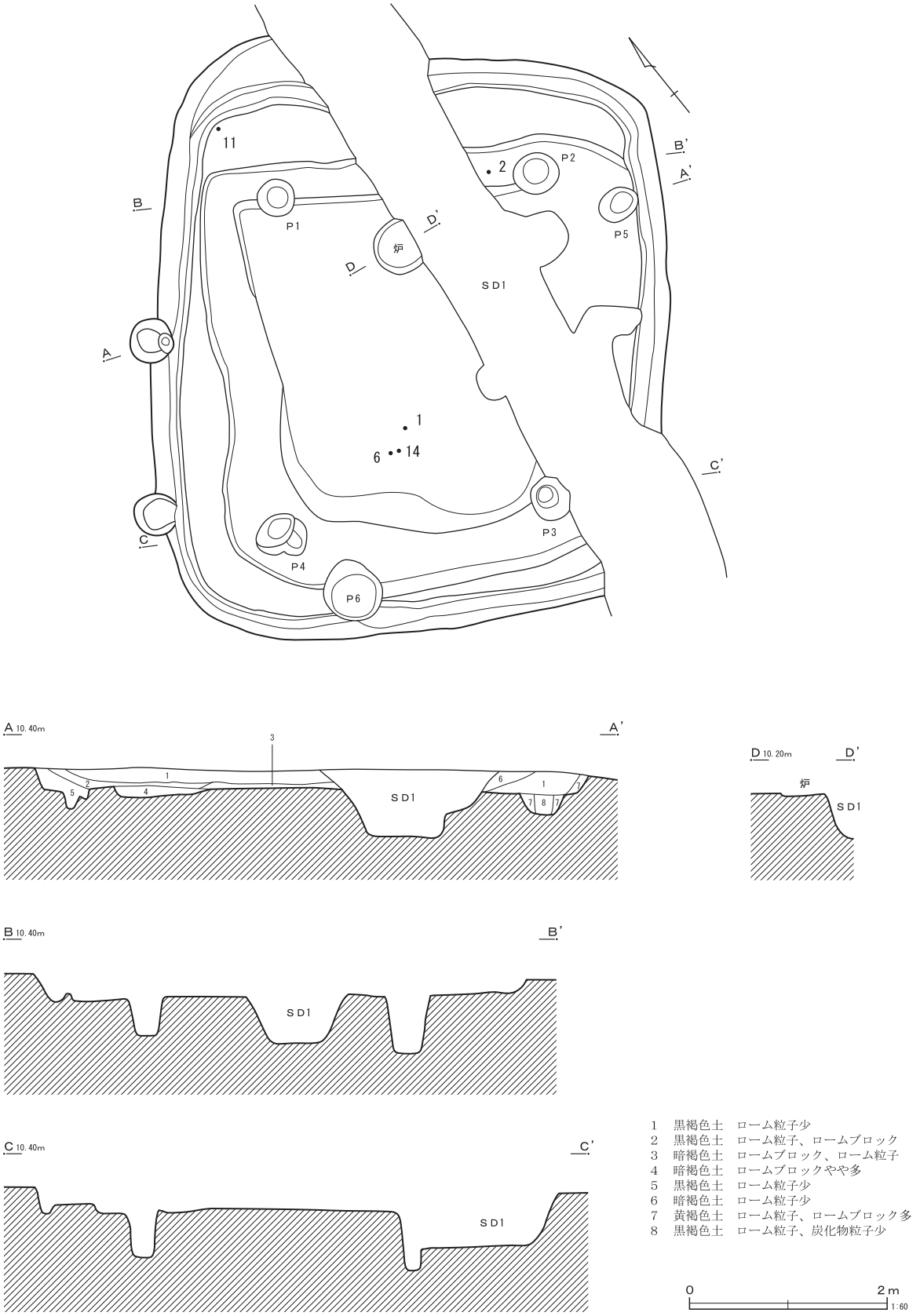
遺物は、僅かに土師器片が出土したが、図示できるのもはなかった。

第５号住居跡（第30・31図）

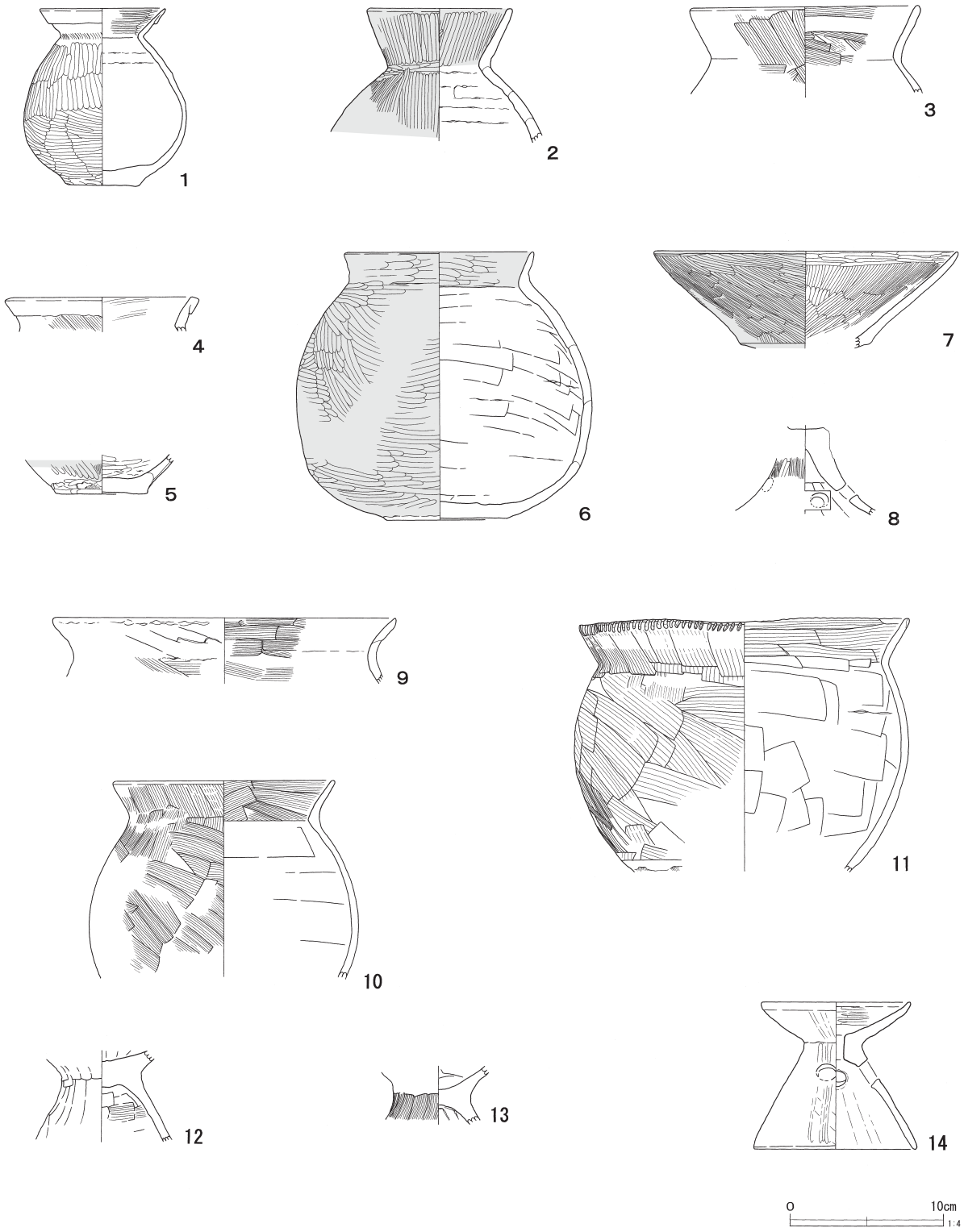
Ａ－３グリッドに位置する。北東側は調査区域外で、第３号方形周溝墓・第１号溝と重複し、本住居跡のほうが古い。検出された一辺を基準とすると主軸方向はＮ－40°－Ｗを指す。

確認できた規模は辺が検出された部分は1.57m、東西方向2.02m、深さ37㎝を測る。ピットを１基検出したが半分ほどは調査区域外で、平面形は円形で、規模は径45㎝ほどと推定され、深さは55㎝を測る。

遺物は、土師器壺が出土した。


A 10.40m
A'
B 10.40m
B'
C 10.40m
C'
D 10.20m
D'
SD1
炉
P1
P2
P3
P4
P5
P6
1 黒褐色土　ローム粒子少
2 黒褐色土　ローム粒子、ロームブロック
3 暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子
4 暗褐色土　ロームブロックやや多
5 黒褐色土　ローム粒子少
6 暗褐色土　ローム粒子少
7 黄褐色土　ローム粒子、ロームブロック多
8 黒褐色土　ローム粒子、炭化物粒子少
0
2m
1:60

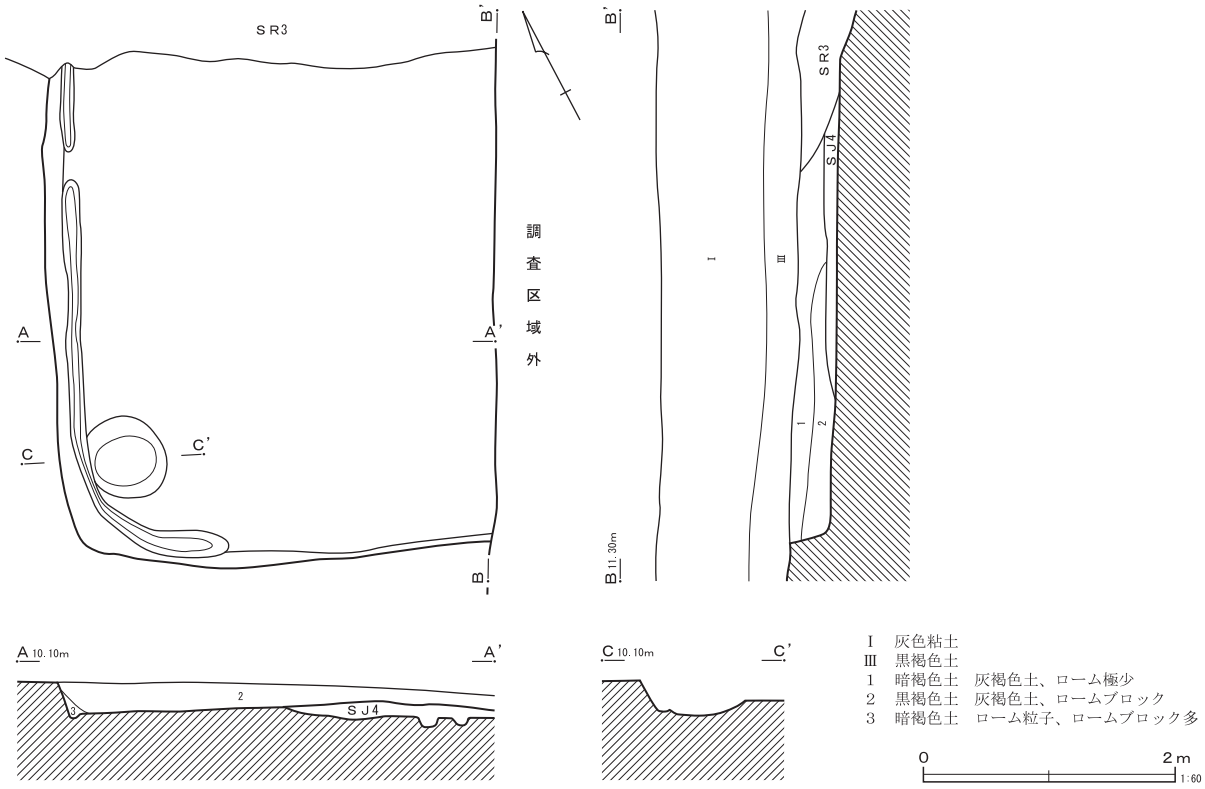
第27図　第２号住居跡



第28図　第２号住居跡出土遺物

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表（第28図）

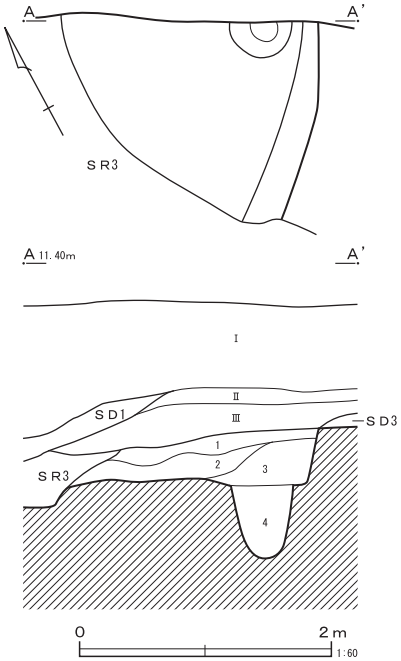
番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	小型壺	8.0	11.6	4.7	90	ＡＤＨＩＫ	普通	明黄褐		18-5
2	土師器	小型壺	9.2	(8.7)	―	50	ＧＨ	普通	灰褐	外面及び口縁部赤彩	
3	土師器	台付甕	(14.8)	(6.0)	―	20	ＧＨＩ	普通	にぶい黄橙		
4	土師器	壺	(11.6)	(2.3)	―	5	ＧＨＩ	普通	にぶい黄褐		
5	土師器	壺	―	(2.6)	6.0	70	Ｇ	普通	にぶい黄橙	外面及び口縁部赤彩	
6	土師器	壺	(12.2)	17.5	8.0	70	ＢＧＨ	普通	にぶい褐	外面及び口縁部赤彩	18-6
7	土師器	高坏	(19.8)	6.4	―	40	ＣＨＩ	良好	灰黄	外面赤彩	19-3
8	土師器	高坏	―	(5.6)	―	60	ＨＩ	普通	橙	透孔４孔	
9	土師器	台付甕	(22.2)	(4.3)	―	5	Ｇ	普通	にぶい赤褐		
10	土師器	台付甕	14.0	(12.9)	―	60	ＧＨＪ	普通	黒		19-1
11	土師器	台付甕	21.3	16.6	―	70	ＡＨＩＫ	普通	褐灰	粗いハケ目	19-2
12	土師器	台付甕	―	(5.9)	―	50	ＡＤＧＨ	普通	にぶい黄褐		
13	土師器	台付甕	―	(3.8)	―	90	ＧＨＫ	普通	にぶい黄褐		
14	土師器	器台	9.6	9.6	(10.6)	60	ＡＧＪＫ	普通	橙	器壁磨滅　透孔４孔	19-4



第29図　第３号住居跡

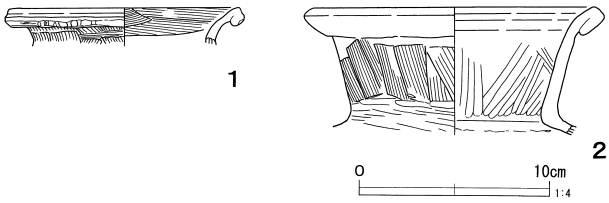
第４表　第５号住居跡出土遺物観察表（第31図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	壺	(12.0)	(1.5)	―	25	ＧＨ	良好	にぶい橙		
2	土師器	壺	(14.8)	(6.7)	―	30	ＧＨＩ	良好	にぶい黄橙		



Ⅰ　灰色粘土
Ⅱ　褐色火山灰層
Ⅲ　黒褐色土
1　黒褐色土　ローム粒子少
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロックやや多
3　暗褐色土　ローム粒子少
4　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック含む

第30図　第５号住居跡



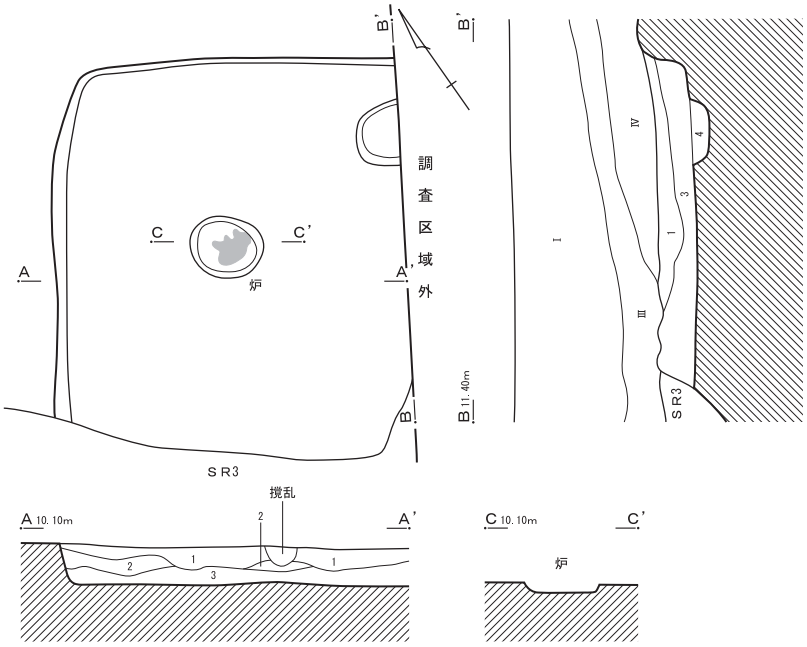
第31図　第５号住居跡出土遺物

第６号住居跡（第32・33図）

Ａ・Ｂ－４グリッドに位置する。南東側は調査区域外で、南西側で第３号方形周溝墓と重複し、方形周溝墓に切られている。主軸方向はＮ－32°－Ｅを指す。

平面形は正方形を呈すると推定され、確認できた規模は長軸3.14m、短軸2.75m、深さ30㎝を測る。炉跡とピットが検出された。炉跡は平面形がほぼ円形の径50㎝×60㎝、深さ５㎝を測る浅い掘り込みが確認された。ピットは半分ほどが調査区域外である。平面形は円形を呈し、径55㎝と推定され、深さ16㎝を測る。

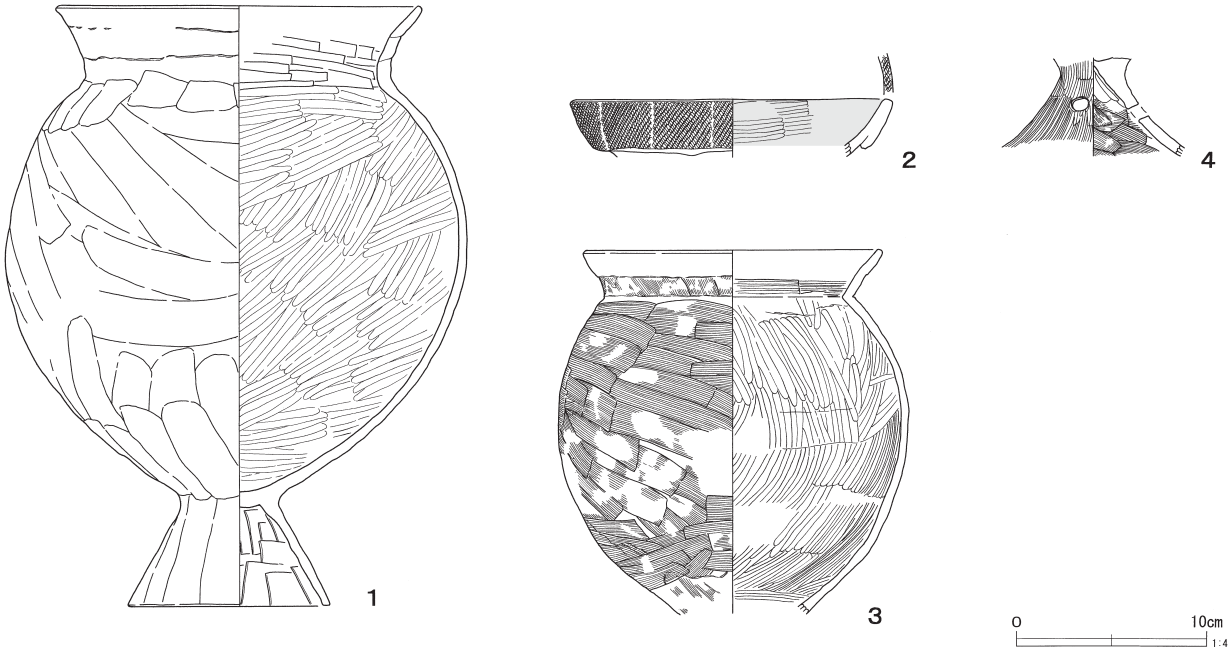
遺物は、台付甕・壺・高坏が出土した。台付甕（３）はピットから出土した。



Ⅰ　灰色粘土
Ⅲ　黒褐色土
Ⅳ　黒褐色土　酸化鉄多、ローム少
1　暗褐色土　ローム微粒子・ローム粒子多
ロームブロック少、酸化鉄粒多
粘性わずか、締まり弱い
2　暗褐色土　ローム微粒子多、黒褐色粒子少、
ロームブロック多、
酸化鉄少粘性わずか、締まり弱い
3　黒褐色土　ローム粒子極僅か、ロームブロック少
酸化鉄少　粘性わずか、締まり弱い
4　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック（ピット覆土）

0　2m
1:60

第32図　第６号住居跡



第33図　第６号住居跡出土遺物

第５表　第６号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	台付甕	18.8	31.8	10.4	60	ＢＨ	普通	にぶい黄橙		19-5
2	土師器	壺	(16.3)	(3.1)	―	15	ＨＪ	良好	にぶい黄橙	内面赤彩　単節LR左→右施文　口唇上同一施文	
3	土師器	台付甕	15.6	(19.3)	―	90	ＨＩ	普通	灰黄褐	ピット出土	19-6
4	土師器	高坏	―	(5.2)	―	95	Ｈ	普通	にぶい黄橙	透孔３孔	20-1

第７号住居跡（第34・35図）

Ａ―３グリッドに位置する。住居跡の一辺の一部が確認されたがほとんどが調査区域外となっている。確認された辺を基準とすると主軸方向はＮ―32°―Ｅを指す。

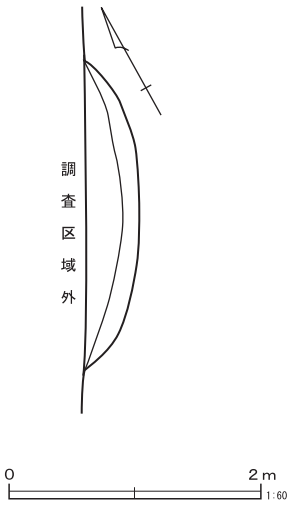
平面形は不明で、規模は確認できた辺は2.45mを測る。

遺物は、坏・壺が出土した。

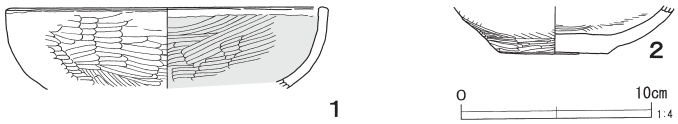
第８号住居跡（第36図）

Ｃ―３グリッドに位置する。住居跡の東側ほとんどが調査区域外で、北側は第１号方形周溝墓と重複し、住居跡のほうが古い。確認できた西辺を基準にすると主軸方向はＮ―２°―Ｅを指す。

平面形は方形を呈すると推定され、確認できた規模は長軸3.10m、短軸1.15m、深さ21cmを測る。



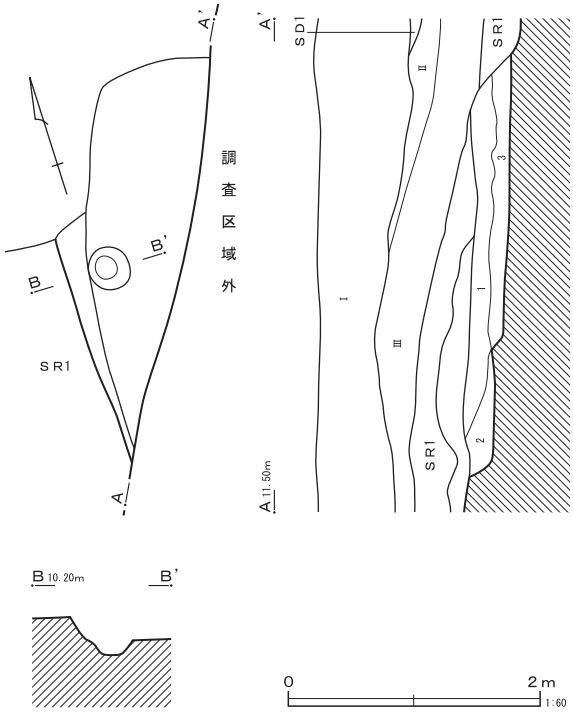
第34図　第７号住居跡



第35図　第７号住居跡出土遺物

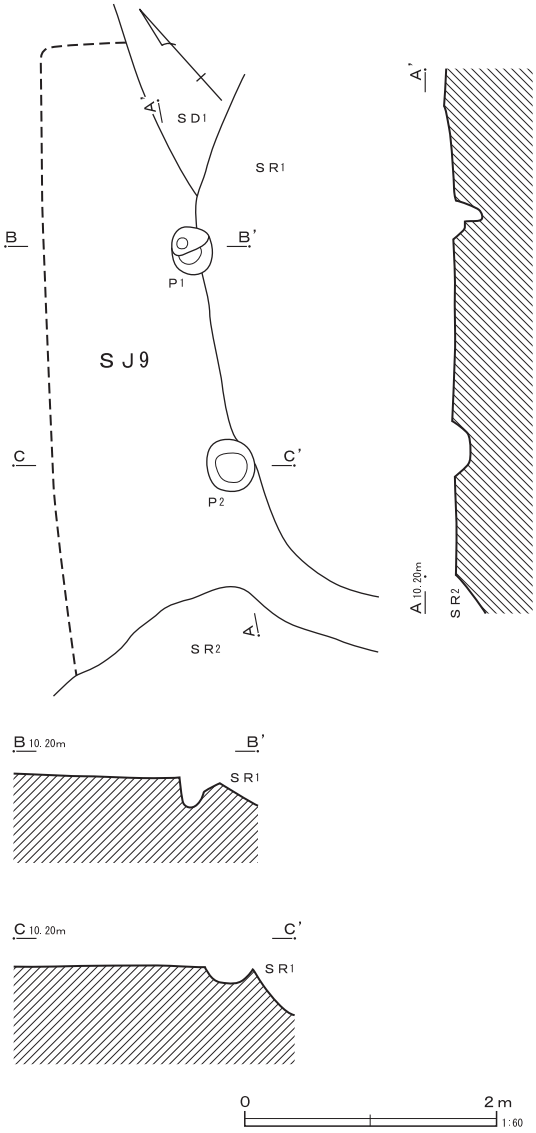
第６表　第７号住居跡出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存（%）	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	坏	(16.6)	(4.2)	―	15	ＨＪ	普通	褐灰	内面赤彩	
2	土師器	壺	―	(2.5)	5.6	60	ＢＨ	普通	暗灰黄	底部外面一部ヘラ磨き	



Ⅰ　灰色粘土
Ⅱ　褐色火山灰層
Ⅲ　黒褐色土
1　黒褐色土　ローム粒子、ロームブロック少
2　黒褐色土　ローム粒子、ロームブロックやや多
3　黒褐色土　ローム粒子、ロームブロック

第36図　第８号住居跡



第37図　第９号住居跡

ピットのみを検出し、平面形は円形で径32㎝×35㎝、深さ９㎝を測る。

遺物は、土師器片が１点出土したのみで図示できるものはなかった。

第９号住居跡（第37図）

C－２グリッドに位置する。東側と南側で第１・２号方形周溝墓と重複し、いずれにも切られており本住居跡のほうが古い。掘り込みが浅く掘形と遺物出土範囲から住居跡と判断したもので掘形に沿った主軸方向はN－40°－Eを指す。

平面形は方形を呈すると推定され、確認できた規模は長軸4.98m、短軸1.32mである。ピットが２基検出され、P１は円形を呈し、規模は径32㎝×36㎝、段差を有し深さは南側のテラス状部分が７㎝、北側部分が23㎝を測る。P２は円形を呈し、径37㎝×40㎝、深さ14㎝を測る。

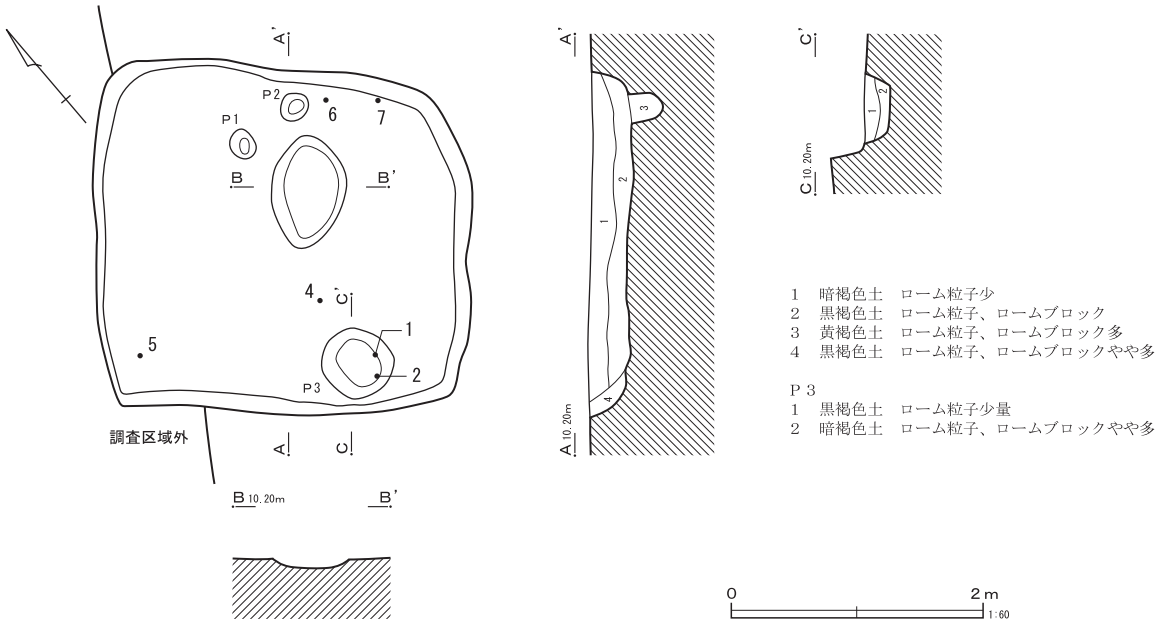
遺物は、土師器片１点が出土したのみで図示できるものはなかった。

第10号住居跡（第38・39図）

A・B－２グリッドに位置する。主軸方向はN－38°－Eを指す。

平面形は正方形で、規模は長軸2.92m、短軸2.75m、深さ31㎝を測る。土壙とピット３基が検出された。土壙は住居跡の北東辺寄りにあり、平面形は楕円形を呈し、規模は長軸90㎝、短軸60㎝、深さ７㎝ほどの浅い掘込みを検出した。ピットはP１・P２は小型でP３は２基に比し大きい。P１の平面形は円形を呈し、規模は径20㎝×25㎝、深さ20㎝を測る。P２の平面形は円形を呈し、規模は径21㎝×23㎝、深さ26㎝を測る。P３の平面形は燕京を呈し、径51㎝×61㎝、深さ20㎝を測る。

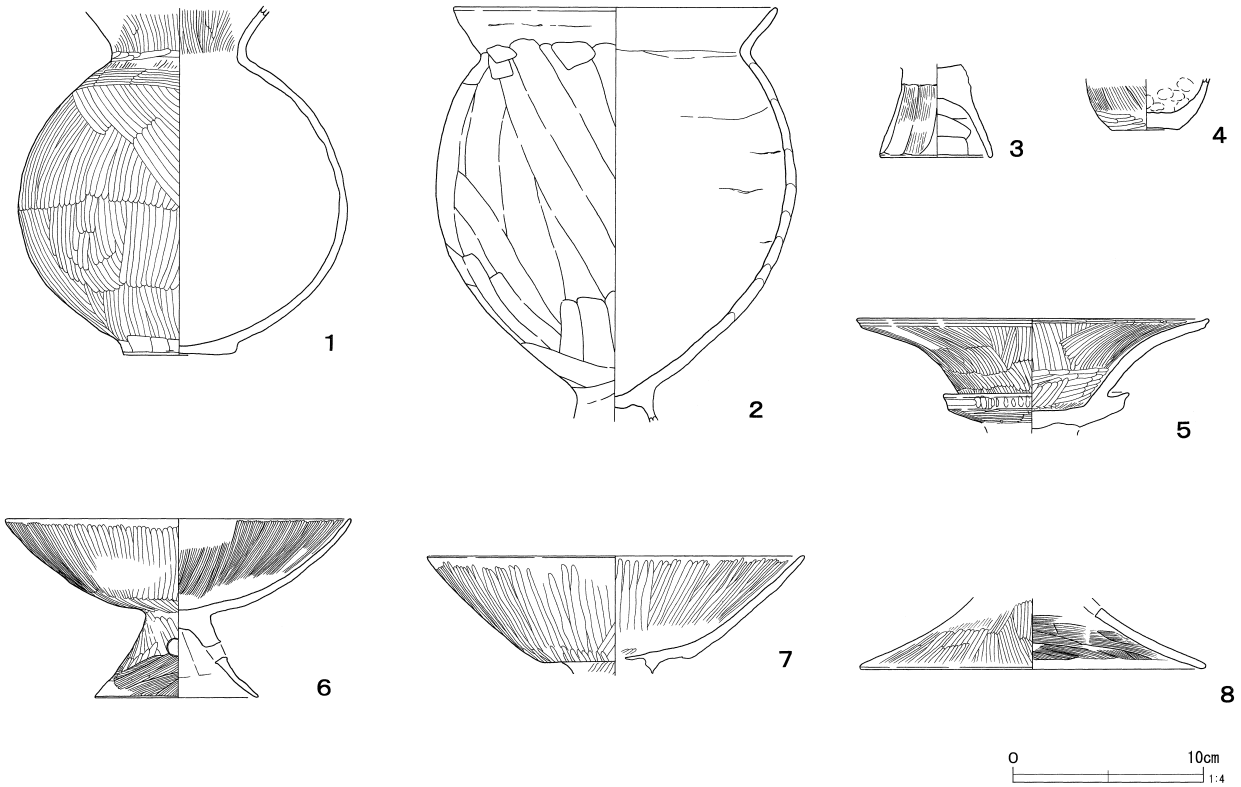
遺物は、土師器台付甕・小型壺・高坏・ミニチ



第38図　第10号住居跡

第７表　第10号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	口径(㎝)	器高(㎝)	底径(㎝)	残存(%)	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	小型壺	－	(18.3)	5.8	90	AGHI	普通	にぶい黄橙		20-2
2	土師器	台付甕	16.8	(22.0)	－	100	BHJ	普通	にぶい橙		20-3
3	土師器	台付甕	－	(4.9)	(5.8)	30	GHI	普通	灰黄褐		
4	土師器	ミニチュア	－	2.7	3.5	90	AHI	普通	にぶい黄橙		
5	土師器	高坏	18.3	(5.8)	－	70	H	普通	にぶい黄橙		20-5
6	土師器	高坏	18.1	9.4	8.4	90	BGHI	普通	にぶい橙		20-4
7	土師器	高坏	19.8	(6.2)	－	100	AH	普通	にぶい黄橙	歪み割れ	20-6
8	土師器	高坏	－	3.8	(18.0)	30	AIJ	普通	浅黄橙	透孔３孔	



第39図　第10号住居跡出土遺物

ュア土器が出土した。小型壺（1）、台付甕（2）はピット3から出土し、高坏（6）は床面からの出土のものである。（5）は高坏の坏部で坏の下に更に受け部状の装飾が施されている。

第11号住居跡（第40・41図）

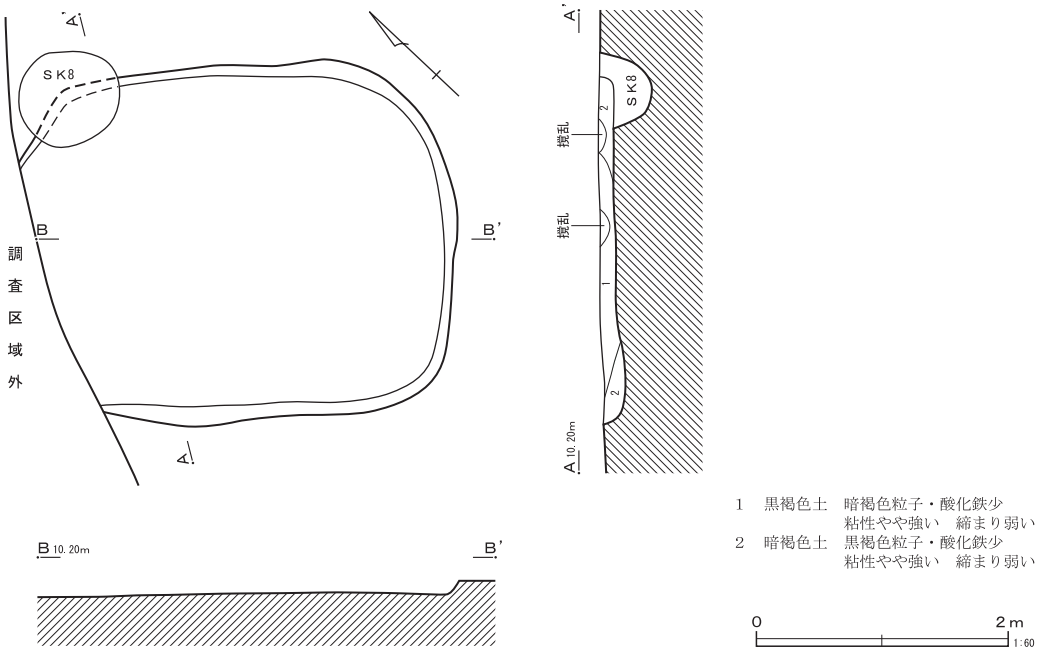
B・C－2グリッドに位置する。西北辺が調査区域外で、第8号土壙と重複している。土層の状況から本住居跡の方が新しい。主軸方向はN－43°－Wを指す。

平面形は隅丸方形で長軸3.30mの範囲が確認でき、短軸は2.79m、深さ36㎝を測る。炉跡やピット等の施設は確認できなかった。

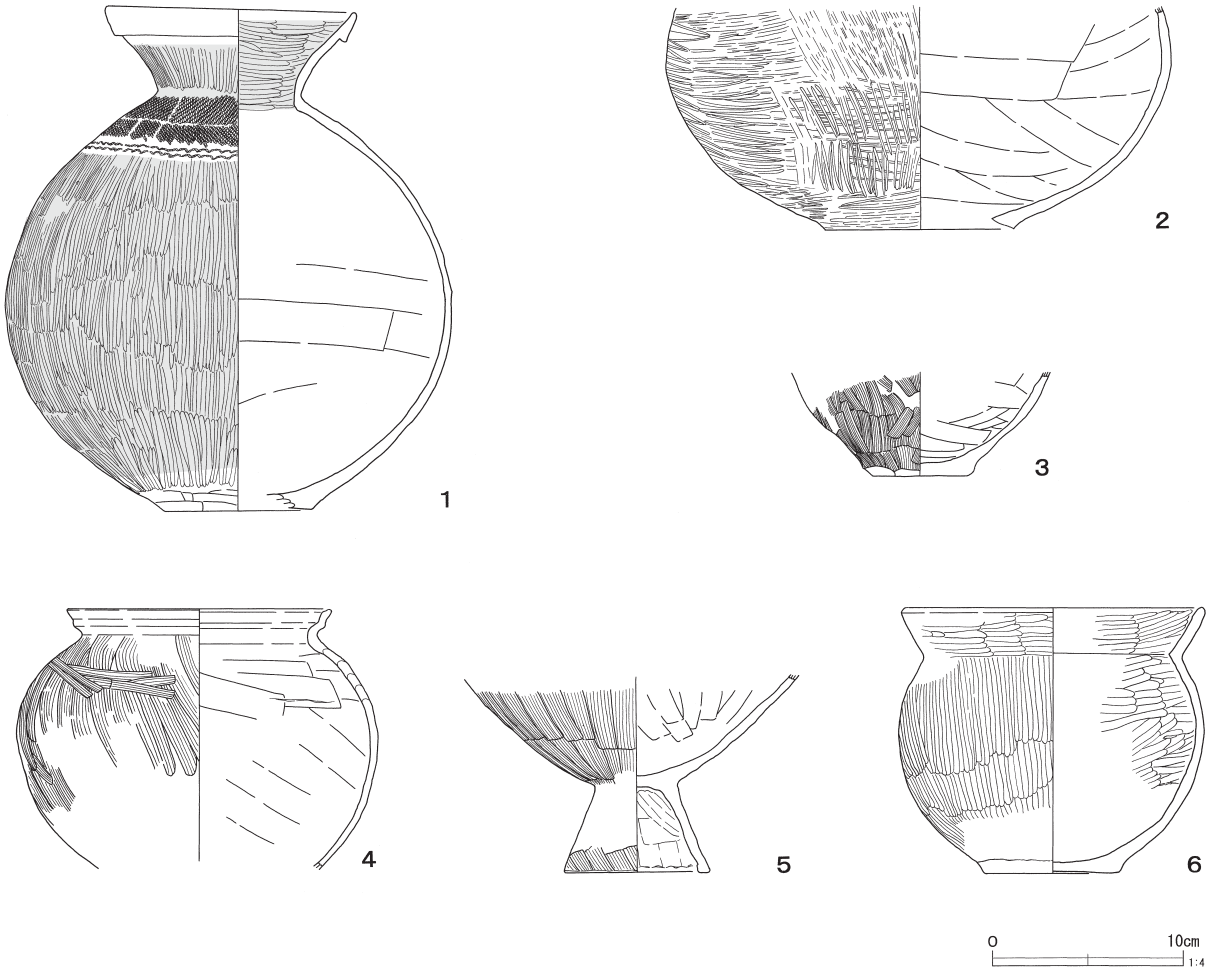
遺物は、壺・台付甕・甕が出土した。壺（1）は、頸部直下に幅5㎝程の縄文帯があり、下位にRL、上位にLRの縄文を左から右へ施文し羽状の効果。下位のRL原体は、末端にℓの縄で作った結び目を2つ有するもので縄文帯の下端を2条の結節縄文で画している。

第8表　第11号住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径（㎝）	器高（㎝）	底径（㎝）	残存（%）	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	壺	13.1	26.7	(7.8)	80	A	普通	浅黄橙	赤彩　肩部羽状縄文・結接縄文	21-1
2	土師器	壺	－	(11.6)	(10.0)	25	BH	普通	褐灰		
3	土師器	甕	－	(5.5)	5.0	30	H	普通	明黄褐		
4	土師器	台付甕	13.6	13.7	－	70	BG	普通	黒	S字状口縁	21-3
5	土師器	台付甕	－	(10.4)	7.5	70	CH	普通	にぶい橙		21-5
6	土師器	小型甕	(15.6)	14.0	(7.0)	35	CGH	普通	にぶい橙		21-4



第40図　第11号住居跡



第41図　第11号住居跡出土遺物

（２）方形周溝墓

第１号方形周溝墓（第42・43図）

Ｃ・Ｄ－２・３グリッドに位置する。およそ全体の１／２が調査区域外で、第２号方形周溝墓、第８・９号住居跡、第１・２号溝と重複している。土層から第２号方形周溝墓を掘り込んでおり、当方形周溝墓の方が新しい。第８・９号住居跡を壊して周溝を掘り込んでおり、住居跡のほうが古い。第１号溝は掘込みが深く方形周溝墓が壊されている。新旧関係は、第１号溝が最も新しく、第１号方形周溝墓、第２号方形周溝墓、２軒の住居跡の順に古くなる。

全体の平面形は隅丸方形を呈すると推定され、確認できた規模は南北12.27m、東西12.60m である。主軸方位はＮ－10°－Ｅを指す。

方台部は隅丸方形を呈すると推定され、確認できた規模は南北9.5m、東西6.47m である。墳丘盛り土は、20㎝～45㎝の厚さが確認されたが埋葬施設は確認できなかった。

周溝は全周すると推定され、北西コーナーの周溝の内周は方台部が隅切状となり、外周も一部が広がっている。北西コーナーの溝が広く、他はほぼ同じである。最大幅5.44m、最小幅2.00m で、断面形は低い逆台形状で、方台部側と溝外周の立ち上がりは緩やかである。北溝が深さ64㎝～72㎝と深く、西溝は深さ16㎝～31㎝と浅い。

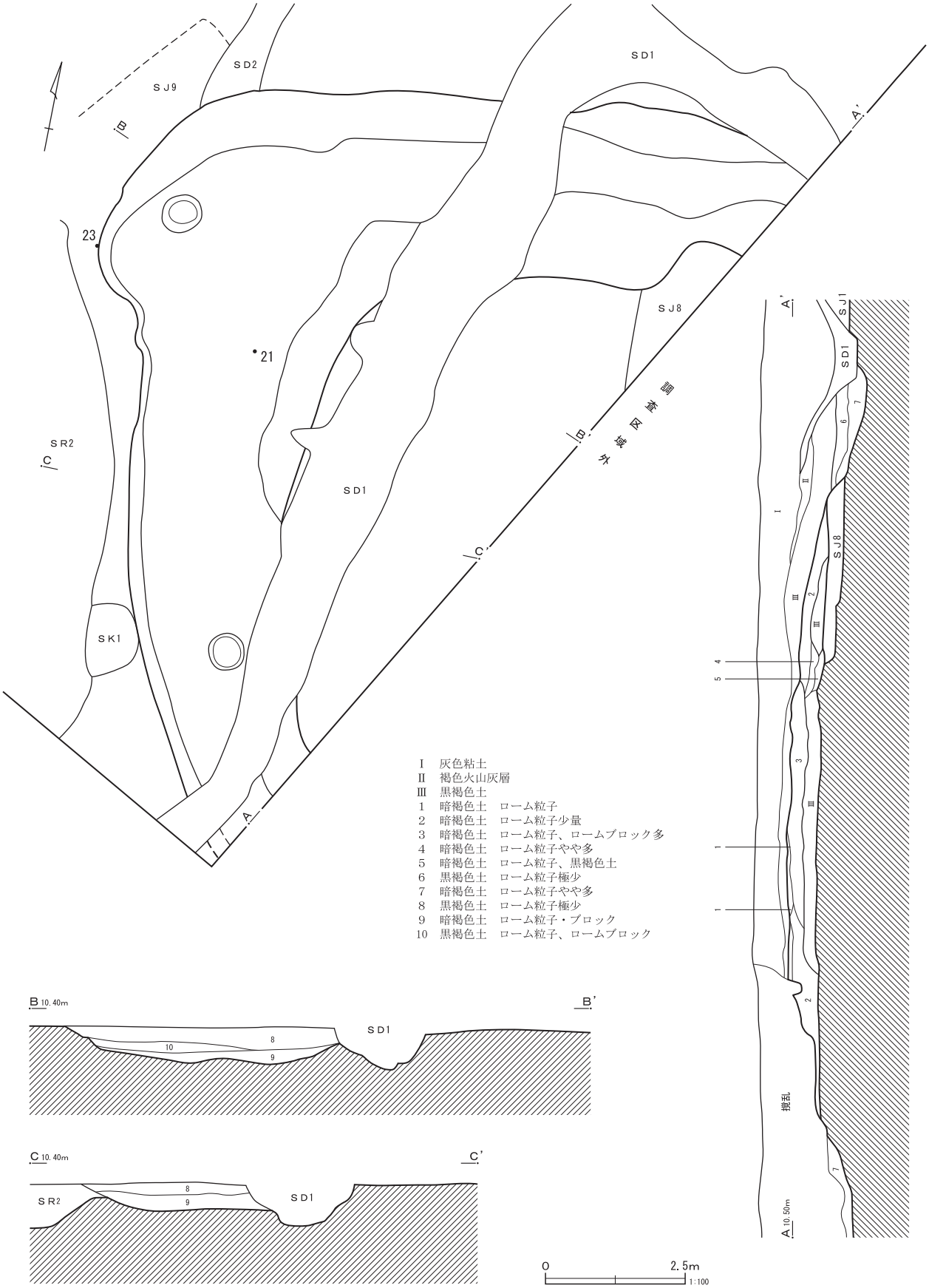
北溝は、西側が調査区域外で、長さ12.60m の範囲を確認した。幅は2.00m～3.60m、深さは64㎝～72㎝で、溝底面は西に向かって高くなる。

西溝は、東側・南側調査区域外で、長さ12・27m の範囲を確認した。幅は2.30m～5.44m、深さは16㎝～31㎝で、溝底面は平坦である。

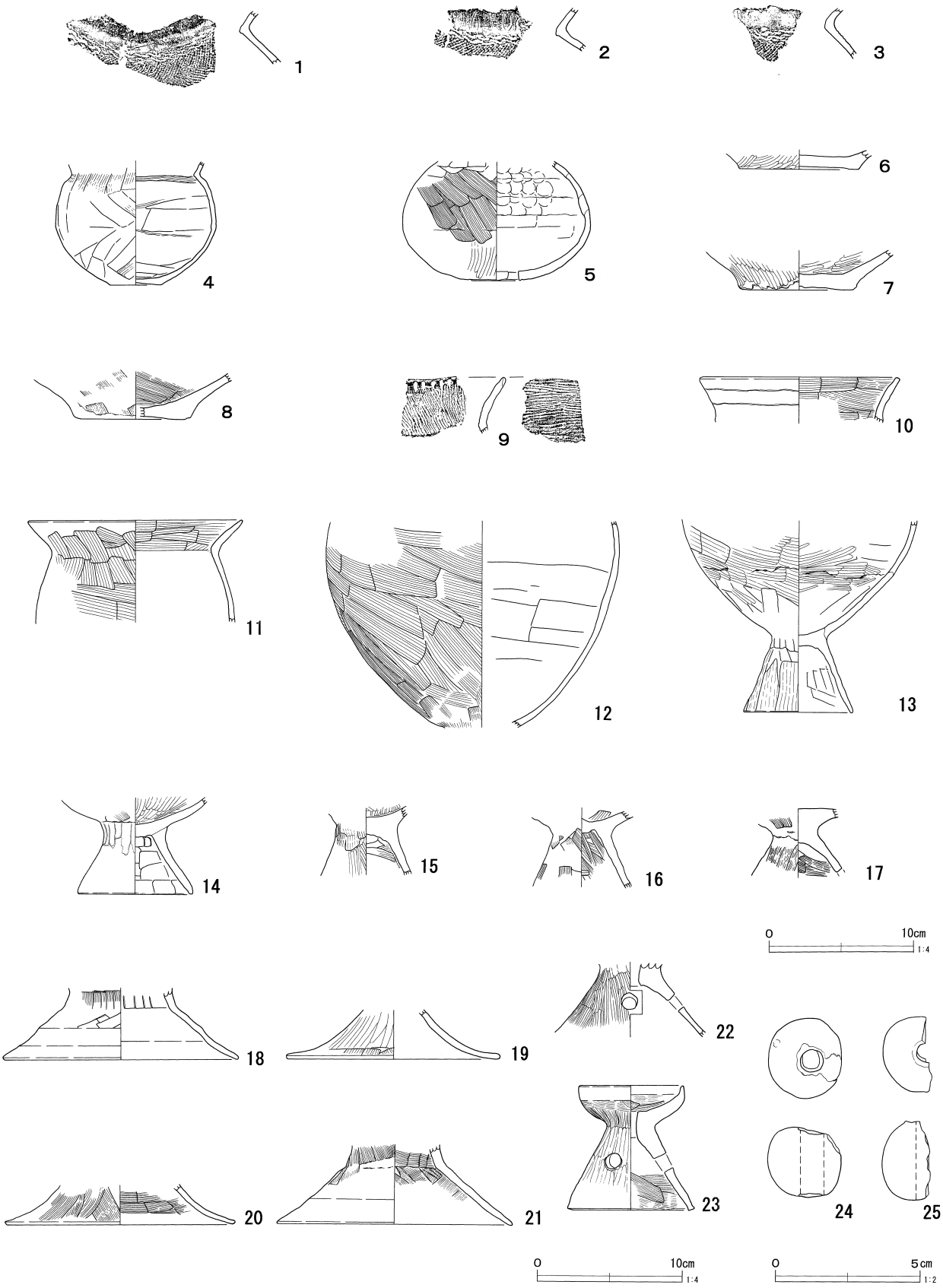
遺物は、土師器台付甕・壺・小型壺・坩・器台・高坏の地に土玉が出土した。高坏(21)・器台(23)は西溝から出土した。

第９表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径（㎝）	器高（㎝）	底径（㎝）	残存（%）	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	小型壺	－	(3.2)	－	40	ＧＩ	普通	にぶい橙		
2	土師器	小型壺	－	(2.0)	－	15	ＧＩ	普通	にぶい褐		
3	土師器	小型壺	－	(3.4)	－	10	ＧＨ	普通	橙		
4	土師器	坩	－	(8.6)	3.5	40	ＧＨＩＪ	普通	にぶい黄橙		21-6
5	土師器	小型壺	－	(8.3)	3.3	25	ＧＨ	普通	にぶい褐	底部穿孔	
6	土師器	壺	－	(1.3)	8.3	50	ＧＨ	普通	にぶい黄橙	底部外面磨き	
7	土師器	壺	－	(2.8)	7.7	80	ＧＨＩ	良好	灰黄褐		
8	土師器	壺	－	(3.4)	(8.0)	20	ＡＧ	良好	にぶい黄橙		
9	土師器	台付甕	－	(4.0)	－	5	ＨＩ	良好	褐灰		
10	土師器	台付甕	(13.4)	(3.0)	－	20	ＧＩＪ	普通	にぶい橙		
11	土師器	台付甕	(14.7)	(7.1)	－	20	Ｈ	普通	にぶい黄橙		
12	土師器	台付甕	－	(14.3)	－	70	ＢＩＪ	普通	灰黄		22-1
13	土師器	台付甕	－	(13.3)	7.5	50	ＧＨ	普通	にぶい黄橙		22-2
14	土師器	台付甕	－	(6.7)	(7.9)	45	ＨＩ	普通	黄褐		22-3
15	土師器	台付甕	－	(4.8)	－	80	Ｈ	普通	灰黄褐		
16	土師器	台付甕	－	(4.7)	－	45	Ｉ	良好	にぶい褐		
17	土師器	高坏	－	(4.7)	－	90	ＨＩ	普通	にぶい黄橙	透孔有り	
18	土師器	高坏	－	(5.0)	(16.4)	40	ＧＨ	普通	にぶい黄橙		
19	土師器	高坏	－	(3.4)	(14.7)	30	ＧＨＩ	普通	にぶい黄橙		
20	土師器	高坏	－	(2.7)	(15.8)	25	Ｈ	良好	灰褐		
21	土師器	高坏	－	(5.5)	16.2	70	ＧＨ	普通	にぶい褐		22-4
22	土師器	器台	－	(5.2)	－	30	ＧＨＩ	普通	にぶい橙	透孔４孔	
23	土師器	器台	7.2	8.6	(8.8)	80	ＧＨＩ	普通	にぶい橙	透孔３孔	22-5
24	土製品	土玉	径2.8×2.6　高さ2.5　孔径0.8			100	ＢＧ	普通		重さ14.83g	
25	土製品	土玉	径(2.6)高さ2.8　孔径(0.6)			50	Ｈ	普通		重さ（9.08）g	



第42図　第１号方形周溝墓



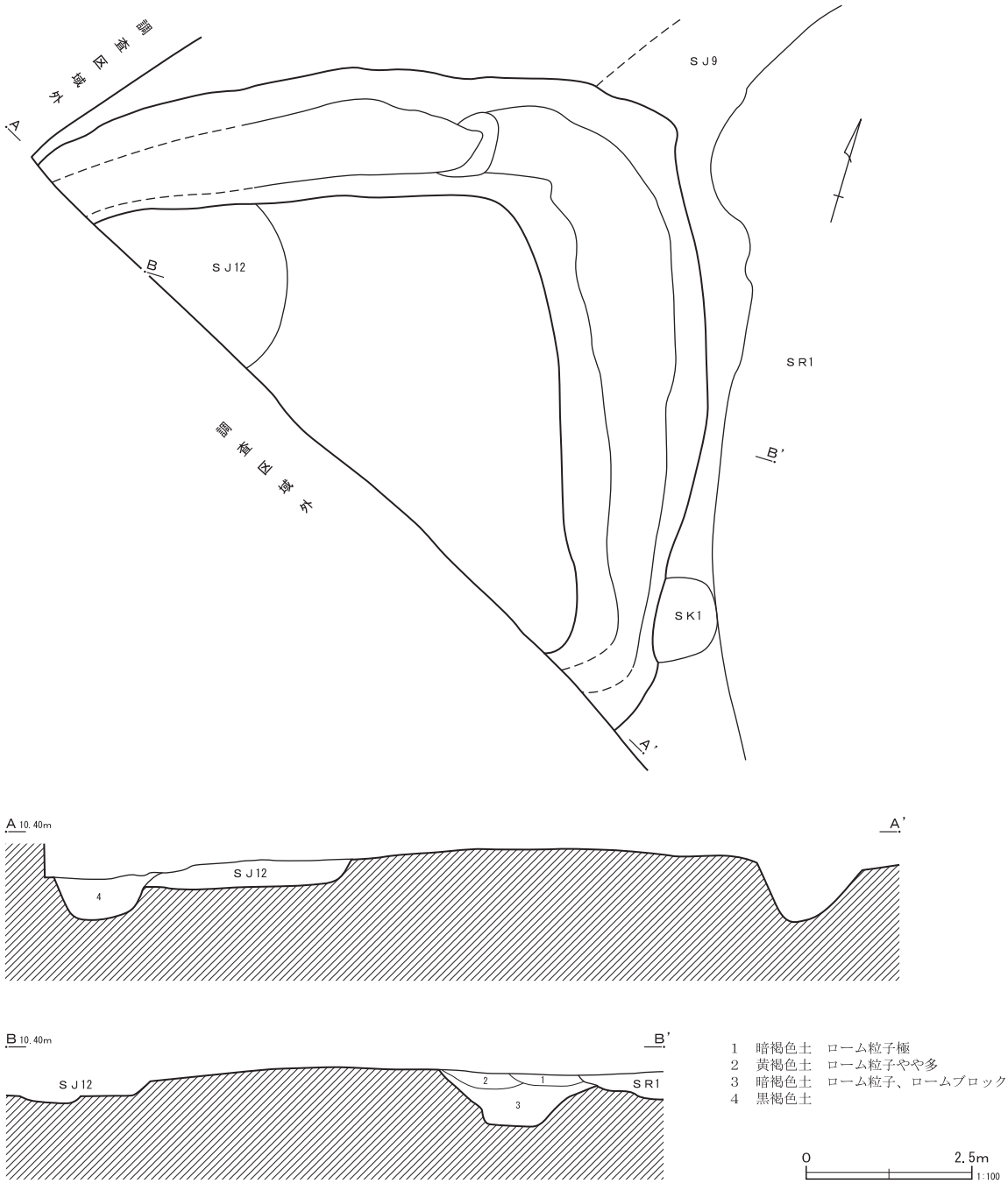
第43図　第１号方形周溝墓出土遺物

第２号方形周溝墓（第44・45図）

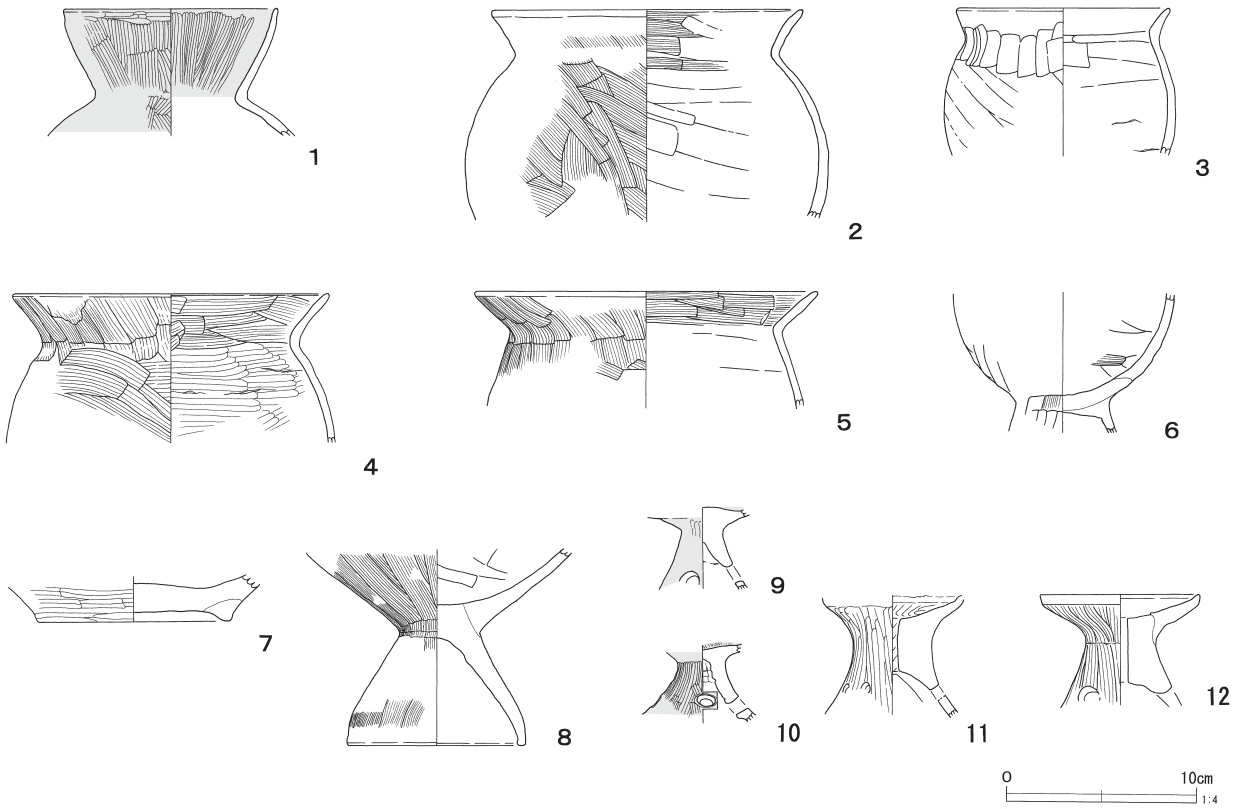
C－１・２、D－２グリッドに位置する。およそ全体の１／２が調査区域外で、第１号方形周溝墓、第９・12号住居跡、第１号土壙が重複している。第１号方形周溝墓に切られており、そのほかの住居跡・土壙を切っており、新旧関係は、第１号方形周溝墓が最も新しく、第２号方形周溝墓、第９号住居跡、第12号住居跡と第１号土壙の順に古くなる。

全体の平面形は隅丸方形を呈すると推定され、確認できた規模は南北9.77m、東西11.4m である。主軸方位は N－22°－W を指す。

方台部は隅丸方形を呈すると推定され、東溝南端でも方台部のコーナーが確認され規模は南北



第44図　第２号方形周溝墓



第45図　第２号方形周溝墓出土遺物

第10表　第２号方形周溝墓出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存（%）	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	小型壺	(11.0)	(6.7)	－	20	G	普通	浅黄橙	赤彩	
2	土師器	台付甕	(16.2)	(11.1)	－	25	G H J	普通	灰黄褐		
3	土師器	台付甕	11.0	(7.7)	－	70	B H	普通	灰黄褐	６と同一個体	22-６
4	土師器	台付甕	(16.4)	(7.8)	－	20	A H I	普通	にぶい橙		
5	土師器	台付甕	(17.8)	(6.1)	－	25	G	普通	にぶい黄橙		
6	土師器	台付甕	－	(7.5)	－	30	B H	普通	灰黄褐	３と同一個体	
7	土師器	壺	－	(2.4)	(10.0)	45	H K	普通	明黄褐		
8	土師器	台付甕	－	(10.3)	(9.2)	70	G H J	普通	にぶい橙		23-１
9	土師器	高坏	－	(4.2)	－	80	G H I	普通	褐	内外面赤彩　透孔３孔	
10	土師器	高坏	－	(3.1)	－	80	A G I J	普通	灰黄	内外面赤彩　透孔４孔	
11	土師器	器台	(7.5)	(6.3)	－	70	A K	普通	にぶい黄橙	透孔４孔？	
12	土師器	器台	8.4	(5.9)	－	60	A G H	普通	にぶい黄橙	透孔４孔？	

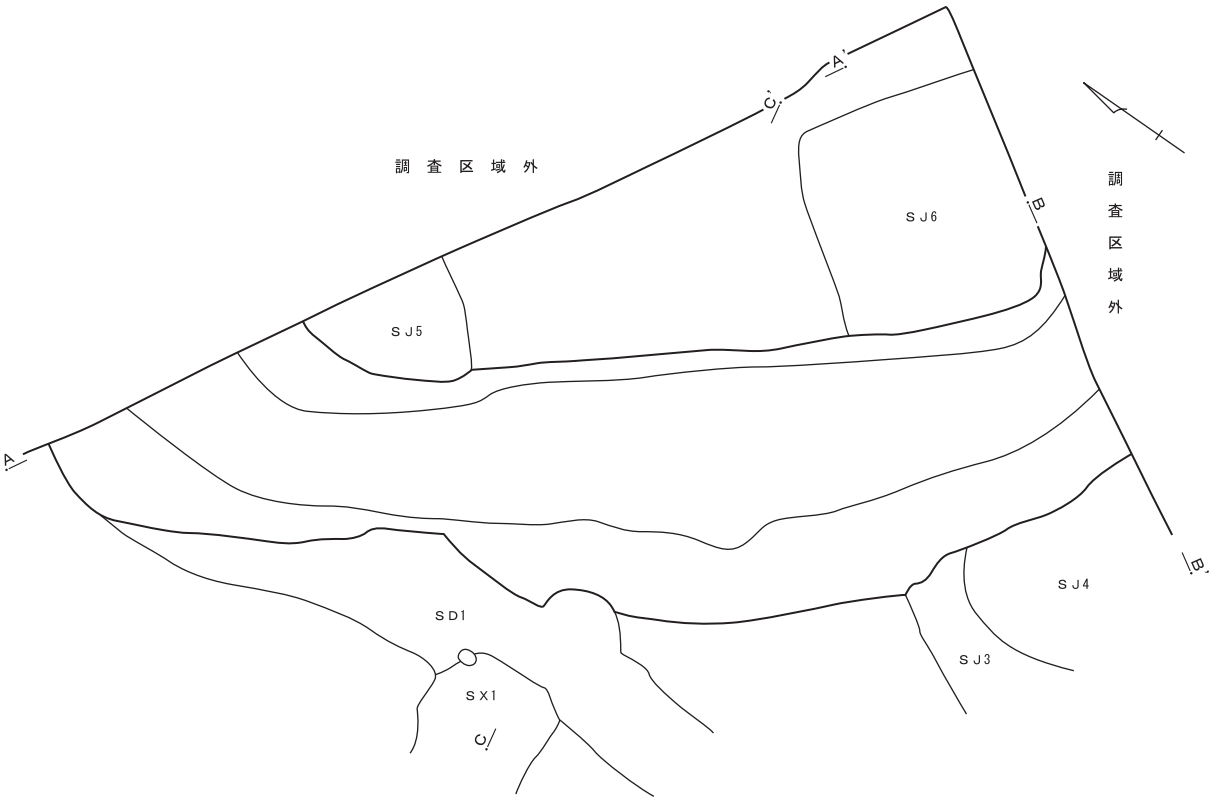
7.04m、確認できた東西6.76mである。墳丘盛り土は、確認できなかった。

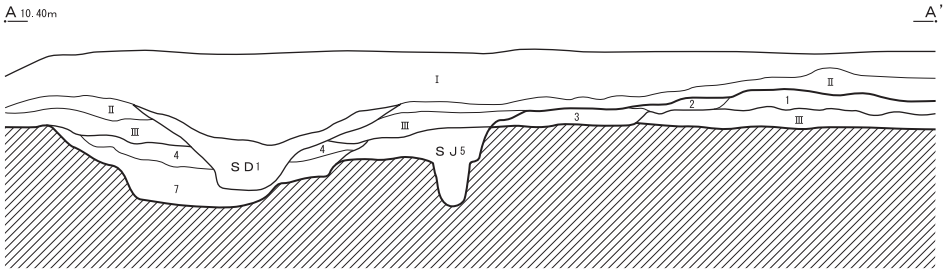
周溝は全周すると推定され、北溝の西側と東溝の南側が細く、東溝の北側が広くなっている。最大幅2.40m、最小幅1.29mで、断面形は逆台形状で、方台部側と溝外周の立ち上がりはやや急である。北溝が深さ84㎝～98㎝深く、西溝は深さ53㎝～84㎝と浅い。

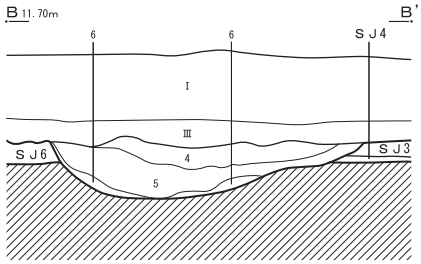
北溝は、西側が調査区域外で長さ11.40mの範囲を確認した。幅は1.29m～1.93m、深さは84㎝～98㎝で、溝底面ほぼ平坦であるが、東部で段差を有し50㎝ほど高くなる。

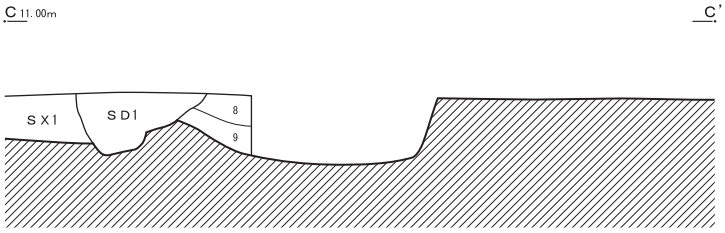
東溝は、ほぼ検出でき長さ9.77m、幅は1.35m～2.40m、深さは53㎝～84㎝で、溝底面は北に向かって高くなる。

出土遺物は、土師器台付甕・小型壺・小型甕・









Ⅰ　灰色粘土
Ⅱ　黒褐色土
Ⅲ　黒褐色土
1　黄褐色土　ローム、ロームブロック、暗褐色土多
2　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック含む
3　暗褐色土　ローム粒子少
4　黒褐色土
5　暗褐色土　灰褐色土、ローム極少
6　暗褐色土　ローム、ロームブロック
7　暗褐色土　ローム、ローム漸移層の粒子、ブロック
8　黒褐色土　ローム粒子少
9　暗褐色土　ローム粒子少

0　2.5m　1:100

第46図　第３号方形周溝墓

壺・高坏・器台が出土した。

第３号方形周溝墓（第46・47図）

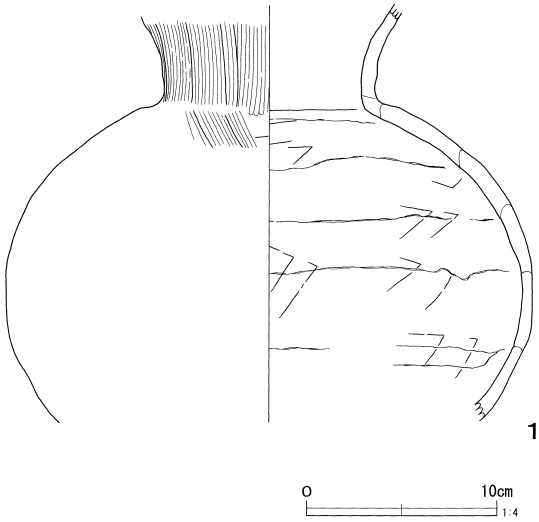
A・B－３・４グリッドに位置する。南西溝のみの検出で、ほとんどが調査区域外である。第３・４・５・６号住居跡、第１号溝と重複している。住居跡はいずれも壊して築造されている。第１号溝には切られており、新旧関係は、第１号溝が最も新しく、第３号方形周溝墓、第３・５・６号住居跡、第４号住居跡順に古くなる。

全体の平面形は隅丸方形を呈すると推定され、確認できた規模は東西13.8m である。主軸方位はN－50°－E を指す。

方台部は隅丸方形を呈すると推定され、南東部と北西部の方台部コーナーとなる部分が確認でき規模は東西9.7m である。墳丘盛り土は、15㎝～25㎝確認できたが、埋葬施設は確認できなかった。

周溝は全周すると推定され、南西溝の中央が広く両コーナー寄りが狭くなっている。最大幅3.50m、最小幅2.45m で、断面形は逆台形状で、方台部側の立ち上がりはやや急で、溝外周は緩やかである。溝の深さ87㎝～95㎝で、溝底面はほぼ平坦である。

遺物は、土師器壺が出土した。



第47図　第３号方形周溝墓出土遺物

第11表　第３号方形周溝墓出土遺物観察表（第47図）

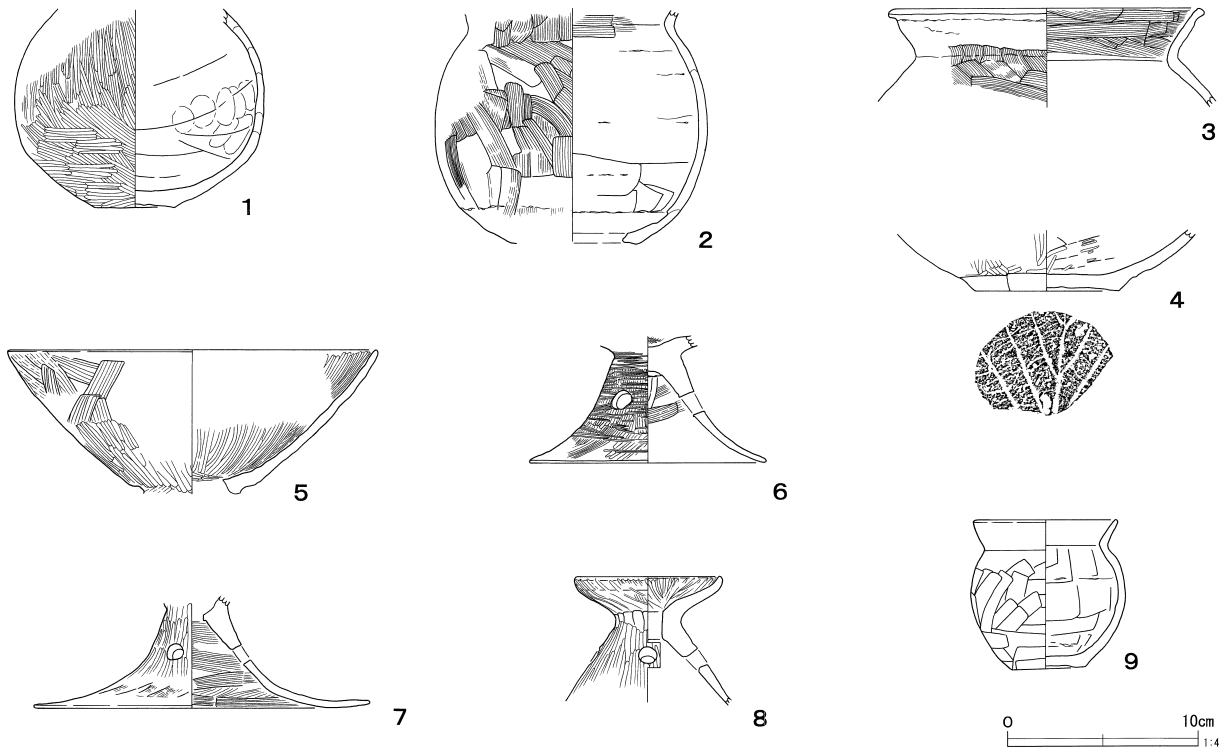
番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	壺	－	(22.0)	－	35	ＧＨＩＪＫ	普通	灰黄	器壁荒れ	

（３）グリッド出土遺物（第48図）

グリッド出土遺物は、C－２グリッドからと表採遺物で、第１号方形周溝墓と第２号方形周溝墓に関連するものである。

第12表　グリッド・表採出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎　土	焼成	色　調	備　　考	図版
1	土師器	坩	－	(10.5)	4.1	60	ＢＧ	普通	にぶい橙	C－２g.	23-２
2	土師器	壺	－	(12.3)	－	50	ＧＨＪ	普通	にぶい黄橙	C－２g.　焼成後底部穿孔	23-３
3	土師器	小型甕	(16.0)	5.2	－	40	ＧＨＩ	普通	にぶい褐	C－２g.	
4	土師器	壺	－	(3.2)	(7.6)	35	ＧＨ	良好	にぶい黄橙	C－２g.	
5	土師器	高坏	(19.4)	(7.7)	－	30	ＧＩ	普通	にぶい黄橙	C－２g.	
6	土師器	高坏	－	(6.7)	(12.3)	45	Ｈ	良好	にぶい黄橙	C－２g.　透孔３孔	23-４
7	土師器	高坏	－	(5.6)	(17.6)	50	ＧＨＩ	普通	明黄褐	C－２g.　透孔３孔	
8	土師器	器台	(7.8)	(6.8)	－	40	ＨＫ	普通	にぶい褐	C－２g.　透孔４孔	23-５
9	土師器	坩	7.6	7.8	3.9	100	ＡＨ	普通	褐	表採	23-６



第48図　グリッド出土・表採遺物

４．その他の遺構と遺物

（１）炭焼窯

第１号炭焼窯（第49・50図）

A－２・３グリッドに位置する。東側で第１号溝と重複し、切られていることから炭焼窯が古い。

燃焼部が第１号溝に切られており確認できた長さは6.50m である。煙突部などは確認できず、焼成部は長さ5.75m、最大幅2.00m、床面の勾配は窯尻と燃焼部との境で高低差７㎝とほぼ平坦である。窯底は被熱して焼けたローム上に炭化物層・焼土層・炭化物層の互層が確認された。燃焼部と焼成部の境はやや括れ幅1.45㎝を測る。焼成部は現存の長さ1.25m、幅1.65m～1.70m で焼成部より20㎝ほど低く窪んでいる。窯尻寄りの覆土中位から径11㎝、長さ17㎝の若干炭化した丸太材が出土し、床面からは小さいやや炭化した木材小片が出土した。

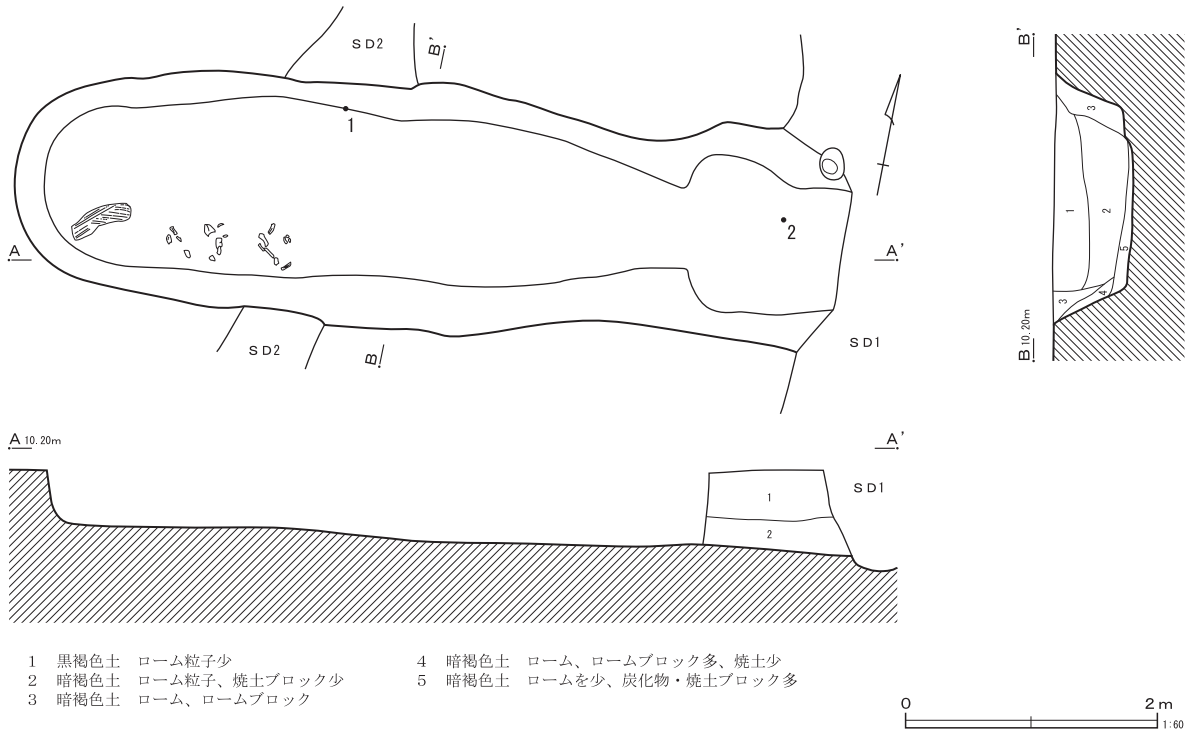
遺物は、窯尻から2.5m ほどの北壁際の窯底付近から木菟土偶片が出土した。燃焼部からは石製管玉が窯底から10㎝ほど浮いた状態で出土した。

14C－AMS の-年代測定結果によると、炭焼窯出土の木炭から、奈良時代と平安時代前半の前葉（８世紀代と９世紀代）の年代測定結果（Ⅴ－１を参照）がでている。

土偶（第50図１）

縄文時代の土偶頭部が炭焼窯の北壁際、床面直上から出土している。炭焼窯の年代については、８～９世紀頃という測定結果が出ており、土偶には、二次的に火を受けた痕跡がなく、炭焼窯の稼働終了後、埋没までの間に、何らかの事情で炭焼窯の内部に入り込んだものと考えられる。

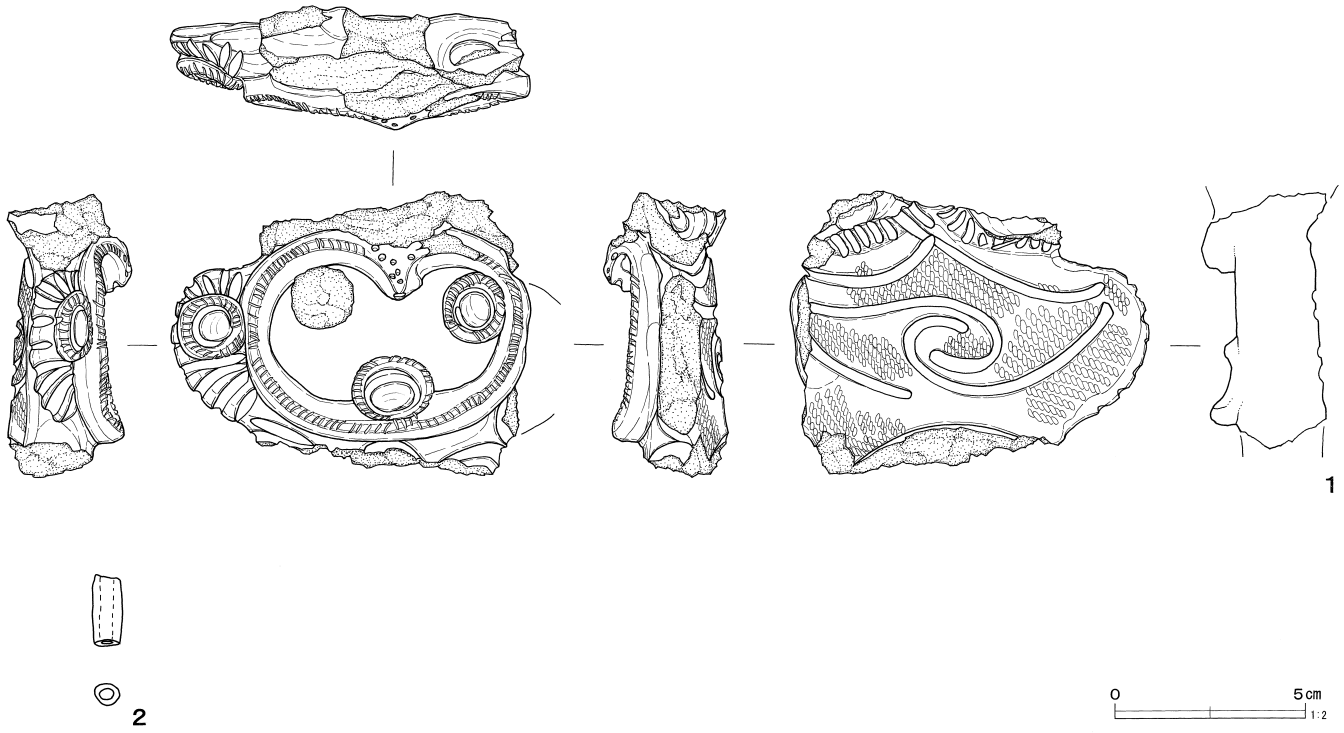
検出されたのは木菟土偶の頭部破片で、頭頂部、



1　黒褐色土　ローム粒子少
2　暗褐色土　ローム粒子、焼土ブロック少
3　暗褐色土　ローム、ロームブロック
4　暗褐色土　ローム、ロームブロック多、焼土少
5　暗褐色土　ロームを少、炭化物・焼土ブロック多

0　2m　1:60

第49図　第１号炭焼窯



第50図　第１号炭焼窯出土遺物

左側の結髪および耳、右眼を欠いている。残存部位の高さ8.5㎝、最大幅9.5㎝、厚さ約3.3㎝と、完形であれば高さが25㎝を超える大型の土偶になると推定できる。

顔面の輪郭、眉および鼻は、木菟土偶に特有の隆帯による貼り付けで表現される。顔面の輪郭から眉にかけての隆帯上面には、細かい刻みが施されている。鼻梁部分には不規則な円形刺突が施され、鼻孔は浅い凹みで表現される。両眼と口および耳は、円形粘土を貼り付けた後、中央を窪め、ドーナツ状に残った縁の上面には、顔の輪郭と同様の刻みが施される。口は、眼や耳に比べやや楕円形を呈している。耳の部分は、耳飾りを装着した状態を表現していると考えられる。なお、右眼は焼成後に剥落したと考えられる。

頭頂部から後頭部にかけては、結髪状の表現があったと思われるが、大半の部分が欠落している。結髪状の突起は、前頭部中央および左右の頭頂部に付けられていたと考えられる。特に左右の突起は後方に向かってラッパ状に開いていた可能性が強く、内側の付根部分には、低い円形の瘤が付けられていたようである。

頭部の背面は、縄文（RL）と沈線による入り組み文で施文されている。施文順序は、縄文が先で、沈線は後に施されたことが観察できる。

なお、土偶の地色は暗い褐色であるが、顔面の輪郭や耳の刻み、結髪の一部などに赤色顔料の痕跡が観察でき、全体に赤彩が施されていたと考えられる。焼成はしっかりしており、胎土も比較的緻密であるが、若干の砂粒が混じる。

土偶の表現や背面の文様などから、安行３a 式に伴う木菟土偶と考えられる。

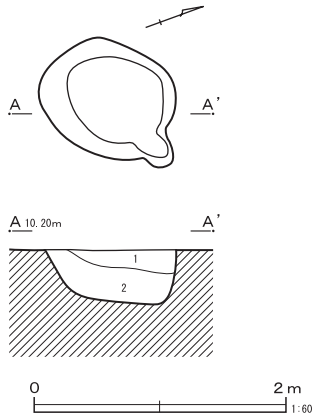
管玉（第50図２）

黒味がかった滑石製のもので、長さ1.9㎝、外径0.8㎝、孔径0.4㎝、重さ1.97g で、周溝墓からのものと考られる。

（２）土壙

第４号土壙（第51図）

B－３グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、北東部がピット状突出している。長径102㎝、短径86㎝、深さ35㎝を測る。北東部のピット状の部分は深さ51㎝を測る。主軸方位はN－51°－W を指す。



1　黒褐色土　ローム、ロームブロックを含む
2　黒褐色土　ローム、ロームブロックを多量に含む

第51図　第４号土壙

（３）溝跡

第１号溝（第52・53図）

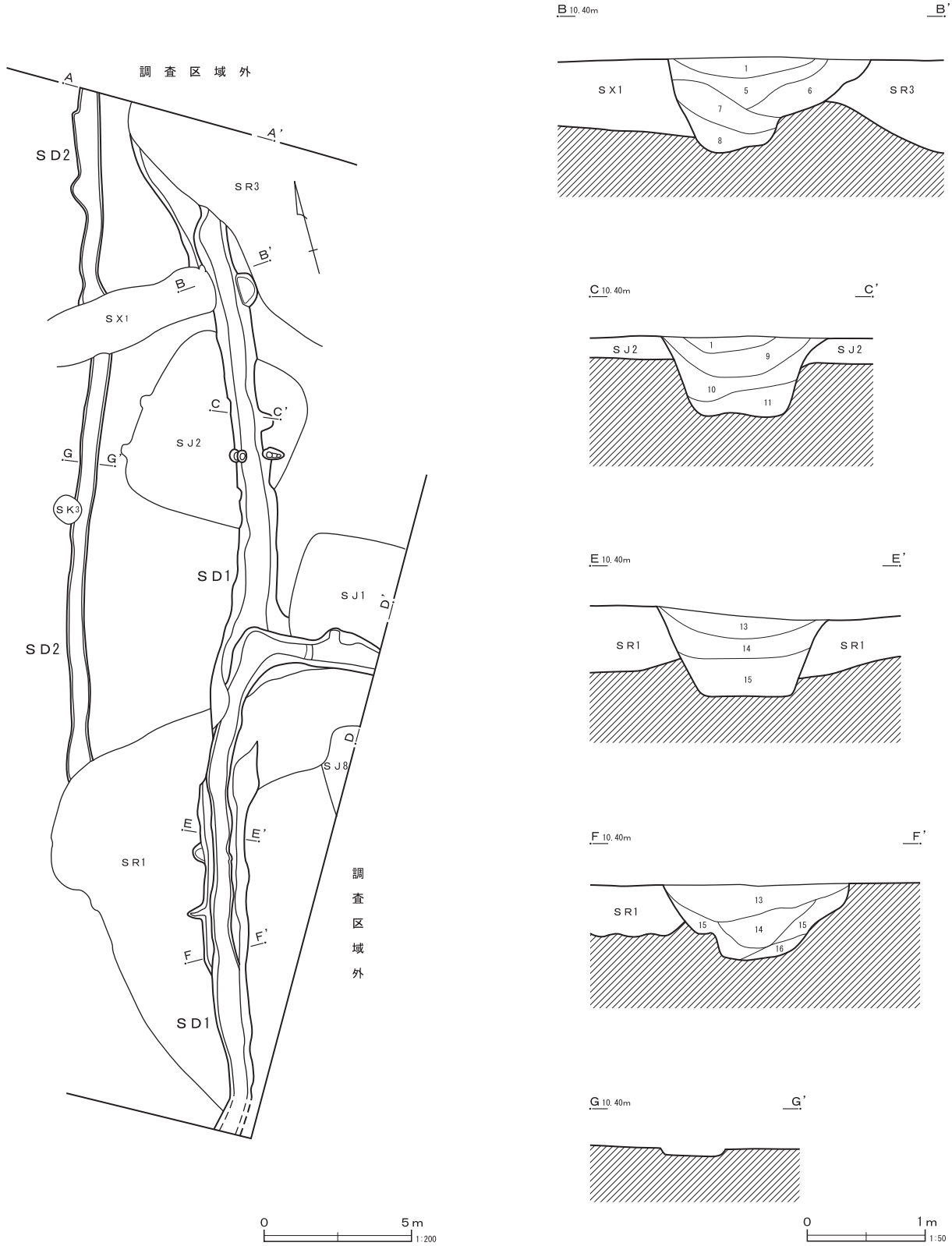
A・B・C・D－３、D－２グリッドに位置する。調査区を縦断し、重複する遺構いずれよりも新しい。北部はN－９°－E 方向、B・C－３グリッドにかけて極わずかに湾曲し、南部はN－10°－E 方向に延びる。

規模は全長35m、幅1.26m～1.55m、深さは0.4m～0.83m を測るが、溝底面の高低差はさほどない。

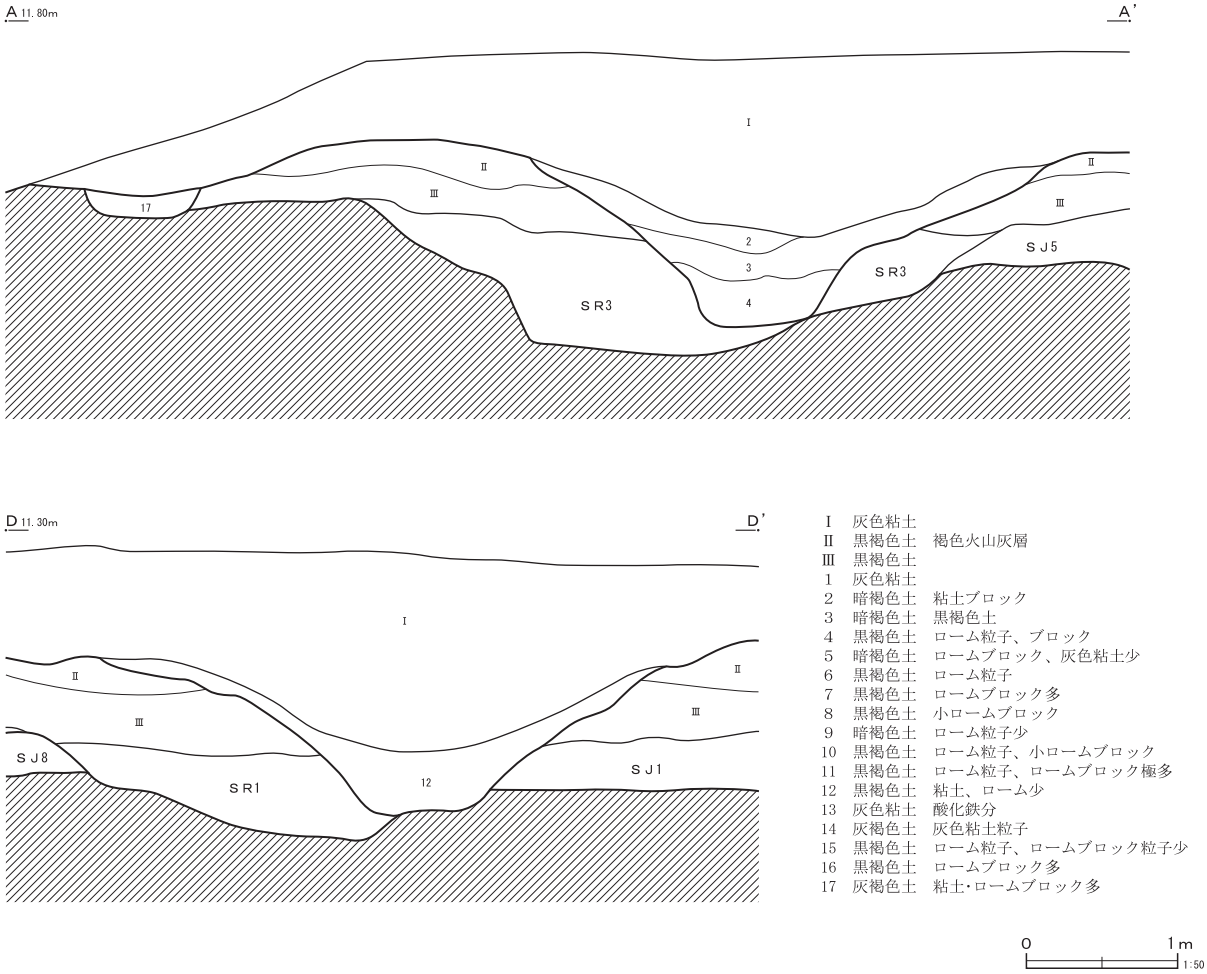
第２号溝（第52・53図）

A－３、B－２・３、C－２グリッドに位置する。調査区を縦断し、他の遺構と重複するがいずれの溝よりも新しい。N－15°－E 方向に延びる。

規模は全長23m、幅0.6m～1.00m、深さは２㎝～６㎝であるが４㎝程度が多い。


調 査 区 域 外
A
A'
SD2
SR3
B'
B
SX1
C
C'
SJ2
G
G'
SK3
SD1
SJ1
D'
SD2
D
SJ8
E
E'
SR1
調
査
区
域
外
F
F'
SD1
0
5m
1:200
B 10.40m
B'
SX1
SR3
1
5
6
7
8
C 10.40m
C'
SJ2
SJ2
1
9
10
11
E 10.40m
E'
SR1
SR1
13
14
15
F 10.40m
F'
SR1
13
15
14
15
16
G 10.40m
G'
0
1m
1:50

第52図　第１・２号溝（１）



Ⅰ　灰色粘土
Ⅱ　黒褐色土　褐色火山灰層
Ⅲ　黒褐色土
1　灰色粘土
2　暗褐色土　粘土ブロック
3　暗褐色土　黒褐色土
4　黒褐色土　ローム粒子、ブロック
5　暗褐色土　ロームブロック、灰色粘土少
6　黒褐色土　ローム粒子
7　黒褐色土　ロームブロック多
8　黒褐色土　小ロームブロック
9　暗褐色土　ローム粒子少
10　黒褐色土　ローム粒子、小ロームブロック
11　黒褐色土　ローム粒子、ロームブロック極多
12　黒褐色土　粘土、ローム少
13　灰色粘土　酸化鉄分
14　灰褐色土　灰色粘土粒子
15　黒褐色土　ローム粒子、ロームブロック粒子少
16　黒褐色土　ロームブロック多
17　灰褐色土　粘土･ロームブロック多

第53図　第１・２号溝（２）

第３号溝（第５図）

D－２グリッドに位置する。N－24°－W 方向に延びる。長さは2.56m の範囲で確認でき、幅25㎝、深さ５㎝を測る。

Ⅳ　小林八束２遺跡の調査

１．遺跡の概要

小林八束２遺跡は小林八束１遺跡の南約250mに位置し、調節池の東に隣接している。同じく埋没ローム台地上に立地する遺跡で、標高は11m程度である。

検出した遺構は、縄文時代早期の炉穴群４群(炉穴29基)、土壙37基、溝跡１条、ピット６基である。総じて出土遺物は少なく、炉穴より縄文早期の条痕文系土器が出土した。土壙・ピットからの出土遺物はほとんどなく、遺構の時期は明確でない。

縄文時代早期の炉穴は重複して確認され、大きく４群に分かれる。第１号炉穴群と第２号炉穴群は調査区北西部中央に隣接して位置し、第３号炉穴群は第１・２号炉穴群の南東に隣接し、調査区中央に位置する。第４号炉穴群は調査区北東部に位置する。

第１号炉穴群は炉穴が９基検出され、地山のローム赤変範囲が確認された炉穴は５基で、第３号

第54図　小林八束２遺跡全体図

炉穴と第４号炉穴からは土器が出土した。

第２号炉穴群は炉穴が６基検出され、焼土が確認された炉穴は３基で同時に地山ロームの赤変範囲が確認された。

第３号炉穴群は３基の炉穴が検出され、焼土が確認できたのは２基で、１基の炉穴で地山ロームの赤変範囲が確認された。第16号炉穴から土器が出土した。

第４号炉穴群では11基の炉穴が確認でき、地山ロームの赤変範囲が確認できたのは６基で、第32号炉穴から土器が出土した。

土壙の平面形はほぼ楕円形で、主軸長は１～２ｍほど、短軸長は0.5～１ｍほどのものが主体である。

溝跡は調査区を横断するが、西側は撹乱を受け、東側は炉穴により確認できなかった。

２．遺構と遺物

（１）炉穴群

第１号炉穴群（第55・60図）

Ｂ－２グリッドに位置する。第１号炉穴から第９号炉穴の９基の炉穴が、6.0m×3.5mほどの範囲にあり重複している。

土層断面から第６号炉穴、第２号炉穴と第５号炉穴の間、第９号炉穴の土層が同じであることから、広範囲に火入れをした後、炉穴を設けられたとも考えられる。

第60図８～17は、第１号炉穴群全体から出土した土器群である。いずれも胴部破片で、８～11は内外面に条痕整形を施すもので、12～17は擦痕整形を施すものである。いずれも繊維を少量含み、焼成の良い土器群である。

第１号炉穴

炉穴群の最も南側に位置する。北側で第２・６号炉穴と重複し、第２号炉穴には切られているが第６号炉穴との新旧関係は不明である。平面形は二等辺三角形を呈し、主軸方位はＮ－25°－Ｗを指す。規模は主軸長1.88m、底辺部1.60m、深さ0.21mを測る。西辺部に炉底から深さ0.08mほどの楕円形の掘り込みがある。

第２号炉穴

第１号炉穴の北側に位置する。第１・６号炉穴と重複し、両炉穴を切っている。平面形はやや歪んだ楕円形を呈し、Ｎ－58°－Ｅを指す。規模は長軸1.70m、短軸1.08m、深さ0.18mを測る。被熱して焼土ブロック化した、地山ロームの炉床が確認できた。

第３号炉穴

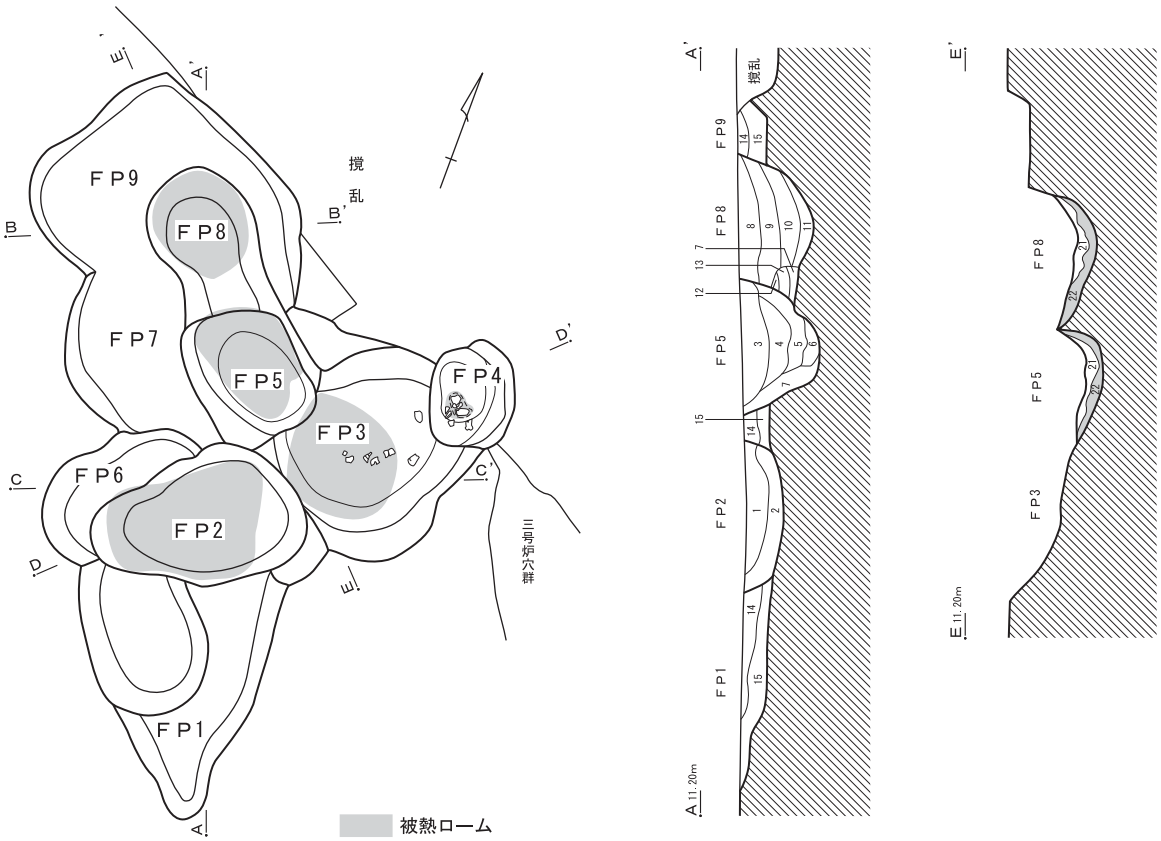
第２号炉穴の北東側に位置する。第２・４・５号炉穴と重複し、いずれの炉穴にも切られている。平面形はやや歪んだ楕円形を呈し、主軸方位はＮ－48°－Ｅを指す。規模は長軸1.5m程、短軸1.33m、深さ0.55mを測る。炉床西側で、被熱し焼土ブロック化した地山ロームが確認できた。

出土遺物は第60図１～４、炉床近くから検出された。１～４は同一個体の可能性が高く、外面に部分的な条痕整形を施し、内面に擦痕状の整形を施す尖底深鉢である。４は底部で、鋭角の尖底を呈する。１～４は胴部の輪積み成形部で若干括れるが、繊維の含有が少なく、焼成も良好で堅緻な土器である。

第４号炉穴

炉穴群の最も東側に位置する。第３号炉穴と重複し、第３号炉穴の上部を切っている。平面形は楕円形を呈し、主軸方位はＮ－10°－Ｗを指す。規模は長軸0.86m、短軸0.65m、深さ0.37mを測る。被熱して焼土ブロック化した、地山ロームの炉床が確認された。

遺物は、覆土中位で第60図５～７が出土した。５～７は同一個体と思われ、５は角頭状の口唇部が緩く外反する器形を呈し、口唇上に丸棒状工具による押圧状の斜位の刻みを施している。内外面



1　極暗赤褐色土　ロームブロック・焼土粒子・カーボン粒子少、ローム粒子多
2　極赤暗褐色土　焼土小ブロック少、焼土粒子若干
3　黒褐色土　焼土小ブロック少、焼土粒子・ローム粒子多
4　黒褐色土　焼土ブロック少、焼土粒子・ローム粒子多
5　黒褐色土　焼土粒子・ローム粒子多
6　極暗赤褐色土　ロームブロック・焼土ブロック多
7　褐色土　ロームブロック若干　締まりあり
8　暗褐色土　ローム粒子・カーボン粒子多
9　暗褐色土　ロームブロック少、ローム粒子・焼土粒子多
10　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子多
11　暗褐色土　ロームブロック・焼土ブロック若干、焼土粒子多
12　褐色土　ローム粒子若干　締まりあり
13　褐色土　ロームブロック少、ローム粒子多　締まりあり
14　極暗赤褐色土　焼土粒子少　締まりあり
15　褐色土　焼土粒子少　締まりあり
16　暗赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒子少
17　暗赤褐色土　焼土ブロック・ロームブロック少、焼土粒子若干
18　褐色土　ロームブロック少、焼土粒子多
19　暗赤褐色土　焼土ブロック少、焼土粒子若干
20　極暗褐色土　焼土ブロック・焼土粒子多
21　暗赤褐色土　焼土ブロック・被熱ローム多
22　赤褐色土（被熱ローム）
23　極暗赤褐色土　被熱ロームブロック多
24　暗赤褐色土　被熱ロームブロック若干
25　極暗赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒子多
26　極暗赤褐色土　被熱ロームブロック・焼土ブロック多
27　極暗赤褐色土　ロームブロック多、焼土粒子若干
28　極暗赤褐色土　ロームブロック・焼土ブロック多

第55図　第１号炉穴群

とも擦痕状の整形を施しており、繊維を微量に含む。６・７は胴部破片で、内面に条痕が僅かに残る。繊維を微量に含み、堅緻な土器である。

第５号炉穴

炉穴群の中央部付近やや北寄りに位置する。第３・７・８号炉穴と重複し、すべての炉穴を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方位はN－44°－Wを指す。規模は長軸1.10m、短軸0.9m、深さ0.61mを測る。被熱して焼土ブロック化した、地山ロームの炉床が確認できた。

第６号炉穴

炉穴群の中央付近の西側、第２号炉穴の西側に位置する。第１・２号炉穴と重複し、第２号炉穴には切られているが、第１号炉穴との新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈すると推定され、主軸方位はN－43°－Eを指す。規模は長軸1.39m、短軸0.45mだけ確認でき、深さ0.20mを測る。

第７号炉穴

炉穴群の中央よりやや北西側に位置する。第２・５・６・８・９号炉穴と重複し、第５・６・８号炉穴に切られ、第９号炉穴との新旧関係は不明である。北東側に第５・８号炉跡があり全体は不明で、平面形は円形もしくは楕円形を呈すると推定される。規模は長軸1.60m、短軸0.95mの範囲が確認でき、深さは0.23mを測る。

第８号炉穴

炉穴群の北東部に位置する。第５・７・９号炉穴と重複し、第５号炉穴に切られ、第９号炉穴を切っている。第７号炉穴との新旧関係は不明である。平面形は歪んだ楕円形を呈し、主軸方位はN－45°－Wを指す。規模は長軸1.19m、短軸0.82mの範囲が確認でき、深さ0.58mを測る。被熱して焼土ブロック化した、地山ロームが炉床が確認できた。

第９号炉穴

炉穴群の最も北東側に位置する。第７・８号炉穴と重複し、第８号炉穴に切られているが、第７号炉穴との新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方位はN－60°－Wを指す。規模は長軸2.14m、短軸1.55m、深さ0.28mを測る。

第２号炉穴群（第56・60図）

A・B－２グリッドに位置し、第１号炉穴群の北に隣接する。第10号炉穴から第14号炉穴の５基の炉穴が5.4m×2.0m程の範囲に連なってあり、第15号炉穴以外は重複している。土層断面から、南東側の第10号炉穴から順次北西方向の第13号炉穴に向かって作り変えられたことが確認された。

第10号炉穴

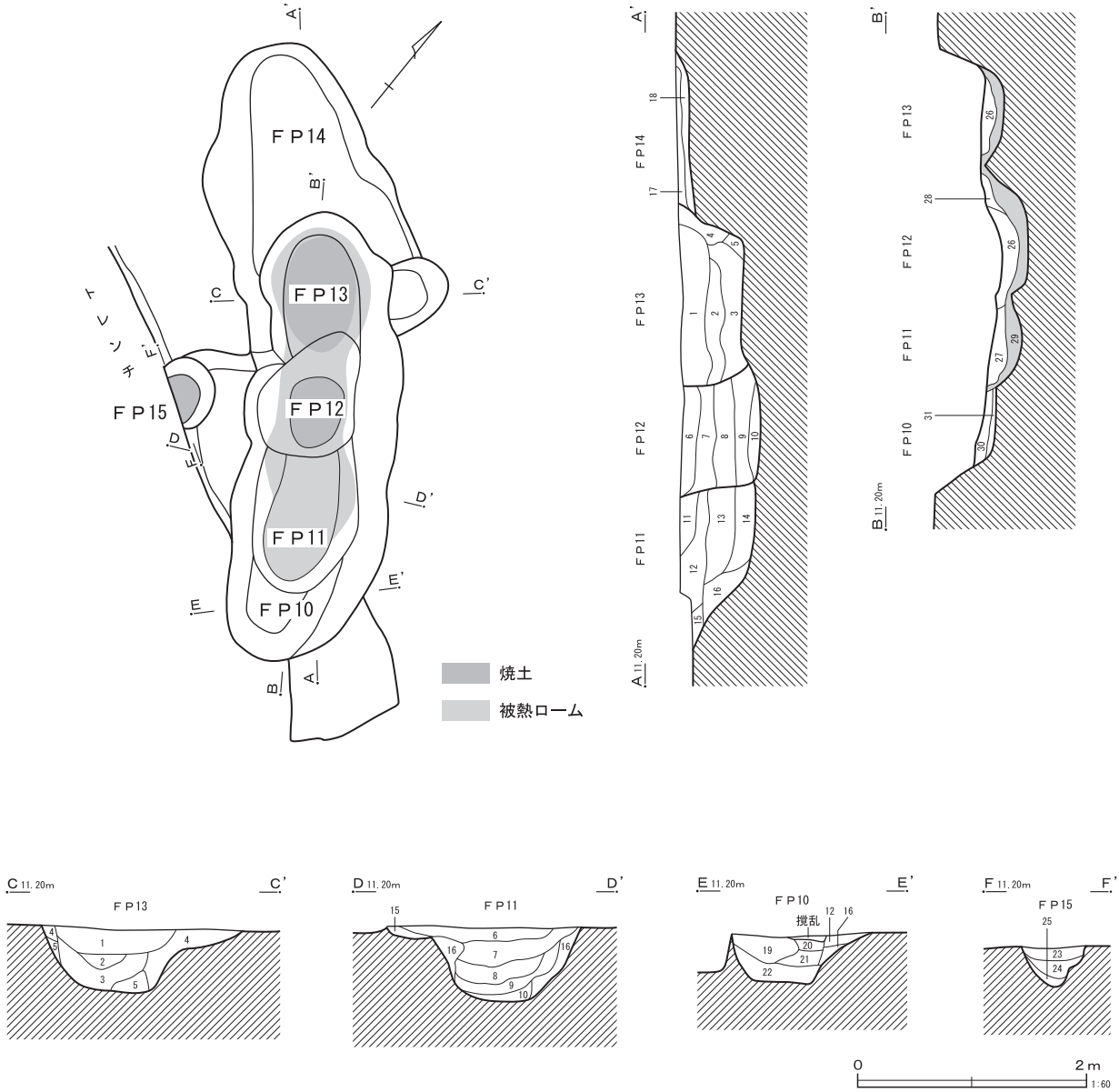
B－２グリッド内に位置し、炉穴群の最も南東に位置する。北西で第11号炉穴と重複し、切られている。平面形は楕円形を呈すると推定され、主軸方位はN－20°－Wを指す。規模は長軸0.95mの範囲が確認され、短軸0.95m、深さ0.51mを測る。

第11号炉穴

B－２グリッドに位置し、炉穴群の南部に位置する。南東で第10号炉穴と北西で第12号炉穴と重複し、第10号炉穴を切り、第12号炉穴に切られている。平面形は楕円形を呈すると推定され、主軸方位はN－28°－Wを指す。規模は長軸1.18mの範囲が確認され、短軸0.85m、深さ0.66mを測る。被熱して焼土ブロック化した、地山ロームの炉床が確認できた。

第12号炉穴

B－２グリッドに位置し、炉穴群の中央に位置する。南東で第11号炉穴と北西で第13号炉穴と重複し、第11号炉穴を切り、第13号炉穴に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.17mの範囲が確認され、短軸0.73m、深さ0.68mを測る。被熱して焼土ブロック化した、地山ロームの炉床が確認できた。



1　極暗赤褐色土　ローム粒子・焼土粒子･炭化物粒子多
2　極暗赤褐色土　焼土粒子多
3　極暗赤褐色土　焼土ブロック若干、焼土粒子多
4　褐色土　炭化物粒子・焼土粒子少　締まりあり
5　褐色土　炭化物粒子・焼土粒子・ロームブロック少　締まりあり
6　赤褐色土　焼土ブロック若干、焼土粒子多
7　赤褐色土　ローム粒子・焼土粒子多
8　赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒子多
9　暗赤褐色土　焼土粒子多
10　暗赤褐色土　ロームブロック少、焼土ブロック多
11　暗赤褐色土　焼土ブロック少、焼土粒子多
12　暗赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒子多
13　暗赤褐色土　焼土粒子少、炭化物粒子多
14　暗赤褐色土　ロームブロック少、焼土粒子多
15　暗赤褐色土　焼土粒子・炭化物粒子少　締まりあり
16　暗赤褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多　締まりあり
17　褐色土　褐色ブロック　締まりあり
18　褐色土　ロームブロック　締まりあり
19　暗赤褐色土　焼土小ブロック少、焼土粒子多
20　暗赤褐色土　ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子少
21　暗赤褐色土　焼土粒子少
22　暗赤褐色土　焼土粒子多
23　暗赤褐色土　焼土粒子多、ロームブロック少
24　暗赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロック若干
25　暗赤褐色土　焼土粒子多、ロームブロック少
26　暗赤褐色土　ロームブロック・焼土ブロック多、被熱ローム・炭化物粒子少
27　暗赤褐色土　ロームブロック・被熱ローム。焼土ブロック多
28　にぶい赤褐色土　被熱ローム多
29　赤褐色度（被熱ローム）
30　暗赤褐色土　焼土粒子多、炭化物粒子・ロームブロック少
31　にぶい赤褐色土　ロームブロック多

第56図　第２号炉穴群

遺物は第60図18の細片が出土した。胴部破片で、外面に粗い条痕整形を施し、繊維を少量含む。

第13号炉穴

A－２グリッドに位置し、炉穴群北部に位置する。南東で第12号炉穴と北東で第14号炉穴と重複し、第12・14号炉穴の両方を切っている。平面形は楕円形を呈し、N－40°－W を指す。規模は長軸1.57m、短軸0.97m、深さ0.56m を測る。炉床では、焼土と被熱し焼土ブロック化した地山ロームが確認できた。

第14号炉穴

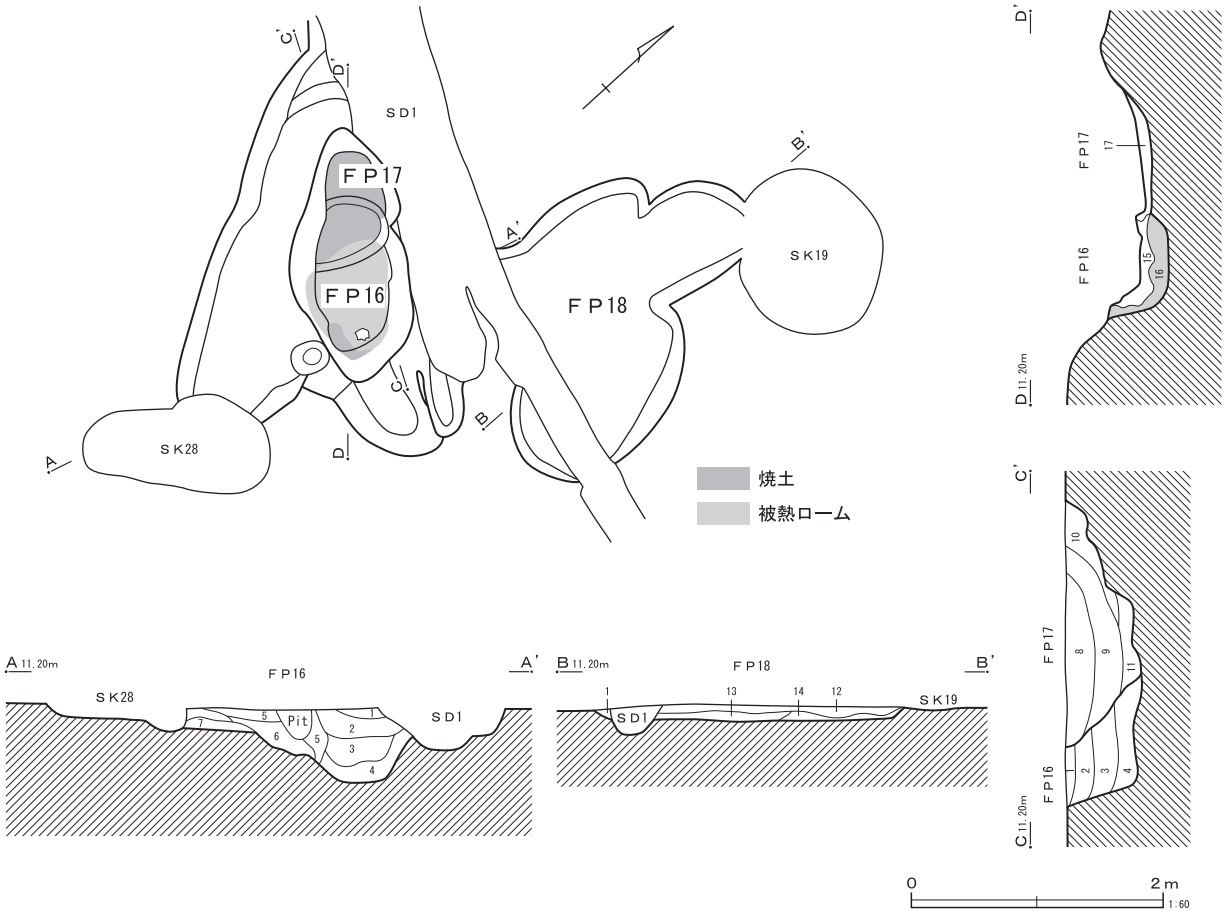
A－２グリッドに位置し、炉穴群の最も北に位置する。南東で第13号炉穴と重複し、切られている。平面形は楕円形を呈すると推定され、主軸方位は N－50°－W を指す。規模は長軸1.50m の範囲が確認され、短軸1.45m、深さ0.19m を測る。

第15号炉穴

B－２グリッドに位置し、炉穴群の南西部に位置する。南西部は攪乱されて全容はつかめないが、調査区内では半円形で0.35m の範囲が確認され、幅0.60m、深さは0.34m を測る。

第３号炉穴群（第57・60図）

B－２・３グリッドに位置し、第１・２号炉穴



1　暗赤褐色土　焼土粒子・ローム粒子少
2　暗赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロック・ローム粒子・ローム小ブロック少
3　暗赤褐色土　焼土粒子・ローム粒子多
4　極暗赤褐色土　ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子少、ローム粒子多
5　褐色土　焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子少　締まりあり
6　褐色土　ロームブロック・焼土小ブロック少　締まりあり
7　褐色土　ロームブロック・焼土ブロック少　締まりあり
8　にぶい赤褐色土　焼土小ブロック・炭化物粒子少、焼土粒子多
9　にぶい赤褐色土　焼土ブロック少、焼土粒子多
10　にぶい赤褐色土　ロームブロック・ローム粒子少　締まりあり
11　極暗赤褐色土　焼土ブロック少、炭化物粒子・焼土粒子多
12　暗褐色土　褐色ブロック・炭化物粒子少　締まりあり
13　褐色土　褐色土・ロームブロック少　締まりあり
14　褐色土　ロームブロック少　締まりあり
15　暗赤褐色土　焼土ブロック・被熱ローム多、炭化物粒子少
16　赤褐色土（被熱ローム）
17　にぶい赤褐色土　ロームブロック・焼土粒子多、被熱ローム少

第57図　第３号炉穴群

群の南東に隣接する。第16号炉穴から第18号炉穴の３基の炉穴が、3.6m×2.0mほどの範囲に存在し、第16・17号炉穴は重複している。

第16号炉穴

B－３グリッドに位置し、炉穴群の南側に位置する。西側で第17号炉穴と重複し、切られている。平面形は楕円形を呈すると推定され、主軸方位はN－49°－Wを指す。規模は長軸1.18mの範囲が確認でき、短軸0.90m、深さ0.57mを測る。炉床で、焼土と被熱して焼土ブロック化した地山ロームが確認できた。

遺物は覆土第４層より、第60図19が出土した。19は口縁部破片で、丸頭状口唇部が立つ器形を呈し、口唇部に刻みは認められない。口唇部が荒れているため詳細は不明であるが、疑口縁の可能性もある。繊維を少量含み、擦痕状の整形を施す。

第17号炉穴

B－２グリッドに位置し、炉穴群の南側に位置する。東側で第16号炉穴と重複し、切っている。平面形は楕円形を呈すると推定され、主軸方位はN－49°－Wを指す。規模は長軸1.55m、短軸0.75m、深さ0.59mを測る。炉床で、焼土が確認された。

遺物は第60図20・21が出土した。20は内面に強い削り状の整形を施した先細り状の口唇部が、緩く開く器形を呈する。内面は植物の茎状工具で粗い横位の整形を施し、外面に貝殻条痕を施す。繊維をほとんど含まず、砂粒の目立つ胎土であるが、堅緻な土器である。21は外面に擦痕整形、内面に条痕整形を施す胴部破片である。繊維を微量に含む。

第18号炉穴

B－３グリッドに位置し、炉穴群の北側に位置する。南側で溝と重複し、切られている。平面形は歪んだ凸字状を呈し、主軸方位はN－14°－Eを指す。規模は主軸1.80mの範囲が確認でき幅1.95m、凸部上部は長さ0.75m、幅は0.76m、深さ0.11mを測る。

第４号炉穴群（第58～61図）

B－３・４グリッドに位置し、調査区北東部にある。第19号炉穴から第32号炉穴で、13基の炉穴が、3.1m×1.7mほどの範囲にある。北東の炉穴群と南の炉穴群に分けることもできる。第19・20号炉穴は異なる番号を付していたが土層断面からは１基としか認められないため、報告では第19号炉穴とし、第20号炉穴は欠番とする。第27・28号炉穴は土層断面から、第27号炉穴の土層が第28号炉穴へと続いており、一体のものと捉えることができる。第29・30号炉穴は炉底が全面平坦で、２基の炉穴に分けることができない。土層断面より新たに、第26号炉穴内と第31・32号炉穴間に１基ずつ計２基の炉穴が確認できた。

第19号炉穴

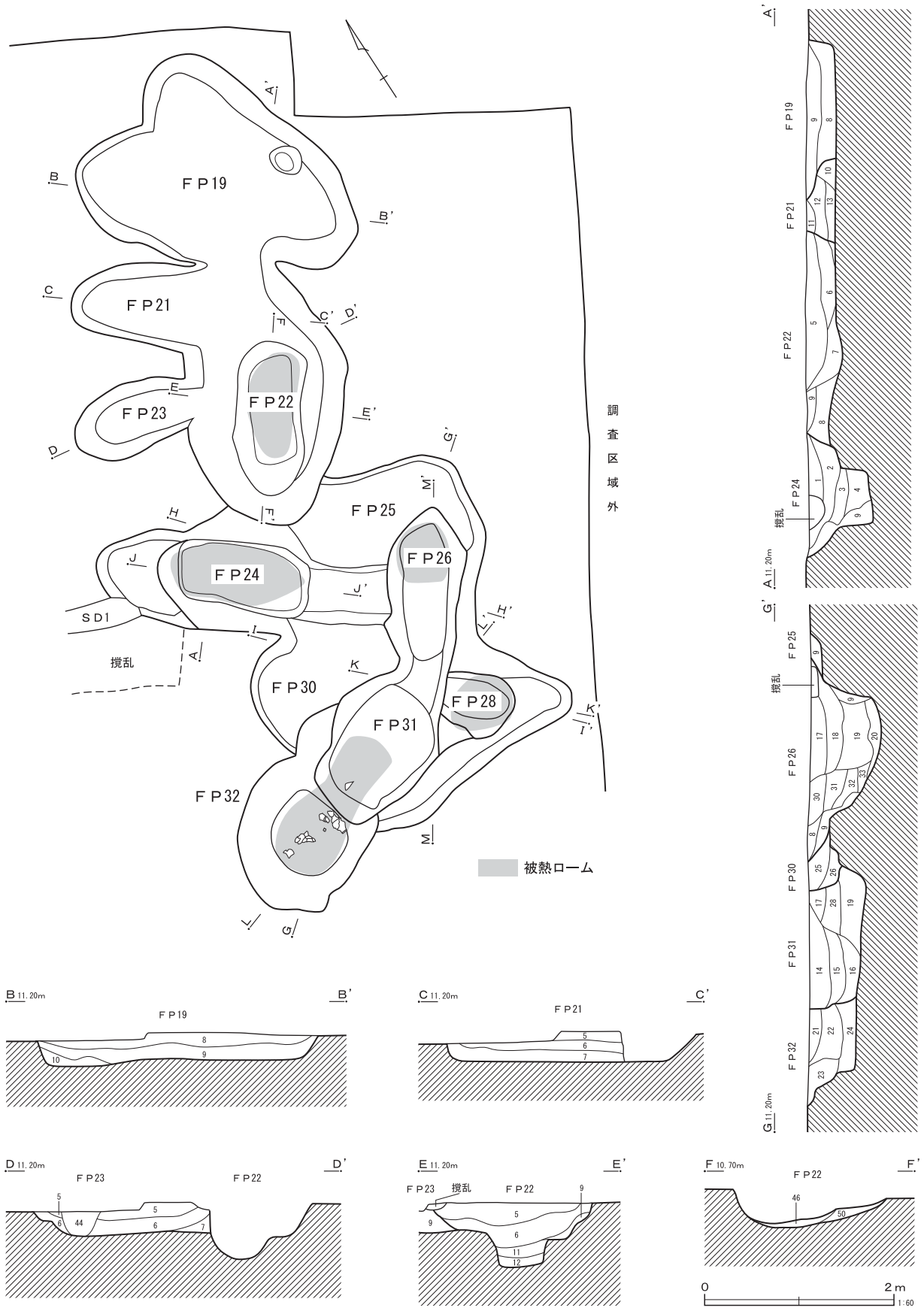
炉穴群の最も北東に位置する。土層から２基の炉穴が重複していることは確認できなかった。南西側の第21号炉穴と重複し、切っている。平面形は楕円形土壙がＶ字型に重複したような形を呈し、主軸方位はN－26°－Wを指す。規模は北東側が2.78m、南西側が2.85m、最大幅2.18m、深さ0.30mを測る。

遺物は第60図22～29が出土している。26は口縁部破片、他は胴部破片である。26は緩い波状縁を呈する口縁部破片で、丸頭状を呈する口唇部が緩く開く器形を呈する。外面に粗い擦痕状の整形、内面に条痕整形を施し、繊維を若干含む。他は、内外面に条痕状整形を施す。

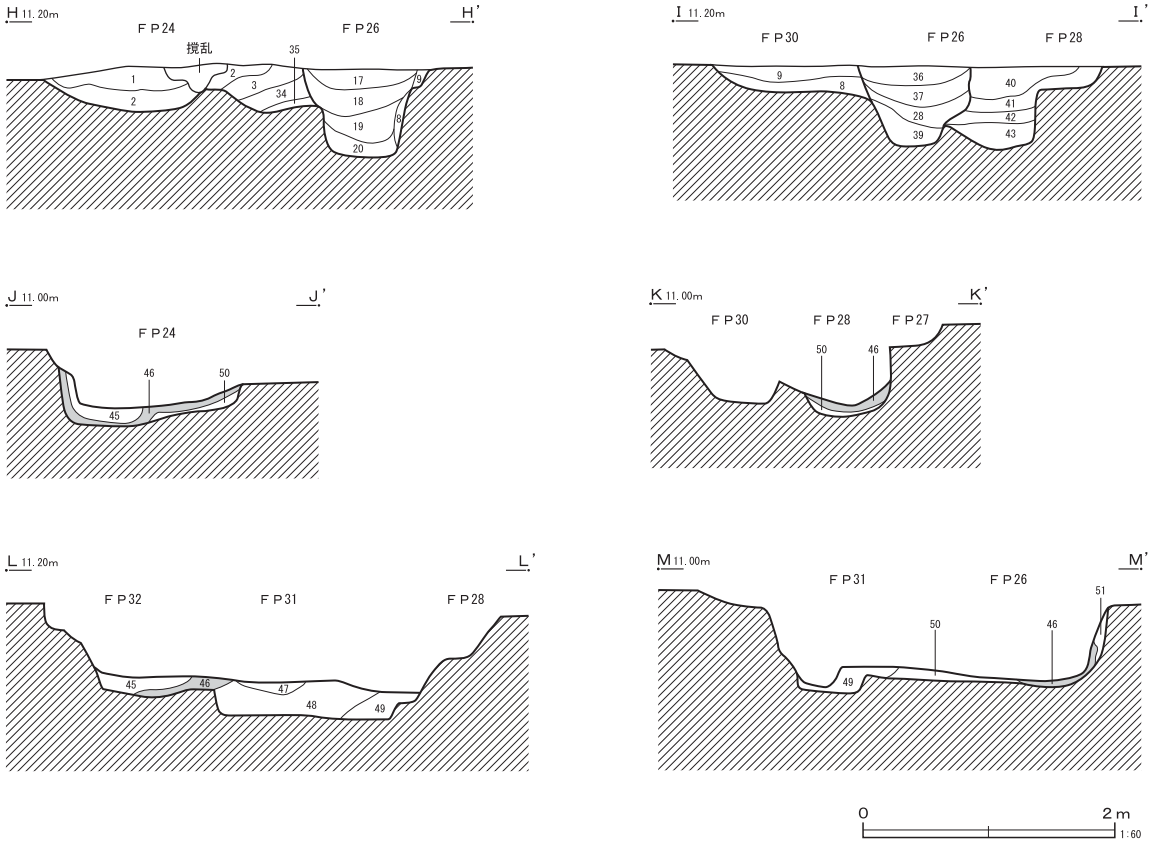
第21号炉穴

第19号炉穴の南西に隣接している。平面形は楕円形と推定され、N－35°－Wを指す。規模は主軸1.82m、短軸0.90mの範囲が確認され、深さは0.20mを測る。

遺物は流れ込みの第60図34の細片が出土したのみである。34は単節RL縄文を施す、縄文時代後

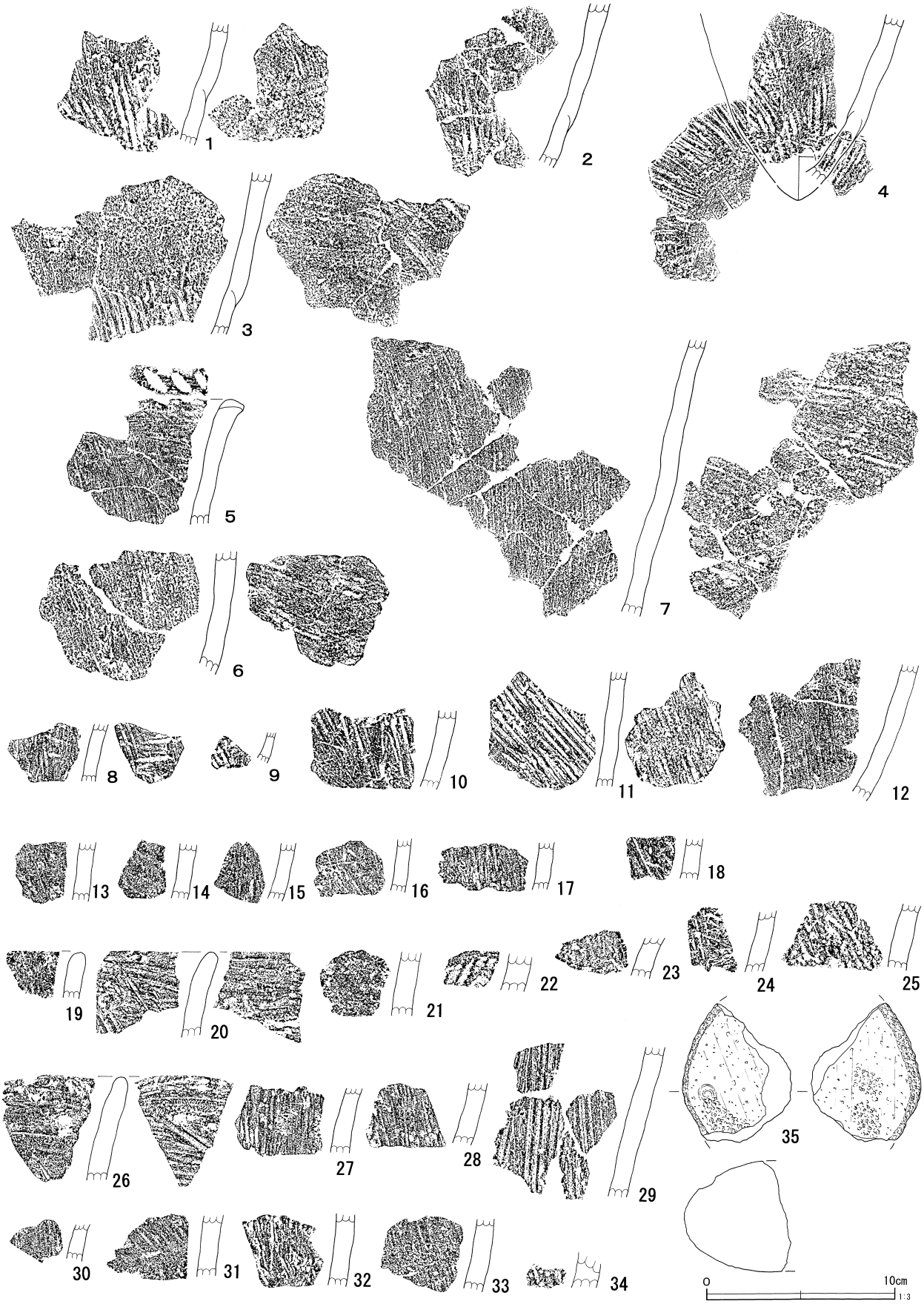


第58図　第４号炉穴群（１）

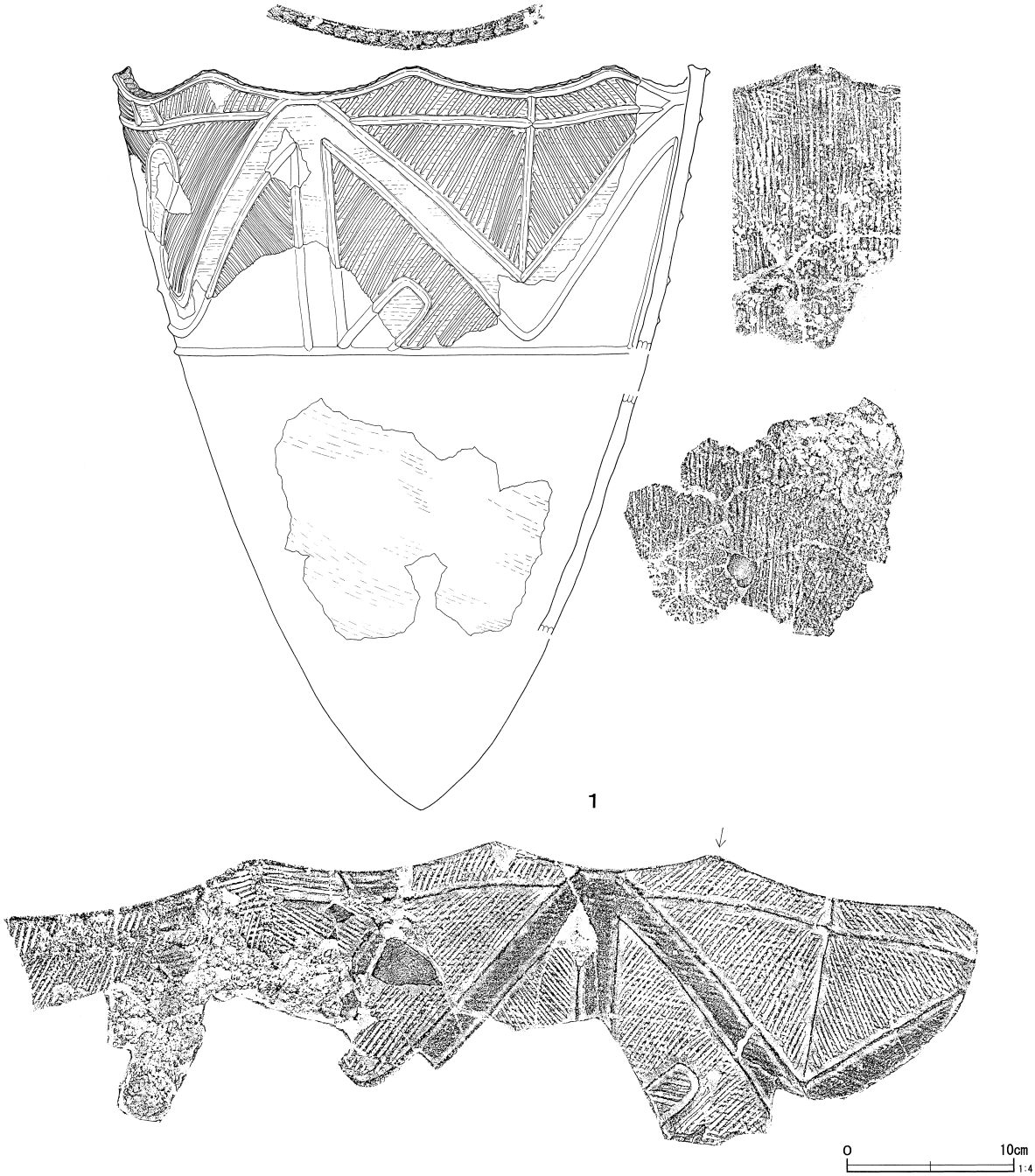


1　にぶい赤褐色土　焼土粒子・炭化物粒子若干　灰色粒子少
2　にぶい赤褐色土　焼土粒子多、炭化物粒子
3　にぶい赤褐色土　焼土粒子多
4　暗褐色土　焼土ブロック多
5　褐色土　焼土ブロック・焼土粒子少
6　褐色土　炭化物粒子少
7　褐色土　ロームブロック多
8　褐色土　焼土ブロック少　締まりあり
9　褐色土　焼土粒子極少
10　褐色土　ロームブロック多
11　暗赤褐色土　焼土粒子多
12　暗赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒子多
13　暗赤褐色土　ロームブロック・焼土粒子
14　にぶい赤褐色土　焼土粒子多、焼土ブロック少
15　にぶい赤褐色土　焼土粒子・焼土ブロック少
16　暗赤褐色土　焼土粒子極多
17　褐色土　焼土ブロック・焼土粒子少
18　極暗赤褐色土　焼土粒子少　締まりあり
19　極暗赤褐色土　焼土ブロック・ロームブロック多　締まりあり
20　暗赤褐色土　焼土ブロック・ロームブロック多
21　暗赤褐色土　焼土粒子多
22　暗赤褐色土　焼土小ブロック若干、焼土粒子多　締まりあり
23　褐色土　ローム粒子若干、炭化物粒子少　締まりあり
24　極暗赤褐色　焼土粒子多、炭化物粒子少　締まりあり
25　褐色土　焼土粒子多
26　褐色土　焼土ブロック・炭化物粒子少、焼土粒子多
27　褐色土　ロームブロック・焼土粒子少　締まりあり
28　褐色土　焼土ブロック若干、焼土粒子少　締まりあり
29　褐色土　焼土粒子少
30　暗赤褐色土　焼土ブロック少、焼土粒子多
31　暗赤褐色土　焼土ブロック少
32　暗赤褐色土　ロームブロック少
33　暗赤褐色土　ロームブロック多
34　にぶい赤褐色土　焼土小ブロック少、焼土粒子若干
35　にぶい赤褐色土　ローム粒子少
36　暗赤褐色土　焼土小ブロック・焼土粒子少
37　暗赤褐色土　焼土小ブロック・ロームブロック・焼土粒子少
38　暗赤褐色土　ロームブロック若干、焼土粒子少
39　暗赤褐色土　ロームブロック若干
40　暗赤褐色土　焼土粒子少
41　極暗赤褐色土　焼土ブロック少
42　極暗赤褐色土　焼土粒子少
43　極暗赤褐色土　焼土粒子多、炭化物粒子・焼土ブロック少
44　暗褐色土　ローム粒子・黒色土ブロック少
45　極暗赤褐色土　焼土小ブロック・焼土粒子多、焼土ブロック・炭化物粒子少
46　暗赤褐色土（被熱ローム）
47　にぶい赤褐色土　ロームブロック多
48　にぶい赤褐色土　ロームブロック・焼土粒子少
49　にぶい赤褐色土　焼土粒子多
50　褐色土　ロームブロック多、焼土ブロック少
51　褐色土　焼土小ブロック少

第59図　第４号炉穴群（２）



第60図　炉穴出土遺物（１）



第61図　炉穴出土遺物（２）

期前葉の堀之内式土器と思われる。

第22号炉穴

第21号炉穴の南に隣接し、第23号炉穴と重複し、切っている。平面形は楕円形を呈し、主軸方位はN－34°－Eを指す。規模は長軸1.94m、短軸1.52m、深さ0.67mを測る。炉床で、被熱し焼土ブロック化した地山ロームが確認された。

第23号炉穴

第22号炉穴の北西に隣接して位置し、第22号炉穴に切られている。平面形は楕円形を呈すると推定され、主軸方位はN－75°－Wを指す。規模は長軸1.70m、短軸0.72mの範囲が確認でき、深さは0.25mを測る。

第24号炉穴

第23号炉穴の南西に位置する。平面形は楕円形

を呈し、主軸方位はN－50°－Wを指す。規模は長軸1.35m、短軸1.20m、深さ0.65mを測る。炉床で、被熱しブロック化した地山ロームが確認された。

第25号炉穴

第24号炉穴の東に接し、第26号炉穴と重複し、切られている。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方位はN－69°－Wを指す。規模は長軸1.9m、短軸1.0mの範囲が確認でき、深さは0.10mを測る。

第26号炉穴

第24号炉穴の南東方に位置し、第25号炉穴と重複し、切っている。楕円形を呈すると推定され、主軸方位はN－32°－Eを指す。規模は長軸1.95m、短軸0.88mの範囲が確認でき、深さ0.69mを測る。炉底北側で、被熱し焼土ブロック化した地山ロームが確認できた。土層断面から、本炉穴に再度炉穴を設置して使用した状況がつかめた。新炉穴は本炉穴を壊して設置されている。

遺物は第60図30～33が出土している。いずれも胴部破片で、30・33は擦痕整形、31・32は条痕整形を施す。

第28号炉穴

炉穴群の南端に位置する。第27号炉穴としたものから土層が第28号炉穴へと続いていることより、一体のものと捉えた。北西で第26号炉穴に切られている。平面形は楕円形と推定され、主軸方位はN－62°－Wを指す。規模は長軸1.40mの範囲が確認でき、短軸0.68m、深さはテラス状部分が0.15m、本体部が0.53mを測る。炉床で、被熱し焼土ブロック化した地山ロームが確認された。

第30号炉穴

第24・26・31号炉穴に挟まれるように位置する。隅丸方形と推定され、主軸方位はN－84°－Wを指す。規模は長軸1.58m、短軸0.84mの範囲が確認でき、深さ0.20mを測る。

第31号炉穴

炉穴群の南側に位置する。西側が第32号炉穴に切られている。平面形は隅丸長方形で、主軸方位はN－65°－Wを指す。規模は長軸1.60m、短軸1.15m、深さ0.51mを測る。炉床で、被熱し焼土ブロック化した地山ロームが確認された。土層断面から、本炉穴に再度炉穴を設置して使用した状況がつかめた。新炉穴は第31・32号炉穴を壊して設置されている。

遺物は第60図35の石器が出土した。35は安山岩製の磨石の破片で、長さ7.4㎝、幅5.8㎝、厚さ5.9㎝、重さ253.6gを測る。両面に磨り面と、敲打痕が残る。

第32号炉穴

炉穴群の南西端に位置する。第31号炉穴の西側上部を切っている。平面形は楕円形で、主軸方位はN－65°－Eを指す。規模は長軸1.50mの範囲が確認でき、短軸1.35m、深さ0.50mを測る。炉床において、被熱しブロック化した地山ロームが確認された。

遺物は、全体の形が復元される口縁部と胴部の大形破片が覆土最下層から出土した。

第61図１は口縁部が約半分現存するもので、口縁は緩い10単位の波状を呈するものと思われる。若干内湾気味に開く口縁部から尖底へと移行する砲弾形を呈し、底部を欠損する。口唇上に小さなアナダラ属の貝殻背圧痕を押捺し、波長部では口唇部に直行する方向で、貝項を内面側に向け２か所に、それ以外では口唇に並行する方向に連続して押捺施文する。

胴上半部の文様は、口縁部幅狭区画帯と胴部文様帯から構成されており、細隆起線で口縁部に幅狭の区画帯を設け、以下の胴部文様帯に並行する細隆起線で鋸歯状のモチーフや、襷状文の変形したモチーフを描いている。文様描出に使用される細隆起線はやや幅広のものであるが、断面三角状に整形されている。

口縁部幅狭区画帯は、実測図下段の展開拓影図の左側で理解されるように、波状口縁の口唇外端

部に細隆起線を配して上端部を区画し、波長部から細隆起線を垂下して縦位区画を施し、波長部からやや間を空けた口縁部区画帯内に、並行する細隆起線を対称的なハ字状に配する構成を採る部分がある。このハ字状に配した細隆起線と、垂下する細隆起線に挟まれた左右の区画内には、横位の集合沈線文を充填施文している。また、並行するハ字状細隆起線間は地文の条痕を磨り消し、無文部を形成している。さらに、その両外側の口縁部区画内には斜行する集合沈線文を充填施文し、区画内相互の集合沈線充填文の施文方向の変化で、細隆起線区画文様相互の違いを際立たせている。

一方で、実測図正面の様に、波底部を基準として文様帯を縦位区画する構成を採る部分もある。波頂部を中心とした構成と同様な文様帯分割と区画を行うもので、波底部から細隆起線を垂下して口縁部と胴部を区画し、縦位の細隆起線を中心に左右の対称方向に傾斜する集合沈線文を充填施文する。また、同様に並行する細隆起線を波底部から垂下し縦位区画し、左右に連結する並行細隆起線を大きく鋸歯状に配して、基幹的なモチーフを構成している。

この並行する細隆起線の縦位区画文は幅狭口縁部区画帯を貫通しており、構成上１本の細隆起線の縦・横位の区画文と同様な効果を持つが、本来は区画文や文様描出要素として使用されるのが通常である。本個体の場合、剥落や欠損部分が多いため、全体の文様構成が不明瞭であるが、縦位区画の右側区画では、文様帯下端区画と合わさるように右上がりの短い区画文が施文されており、口縁部から左下がりに傾斜する区画文では、先端が蕨手状に巻き上がるモチーフ構成が観察される。

モチーフ構成にも並行する細隆起線の縦位区画を基準とした襷状区画文からの変形が認められるが、全体の文様構成は胴部の鋸歯状区画文が口縁部幅狭区画帯へと貫入していることから、口縁部幅狭区画帯と胴部文様帯との区分が曖昧となり、文様帯構成が崩れ、乱れが生じているものと把握される。

胴上半部の文様帯内では、地文の条痕文は磨り消されていないが、細隆起線間では磨り消されている。また、文様帯以下の胴部では条痕整形を施した後、条痕は磨り消されている。裏面では、口縁部から胴部にかけて、明瞭な縦位の条痕整形を施しており、磨り消しは施されない。

胎土に繊維を少量含むが、焼成が良く、比較的堅緻な土器である。文様や文様要素の特徴から、早期後葉の条痕文系土器群の野島式に比定されることは明瞭であるが、一見古相を帯びるものの、文様帯構成や文様構成に乱れや変形が認められること、大きな区画内相互において集合沈線文を同方向に充填施文する傾向があること、裏面の条痕整形が縦位方向のみであることなどから、野島式でも後半期に位置付けられる可能性が高いものと考えられる。

（２）土壙

第１号土壙（第62図）

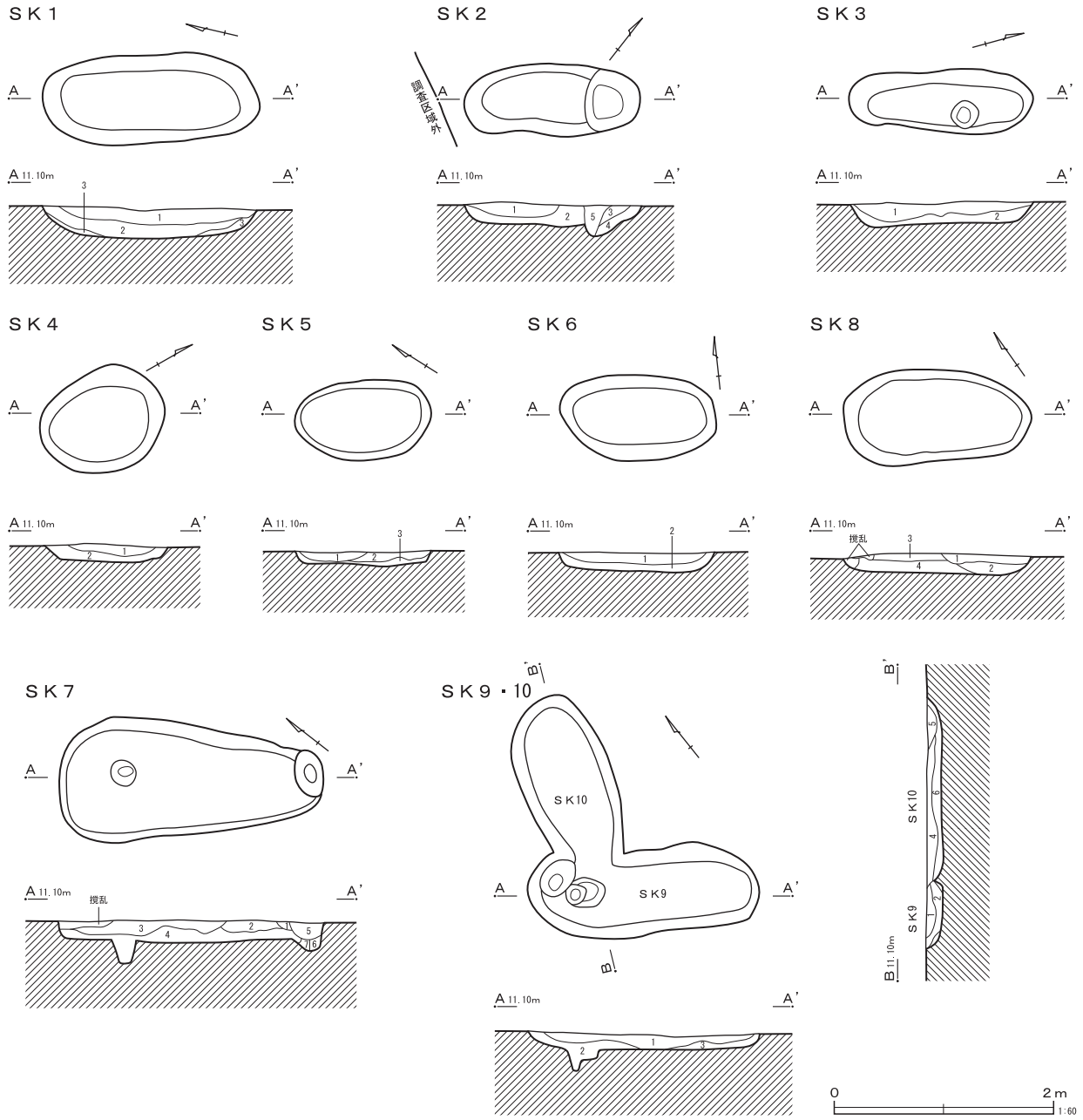
C－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－14°－Wを指す。規模は長軸1.94m、短軸0.78m、深さ0.28mを測る。

第２号土壙（第62図）

C－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－52°－Eを指す。規模は長軸1.59m、短軸0.65m、深さ0.21mを測る。北東端にピットがあり、歪んだ円形で径0.50m、壙底から深さ0.07mを測る。

第３号土壙（第62図）

C－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－16°－Eを指す。規模は長軸1.65m、短軸0.58m、深さ0.21mを測る。東壁際にピットがあり円形で径0.24m、土壙の底から深さ0.20mを測る。



ＳＫ１
1　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子少
2　褐色土　ロームブロック若干、ローム小ブロック少
3　褐色土　ロームブロック多

ＳＫ２
1　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子少
2　暗褐色土　ロームブロック若干、ローム粒子少
3　褐色土　ロームブロック少
4　褐色土　ロームブロック多
5　褐色土　黒色ブロック・ロームブロック少

ＳＫ３
1　暗褐色土　褐色ブロック・黒色ブロック少
2　褐色土　ロームブロック多

ＳＫ４
1　暗褐色土　褐色ブロック・炭化物粒子少
2　褐色土　ロームブロック少

ＳＫ５
1　暗褐色土　褐色ブロック少
2　暗褐色土　褐色ブロック多、ロームブロック少
3　褐色土　ロームブロック少

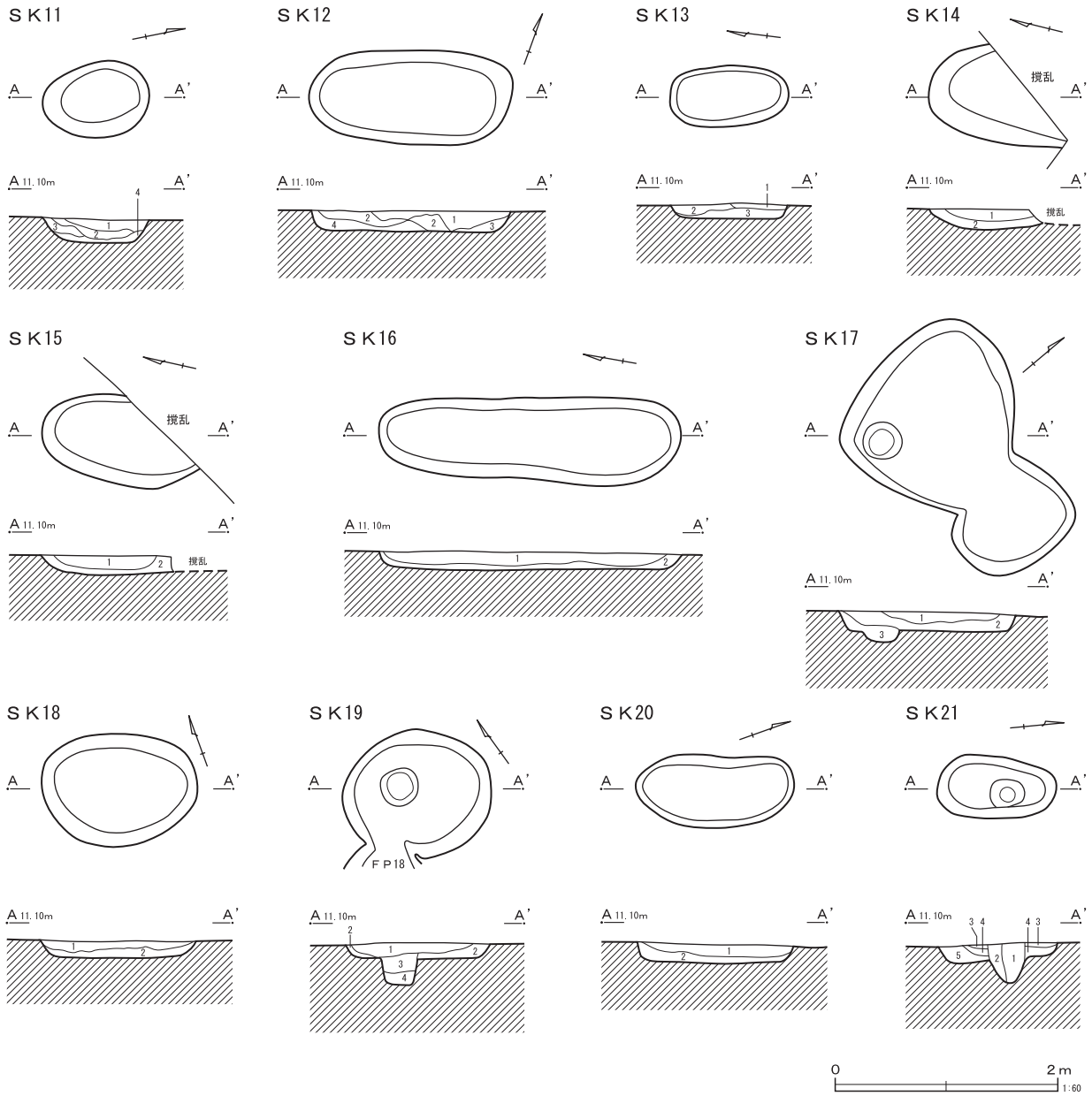
ＳＫ６
1　暗褐色土　ロームブロック・黒色ブロック少
2　褐色土　ロームブロック多

ＳＫ７
1　暗褐色土　褐色ブロック少
2　暗褐色土　褐色ブロック若干、ローム粒子少
3　暗褐色土　褐色ブロック若干、ローム粒子少
4　褐色土　ロームブロック多
5　暗褐色土　褐色ブロック多、黒色ブロック少
6　暗褐色土　褐色ブロック多、ロームブロック少
7　暗褐色土　褐色ブロック少

ＳＫ８
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少
2　暗褐色土　ローム粒子少
3　褐色土　褐色ブロック若干、ローム粒子少
4　褐色土

ＳＫ９・10
1　暗褐色土　褐色ブロック少
2　褐色土　ロームブロック少
3　褐色土　ロームブロック多
4　暗褐色土　褐色ブロック若干、ローム粒子少
5　暗褐色土　ローム粒子少
6　褐色土　ロームブロック若干

第62図　土壙（１）



SK11
1　黒褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少
2　黒褐色土　褐色ブロック・ローム粒子少
3　褐色土　褐色ブロック若干、ロームブロック・ローム粒子少
4　褐色土　ロームブロック若干

SK12
1　暗褐色土　褐色ブロック・黒色ブロック少
2　暗褐色土　褐色ブロック若干
3　褐色土　ロームブロック少
4　褐色土　ロームブロック多

SK13
1　暗褐色土　褐色ブロック若干
2　暗褐色土　褐色ブロック少
3　褐色土　ロームブロック多

SK14
1　暗褐色土　褐色ブロック・炭化物粒子少
2　褐色土　ロームブロック若干

SK15
1　暗褐色土　褐色ブロック・炭化物粒子少
2　褐色土　ロームブロック若干

SK16
1　暗褐色土　褐色ブロック若干、ロームブロック少
2　褐色土　ロームブロック多

SK17
1　暗褐色土　褐色ブロック少
2　暗褐色土　褐色ブロック若干、ロームブロック・炭化物粒子少
3　褐色土　ロームブロック多

SK18
1　暗褐色土　褐色ブロック・ローム粒子少
2　褐色土　ロームブロック若干

SK19
1　暗褐色土　ローム粒子少、炭化物粒子若干
2　褐色土　ロームブロック若干
3　褐色土　ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子少
4　褐色土　ロームブロック多

SK20
1　暗褐色土　褐色ブロック少
2　褐色土　ロームブロック多

SK21
1　黒褐色土　ローム粒子･炭化物粒子少
2　黒褐色土　褐色ブロック多
3　暗褐色土　褐色ブロック少
4　暗褐色土　褐色ブロック多、ロームブロック少
5　褐色土　ロームブロック多、褐色ブロック若干

第63図　土壙（2）

第４号土壙（第62図）

C－３グリッドに位置する。平面形は楕円である。主軸方位はN－０°－Eを指す。規模は長軸1.15m、短軸0.95m、深さ0.15mを測る。

第５号土壙（第62図）

C－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－36°－Wを指す。規模は長軸1.12m、短軸0.72m、深さ0.13mを測る。

第６号土壙（第62図）

C－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－81°－Wを指す。規模は長軸1.42m、短軸0.77m、深さ0.17mを測る。

第７号土壙（第62図）

C－３グリッドに位置する。平面形は隅丸台形である。主軸方位はN－38°－Wを指す。規模は長軸2.38m、短軸1.13m、深さ0.20mを測る。壙底に北西寄りと北東端にピットがあり、北西寄りは円形で径0.22m×0.23m壙底から深さ0.22mを測る。北東端のピットは楕円形で長軸0.43m、短軸0.25m、壙底から深さ0.10mを測る。

第８号土壙（第62図）

B・C－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－58°－Wを指す。規模は長軸1.68m、短軸0.85m、深さ0.19mを測る。

第９号土壙（第62図）

C－３グリッドに位置する。北側で第10号土壙と重複し、切られている。平面形は楕円形である。主軸方位はN－54°－Wを指す。規模は長軸2.09m、短軸0.78m、深さ0.14mを測る。壙底南西端に２基のピットがあり、南東側にピットは楕円形で、長軸0.35m、短軸0.26mで壙底からの深さ0.20mを測る。北西側のピットは長軸0.36m、短軸0.25m、深さ0.14mを測る。

第10号土壙（第62図）

B・C－３グリッドに位置する。南側で第９号土壙と重複し、切っている平面形は楕円形と推定される。主軸方位はN－25°－Eを指す。規模は長軸1.71mの範囲が確認でき、短軸0.82m、深さ0.15mを測る。

第11号土壙（第63図）

C－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－０°－Eを指す。規模は長軸0.95m、短軸0.65m、深さ0.21mを測る。

第12号土壙（第63図）

B－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－71°－Eを指す。規模は長軸1.78m、短軸0.84m、深さ0.19mを測る。

第13号土壙（第63図）

C－２グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－10°－Wを指す。規模は長軸1.04m、短軸0.55m、深さ0.14mを測る。

第14号土壙（第63図）

B－３グリッドに位置する。南東部が撹乱され、平面形は楕円形と推定される。主軸方位はN－15°－Wを指す。規模は長軸1.20m、短軸0.83mの範囲が確認でき、深さ0.18mを測る。

第15号土壙（第63・66図）

B－３グリッドに位置する。南東部が撹乱され、平面形は楕円形と推定される。主軸方位はN－６°－Wを指す。規模は長軸1.42m、短軸0.77m、深さ0.17mを測る。

遺物は第66図１～３が出土している。いずれも胎土に繊維を含む縄文早期の条痕文系土器群で、１は内外面に明瞭な条痕整形を残している。２・３は器面の荒れが著しく、詳細は不明である。

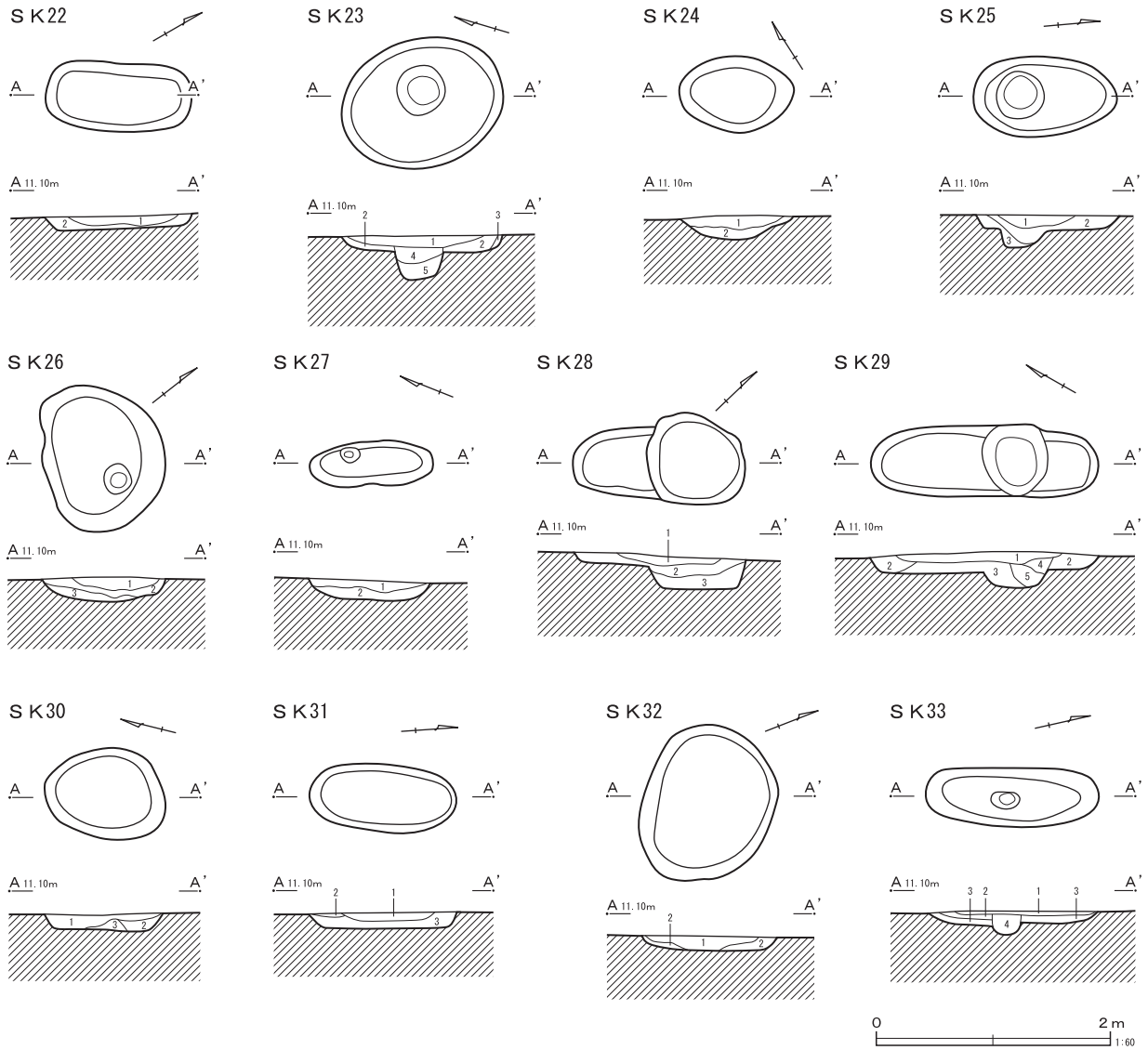
第16号土壙（第63・66図）

B－３グリッドに位置する。平面形は長楕円形である。主軸方位はN－10°－Wを指す。規模は長軸2.69m、短軸0.80m、深さ0.17mを測る。

遺物は第66図４が出土している。細片で詳細は不明であるが、繊維を含む条痕文系土器で、条痕が若干観察される。

第17号土壙（第63図）

A・B－３グリッドに位置する。平面形は瓢箪



ＳＫ22
1　暗褐色土　褐色ブロック少
2　褐色土　　ロームブロック多

ＳＫ23
1　暗褐色土　褐色ブロック若干、炭化物粒子少
2　暗褐色土　ロームブロック若干
3　褐色土　　ロームブロック多
4　黄褐色土　ロームブロック若干
5　黄褐色土　ロームブロック多

ＳＫ24
1　暗褐色土　褐色ブロック多
2　褐色土　　ロームブロック若干

ＳＫ25
1　黒褐色土　褐色ブロック若干、炭化物粒子少
2　黒褐色土　褐色ブロック多
3　褐色土　　ロームブロック多

ＳＫ26
1　黒褐色土　褐色ブロック・炭化物粒子少
2　黒褐色土　褐色ブロック多
3　褐色土　　ロームブロック若干

ＳＫ27
1　暗褐色土　褐色ブロック少
2　暗褐色土　ロームブロック若干

ＳＫ28
1　暗褐色土　黒色ブロック・褐色ブロック少
2　褐色土　　褐色ブロック多
3　褐色土　　褐色ブロック多、ロームブロック少

ＳＫ29
1　暗褐色土　褐色ブロック・炭化物粒子少
2　暗褐色土　褐色ブロック少
3　褐色土　　ロームブロック少
4　褐色土　　ローム粒子・褐色ブロック少
5　褐色土　　ローム粒子少、褐色ブロック多

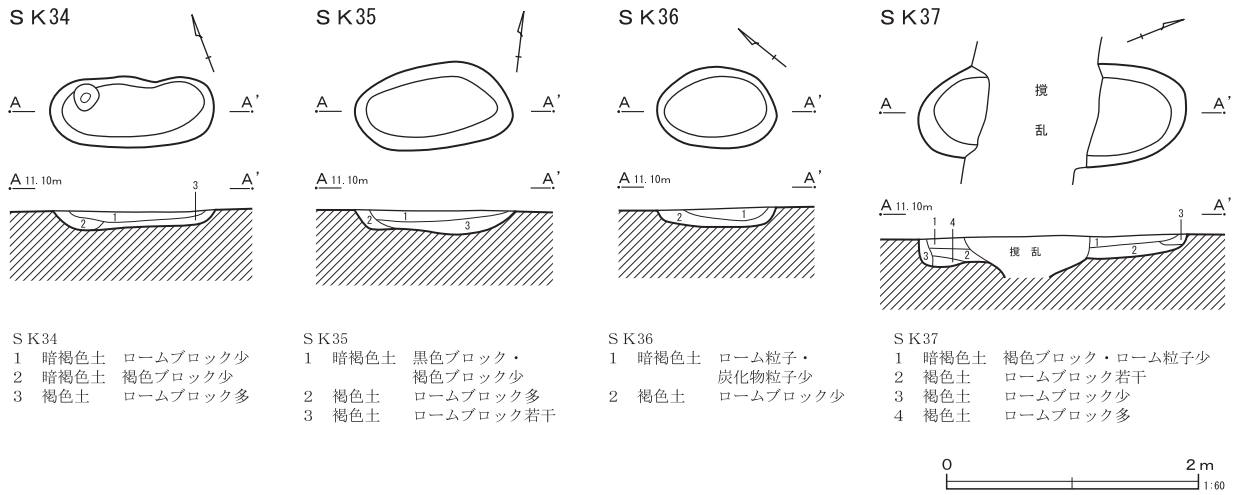
ＳＫ30
1　暗褐色土　褐色ブロック・炭化物粒子少
2　褐色土　　褐色ブロック・ローム粒子少
3　褐色土　　ロームブロック多

ＳＫ31
1　暗褐色土　褐色ブロック若干、炭化物粒子少
2　暗褐色土　褐色ブロック少
3　褐色土　　ロームブロック若干

ＳＫ32
1　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子少
2　褐色土　　ロームブロック若干

ＳＫ33
1　暗褐色土　ローム粒子少
2　暗褐色土　褐色ブロック・ロームブロック少
3　褐色土　　ロームブロック少
4　褐色土　　褐色ブロック少、ロームブロック若干

第64図　土壙（３）



第65図　土壙（４）

形である。主軸方位はN－87°－Wを指す。規模は長軸2.26m、短軸は狭い方が1.07m、広い方が1.62m、深さ0.17mを測る。広い方の壙底南にピットがあり、円形で径0.33m×0.35m、壙底からの深さ0.09mを測る。

第18号土壙（第63図）

B－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－70°－Wを指す。規模は長軸1.78m、短軸1.03m、深さ0.16mを測る。

第19号土壙（第63図）

B－３グリッドに位置する。南西で第18号炉穴と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は円形である。主軸方位はN－55°－Wを指す。規模は径1.14m×1.29m、深さ0.14mを測る。壙底にピットがあり、円形を呈し径0.33m、壙底から深さ0.23mを測る。

第20号土壙（第63図）

A・B－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－20°－Eを指す。規模は長軸1.40m、短軸0.66m、深さ0.17mを測る。

第21号土壙（第63図）

A－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－５°－Eを指す。規模は長軸1.30m、短軸0.55m、深さ0.16mを測る。壙底の東壁際にピットがあり、楕円形で長軸0.30m、短軸0.25m、深さ0.23mを測る。

第22号土壙（第64図）

A－３グリッドに位置する。平面形は隅丸方形である。主軸方位はN－34°－Eを指す。規模は長軸1.21m、短軸0.66m、深さ0.12mを測る。

第23号土壙（第64・66図）

A・B－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－34°－Wを指す。規模は長軸1.37m、短軸1.10m、深さ0.13mを測る。壙底の東壁寄りにピットがあり、円形で径0.43m、深さ0.23mを測る。

遺物は第66図５・６が出土している。５は丸頭状口縁部が開く器形の、縄文早期条痕文系土器群の口縁部破片で、胎土に繊維を少量含む。外面は口縁部で横位の、以下縦位の条痕文整形を施しており、裏面は深くまで横位整形を施している。

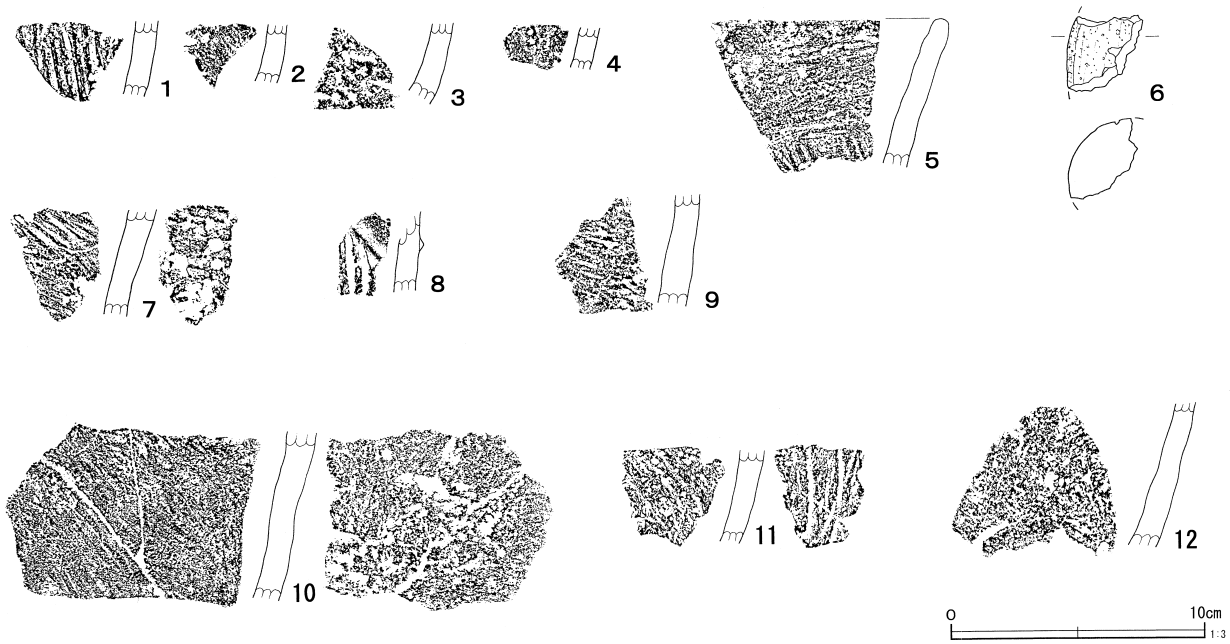
６は安山岩製の磨石の破片で、表裏面に擦痕が認められ、長さ3.0㎝、幅3.1㎝、厚さ3.2㎝、重さ27.5gを測る。

第24号土壙（第64図）

A－２・３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－59°－Wを指す。規模は長軸0.97m、短軸0.67m、深さ0.21mを測る。

第25号土壙（第64・66図）

A－２グリッドに位置する。平面形は楕円形で



第66図　土壙・溝跡出土遺物

ある。主軸方位はN－6°－Eを指す。規模は長軸1.23m、短軸0.69m、深さ0.12mを測る。壙底南寄りにピットがあり、円形で径0.40m、深さ0.24mを測る。

遺物は第66図7が出土している。早期の条痕文系土器群の胴部破片であり、内面は荒れているが、内外面に条痕整形を施している。

第26号土壙（第64図）

A－2グリッドに位置する。平面形はややゆがんだ楕円形である。主軸方位はN－60°－Wを指す。規模は長軸1.26m、短軸1.04m、深さ0.21mを測る。壙底東壁寄りにピットがあり、円形で径0.24m×0.26m、深さ0.09mを測る。

第27号土壙（第64図）

B－1グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－25°－Wを指す。規模は長軸1.05m、短軸0.39m、深さ0.16mを測る。壙底北壁際にピットがあり、円形で径0.13m×0.16m、深さ0.10mを測る。

第28号土壙（第64図）

B－2・3グリッドに位置する。平面形は楕円形である。北東側が土壙状に深くなっている。主軸方位はN－45°－Eを指す。北西側がテラス状となり、北東側が不整円形で深くなる。規模は長軸1.45m、短軸0.78m、深さは北西側が0.12m、北東側の不整円形は径0.80m×0.83m、深さ0.30mを測る。

第29号土壙（第64図）

B－2グリッドに位置する。平面形は長楕円形である。やや南寄りにピットがある。主軸方位はN－31°－Wを指す。規模は長軸1.83m、短軸0.60m、深さ0.16mを測る。ピットは不整円形で、径0.57m×0.60m、深さ0.30mを測る。

第30号土壙（第64図）

B－2グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－20°－Wを指す。規模は長軸0.99m、短軸0.79m、深さ0.14mを測る。

第31号土壙（第64・66図）

B－2グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－7°－Eを指す。規模は長軸1.25m、短軸0.58m、深さ0.13mを測る。

遺物は第66図8が出土している。8は早期条痕

文系土器群の野島式に比定されるもので、細隆起の区画内に、集合沈線文を充填施文する。胎土に繊維を含み、内面に徐近整形を施す。

第32号土壙（第64・66図）

B－２・３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－49°－Wを指す。規模は長軸1.35m、短軸1.09m、深さ0.12mを測る。

遺物は第66図９が出土している。９は縄文早期の条痕文系土器群の胴部破片で、繊維を少量含み、擦痕状の整形を施す。

第33号土壙（第64図）

B－３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－13°－Eを指す。規模は長軸1.47m、短軸0.50m、深さ0.12mを測る。壙底中央にピットがあり、楕円形で、長軸0.25m、短軸0.15m、深さ壙底から0.09mを測る。

第34号土壙（第65図）

B－２、C－２・３グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－70°－Wを指す。規模は長軸1.30m、短軸0.56m、深さ0.14mを測る。壙底の北東壁際にピットがあり、円形で径0.20m、壙底からの深さ0.17mを測る。

第35号土壙（第65図）

C－２グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－83°－Eを指す。規模は長軸1.26m、短軸0.66m、深さ0.19mを測る。

第36号土壙（第65図）

C－２グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN－39°－Wを指す。規模は長軸0.94m、短軸0.63m、深さ0.14mを測る。

第37号土壙（第65図）

A・B－２グリッドに位置する。中央やや南寄りが撹乱を受けている。平面形は楕円形である。主軸方位はN－21°－Eを指す。規模は長軸2.10m、短軸0.80m、深さ0.22mを測る。

（３）溝跡

第１号溝（第54・66図）

B－２・３グリッドに位置する。溝跡の断面形は、北側に浅いテラスがあるような段差を有する。西側は撹乱を受けており、東側は炉穴群により不明である。南側はB－３グリッド西部で途切れる。走行方位は分岐するB－２・３グリッドの境で折れ曲がっており、B－２グリッド部分がN－63°－W、B－３グリッドがN－75°－Wを指す。規模は長さ23.2m、幅21㎝～30㎝、深さ20㎝～25㎝を測る。南側の深い部分は、長さ14.8m、幅47㎝～62㎝、深さ36㎝～40㎝を測る。第66図10の縄文早期の条痕文土器の胴部破片が出土している。流れ込みと思われる。

（４）ピット

ピット１（第67図）

A－２グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径40㎝、深さ11㎝を測る。

ピット２（第67図）

A－２グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径40㎝×45㎝、深さ16㎝を測る。

ピット３（第67図）

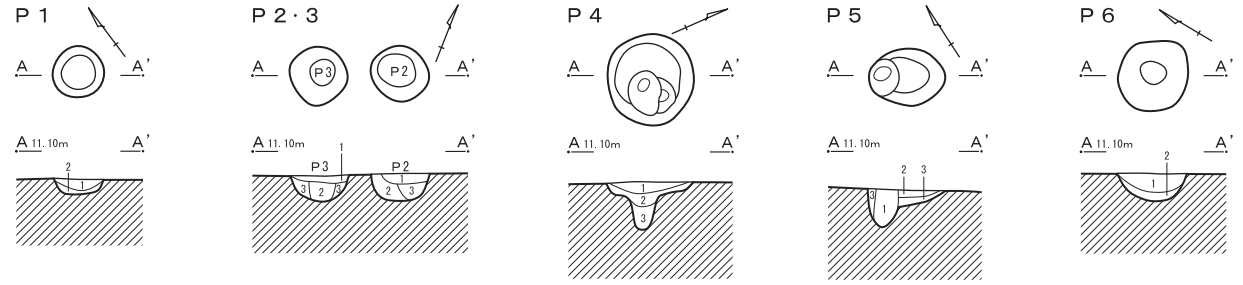
A－２グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径46㎝、深さ21㎝を測る。

ピット４（第67図）

B－２グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径66㎝×72㎝、深さ８㎝を測る。壙底の東壁際に小ピットがある。規模は35㎝×40㎝で北側がテラス状になり深さ15㎝、南側は27㎝を測る。

ピット５（第67図）

B－１グリッドに位置する。平面形は楕円形で、主軸方位はN－60°－Wを指す。規模は長軸60㎝、短軸45㎝、深さ14㎝を測る。北西壁際の小ピットは径25㎝×30㎝、深さ30㎝で、柱痕とみられる。



P 1
1　暗褐色土
　　褐色ブロック・
　　炭化物粒子少
2　暗褐色土
　　ロームブロック若干

P 2・3
1　暗褐色土
　　炭化物粒子少
2　暗褐色土
　　褐色ブロック若干
3　褐色土
　　ロームブロック若干

P 4
1　暗褐色土
　　炭化物粒子・
　　褐色ブロック少
2　褐色土
　　ロームブロック若干
3　褐色土
　　ロームブロック多

P 5
1　暗褐色土
　　褐色ブロック若干
2　褐色土
　　ローム粒子少
3　褐色土
　　ロームブロック少

P 6
1　暗褐色土
　　褐色ブロック少
2　褐色土
　　ロームブロック若干

第67図　ピット

0　2m
1:60

ピット6（第67図）

C－2グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、長軸55㎝、短軸52㎝、深さ23㎝を測る。

Ⅴ　自然科学分析

１．小林八束１遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

小林八束１遺跡は、埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字小林4740－１に所在する。測定対象試料は、第１号炭焼窯から出土した木炭３点（１～３：IAAA－80495～80497）である。試料１は第１号炭焼窯の底面から0.25m 上、その他は底面から出土した。遺跡は大宮台地東側の加須低地の水田地帯に位置する。地層は、関東造盆地運動によって沈降した黒褐色土層とローム層の上部に灰色粘土層が堆積する。遺構はこの灰色粘土層の下位で検出された。

採取位置（IAAA－80495）

（IAAA－80496）

（IAAA－80497）

２　測定の意義

炭焼窯からは時期を特定できる土器等が出土せず、炭焼窯以外から縄文時代や古墳時代の遺物が出土している。炭焼窯の木炭の年代を確定することで、その生産活動の時期を明らかにしたい。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

（２）酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が１Ｎ未満の場合、表中に AaA と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

（３）試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

（４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

（５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

（６）グラファイトを内径１mm のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4　測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH－2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

1）年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

2）^{14}C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

3）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C／^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C／^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

4）pMC（percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

5）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ=68.2%）あるいは2標準偏差（2σ=95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ransey 1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

6　測定結果

第1号炭焼窯から出土した木炭3点の14C年代は、1が1210±30yrBP（IAAA−80495)、2が1250±30yrBP（IAAA−80496）、3が1200±30yrBP（IAAA−80497）である。木炭3点は、年輪と表皮が確認され、表皮を除いた最外年輪部分を測定対象としたことから、各試料の年代は、それぞれの伐採年代に近いと判断される。

暦年較正年代（1σ）は、1が776～870AD、2が688～779AD(65.7%)・795～800AD(2.5%)、3が780～795AD（11.7%）・801～873AD（56.5%）である。2が主に奈良時代、1と3が主に奈良時代末から平安時代前期前半の年代である。各試料の炭素含有率は70%以上であり、化学処理・測定内容にも問題が無いことから、妥当な年代と考えられる。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$（‰）(AMS)	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-80495	1	遺構：第１号炭焼窯	木炭	AAA	-24.96 ± 0.62	1,210 ± 30	86.00 ± 0.30
IAAA-80496	2	遺構：第１号炭焼窯	木炭	AAA	-26.85 ± 0.79	1,250 ± 30	85.58 ± 0.32
IAAA-80497	3	遺構：第１号炭焼窯	木炭	AAA	-23.63 ± 0.74	1,200 ± 30	86.12 ± 0.32

[#2303]

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-80495	1,210 ± 30	86.01 ± 0.28	1,211 ± 28	776AD - 870AD (68.2%)	709AD - 747AD (10.6%) 766AD - 891AD (84.8%)
IAAA-80496	1,280 ± 30	85.26 ± 0.29	1,250 ± 30	688AD - 779AD (65.7%) 795AD - 800AD (2.5%)	676AD - 870AD (95.4%)
IAAA-80497	1,180 ± 30	86.36 ± 0.29	1,200 ± 29	780AD - 795AD (11.7%) 801AD - 873AD (56.5%)	713AD - 745AD (5.8%) 767AD - 895AD (88.7%) 927AD - 935AD (0.9%)

［参考値］

引用・参考文献

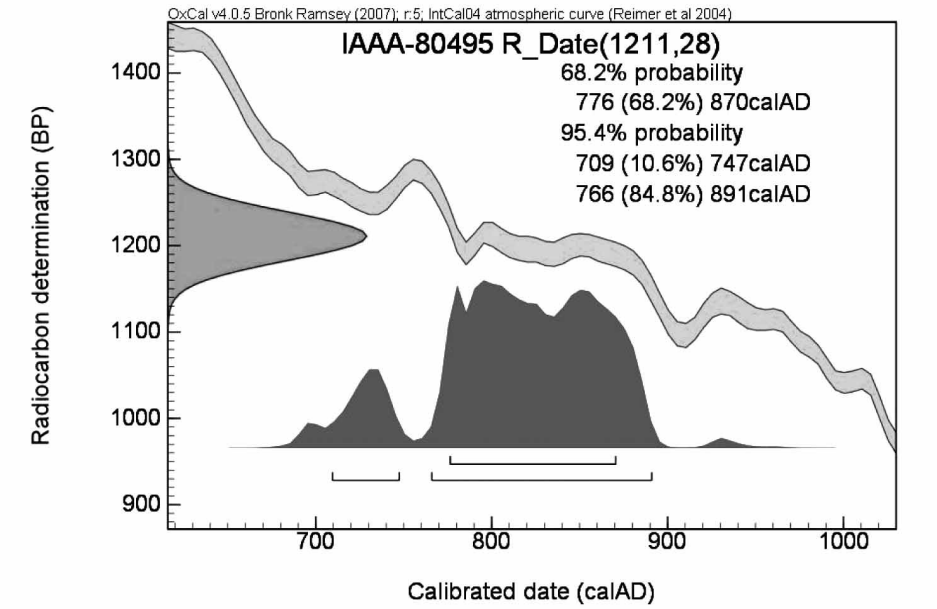
Stuiver M. and Polash H. A. 1977 Discussion : Reporting of 14 C data, *Radiocarbon* 19, 355–363

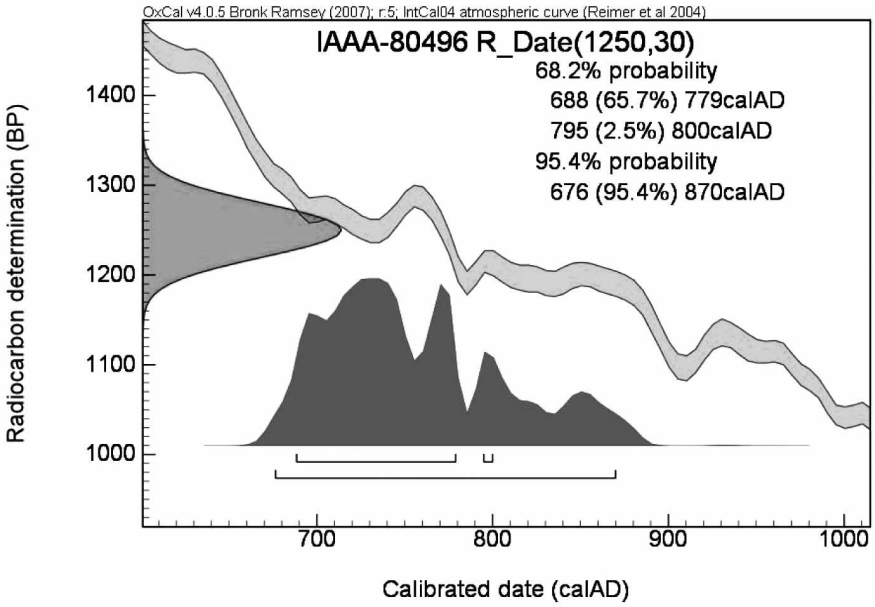
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425–430

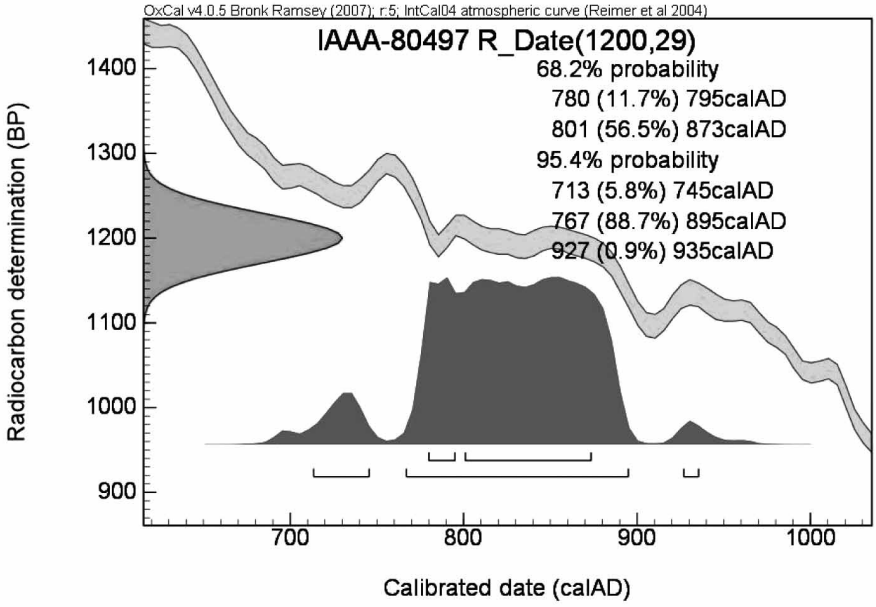
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2 A), 355–363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J.and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2 A), 381–389

Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029–1058







［参考］暦年較正年代グラフ

２．小林八束１遺跡から出土した炭化材の樹種

はじめに

小林八束１遺跡（埼玉県南埼玉郡菖蒲町所在）は、小林調節池のほとりに位置し、地形的には元荒川左岸の埋没したローム台地上に立地する。発掘調査により、縄文時代後期の竪穴住居跡、古墳時代前期の竪穴住居跡および方形周溝墓、時期不明の炭窯等が検出されている。

本報告では、炭窯における木材利用を明らかにするため、出土した炭化材の樹種同定を実施する。

１．試料

試料は、第１号炭焼窯から出土した炭化材３点（No.1～No.3）である。

２．分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称等については、島地・伊東（1982）および Wheeler 他（1998）に従う。また、各樹種の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

３．結果

炭化材は３点とも落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect.*Cerris*）ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

４．考察

今回の炭窯から出土した炭化材は、炭窯で焼成された木炭の一部や木炭焼成時の燃料材等に由来する可能性がある。同定を実施した炭化材は、全て落葉広葉樹のクヌギ節であった。日本のクヌギ節には、クヌギとアベマキの２種があるが、クヌギが関東地方の平地において一般的な樹種であるのに対し、アベマキは現在の関東地方には分布していない。このことから、今回のクヌギ節は、現在の関東地方の平地に普通にみられるクヌギの可能性が高い。クヌギは、コナラと共に関東地方の二次林を代表する樹木であるが、コナラが台地上等の乾いた環境に多く分布するのに対し、クヌギはより水分の多い土地に多く見られる傾向があり、時にエノキやムクノキと共に河畔林を構成する。本遺跡周辺では、現在でも比較的よく見られる樹種であり、当該期においても周辺の自然堤防上や後背湿地等に生育していたことが推定される。

クヌギの木材は、重硬で強度が高い材質を有しており、薪炭材としては国産材の中でも最も優良とされることから（平井,1996）、炭窯で製炭した木材は、薪炭材として優良なクヌギの木材を選択していた可能性がある。

これらの炭化材については、放射性炭素年代測定が実施されており、補正年代で1200±30BP～1250±30BP の値が得られており、奈良時代頃に構築・使用されたことが推定される。

大宮台地東部の沖積地では、伊奈町を中心に古代と考えられる炭窯が多数確認されている。このうち、大山遺跡（伊奈町）では、製鉄炉等の鉄生産に関わる遺構が検出されており、大山遺跡やそ

の周辺地域で検出されている炭窯は、大山遺跡の鉄生産で使用するための木炭を焼成・供給していた可能性が指摘されている（水口,1998,2002)。これらの古代の炭窯や製鉄炉のうち、大山遺跡、薬師堂根遺跡（伊奈町)、三番耕地遺跡（上尾市）では、出土した炭化材が全てクヌギ節に同定されており、今回の結果とも調和的である（山内,1979,1985；株式会社古環境研究所,1998；パリノ・サーヴェイ株式会社,2005a)。古代の炭窯や製鉄炉から出土した炭化材にクヌギ節が多く見られる例は、群馬県赤城山南麓地域の乙西尾引遺跡（前橋市）および柏倉芳見沢遺跡（前橋市)、今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡（前橋市・伊勢崎市）等でも報告されている（高橋・鶴原,1994；パリノ・サーヴェイ株式会社,2005b,2005c；植田,2005a,2005b；植田・松葉,2005)。特に、乙西尾引遺跡、今井三騎堂遺跡、今井見切塚遺跡では、大量の木炭について樹種同定が実施されており、そのほとんどがクヌギ節であり、クヌギ節が選択的に利用されていた可能性が指摘されている。本地域においても、検出された樹種はいずれもクヌギ節であることから、赤城山南麓と同様にクヌギ節が選択的に利用されていた可能性がある。

※）本測定は、当社協力会社・パリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

平井　信二，1996，木の大百科　解説編．朝倉書店，642p.

伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所，81－181.

伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所，66－176.

伊東　隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所，83－201.

伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所，30－166.

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所，47－216.

株式会社古環境研究所，1998，薬師堂根遺跡の自然科学分析．「薬師堂根遺跡　上尾都市計画事業伊奈特定土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ」，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第200集，埼玉県埋蔵文化財調査事業団，317－318.

水口　由紀子，1998，炭焼窯について．「薬師堂根遺跡　上尾都市計画事業伊奈特定土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ」，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第200集，埼玉県埋蔵文化財調査事業団，297.

水口　由紀子，2002，発掘された埼玉県内の炭焼窯　－古代の事例を中心にして－．研究紀要，24，埼玉県立歴史資料館，19－36.

パリノ・サーヴェイ株式会社，株式会社，2005a，炭窯出土木炭の自然科学分析．「大山遺跡　第10・11次　埼玉県立精神医療センター施設整備事業完形埋蔵文化財発掘調査報告」，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第299集，埼玉県病院局・財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団，130－132.

パリノ・サーヴェイ株式会社，2005b，柏倉芳見沢遺跡の自然科学分析．「柏倉芳見沢遺跡・柏倉落合遺跡」，群馬県前橋市教育委員会，127－133.

パリノ・サーヴェイ株式会社，2005c，今井見切塚遺跡６区１号炭窯から出土した炭化材の樹種．「多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第４集　今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡　－歴史時代編－」，財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第346集，群馬県企業局・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団，238－241.

島地　謙・伊東　隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.

高橋　敦・鶴原　明，1994，乙西尾引遺跡における製鉄燃料材について．「大胡西北部遺跡群　乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡　県営ほ場整備事業大胡西北部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集」，大胡町教育委員会，41－49.

植田　弥生，2005a，今井見切塚遺跡の炭窯から出土した炭化材樹種同定．「多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第４集　今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡　ー歴史時代編ー」，財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第346集，群馬県企業局・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団，242－260．

植田　弥生，2005b，今井三騎堂・今井見切塚遺跡の炭化材樹種同定．「多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第３集　今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡　ー縄文時代編ー　第１分冊（本文編）」，財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第350集，群馬県企業局・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,704－706．

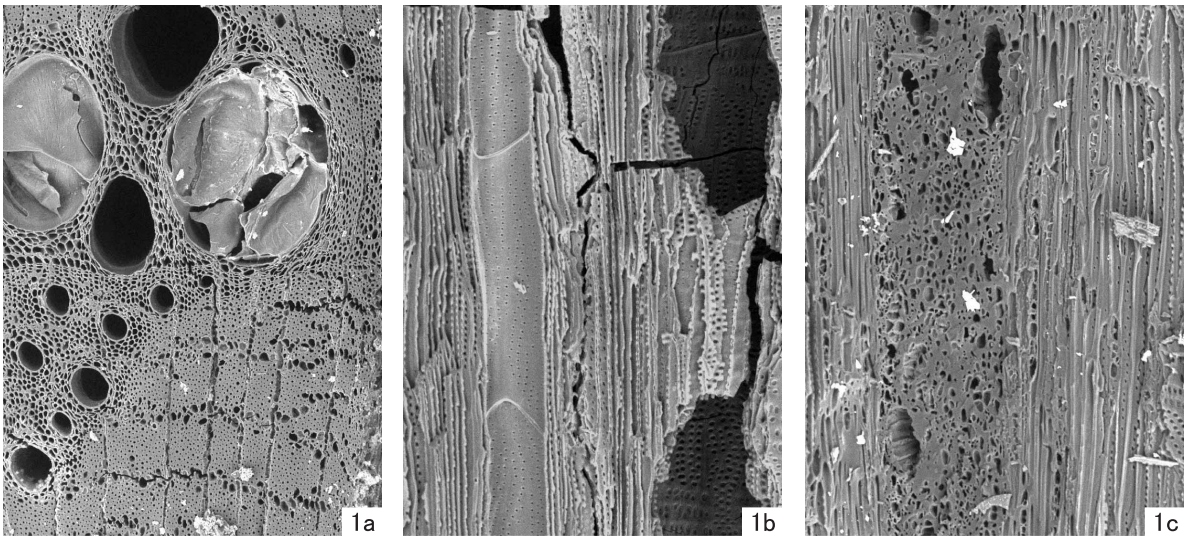
植田　弥生・松葉　礼子，2005，今井三騎堂遺跡、今井見切塚遺跡出土炭化材の樹種同定．「多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第４集　今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡　ー歴史時代編ー」，財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第346集，群馬県企業局・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,261－290．

Wheeler E. A., Bass P.and Gasson P. E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社,122p. [Wheeler E.A., Bass P.and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

山内　文，1979，木炭の分析．「大山」，埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集，埼玉県教育委員会,305－307．

山内　文，1985，三番耕地遺跡の炭化材．「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ　三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山」，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第43集，埼玉県埋蔵文化財調査事業団，51－52．

図版１　炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（第1号炭焼窯;No.1）
a:木口,b:柾目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

Ⅵ　調査のまとめ

１．小林八束１・２遺跡の時期的変遷

小林八束１遺跡と小林八束２遺跡は、菖蒲町役場の南に隣接する小林調節池の東側に位置し、小林八束１遺跡の南方約250m 離れて小林八束２遺跡が位置している。両遺跡とも関東造盆地運動による沈降で河川の沖積土に覆われたローム台地上に立地している。

小林八束２遺跡は縄文時代早期、小林八束１遺跡は縄文時代後期・古墳時代前期の遺跡である。

小林八束２遺跡は、炉穴28基が３群に分かれて検出された。３群の炉穴群とも炉穴は次々と造り替えを繰り返し、重複しほぼ同じ場所に構築されていた。炉穴からは縄文時代早期後葉の野島式期の土器が出土した。土壙の一部からも条痕文系の土器が出土しており、ほぼ同時期のものと考えられる。住居跡は検出されなかったが、多くの炉穴が造り替えをしながら継続的に使用されていることから近隣に集落があったと考えられる。

小林八束１遺跡は、縄文時代後期前葉の堀之内２式に比定される住居跡が２軒、古墳時代前期の五領式の住居跡10軒、方形周溝墓３基が検出された。

縄文時代の第４号住居跡からは、非常に珍しい筒型土偶が出土し、土偶からも堀ノ内２式に伴うものと考えられる。

古墳時代の住居跡と方形周溝墓の関係は、住居跡10軒が検出され、内６軒が方形周溝墓と重複し、住居跡は方形周溝墓に壊されているものが多く、住居跡ごとの土器の組成が不明な点もあるが、住居跡が廃絶後方形周溝墓の墓域へと変遷したと考えられる。後述するが方形周溝墓から小型器台が出土し、１軒の大型住居を除いて他の住居跡からは小型器台が出土していないことから、小型器台を持つ遺構と持たない遺構を時期差として捉えることができよう。

方形周溝墓についても、第２号方形周溝墓が第１号方形周溝墓に切られている。第２号方形周溝墓は第１・３号方形周溝墓が大型であるのに比べると小型である。方形周溝墓も小型のものから大型のものへと変遷するものと考えられる。

自然科学分析結果から、第１号炭焼窯の木炭の年代測定によると、奈良時代（西暦688年から779年)、もしくは奈良時代末から平安時代前期前半（西暦776年から873年）の年代が求められた。奈良時代頃に構築され、平安時代前期前半まで使用されていたことが判明した。この結果は年代的に断絶はあるが、縄文時代後期は集落跡、古墳時代前期は集落跡から墓域へと変遷し、奈良時代になると炭焼窯による木炭生産の場へと時期毎による土地利用の仕方が判った。

樹種同定によると、木炭はクヌギ節である。クヌギ節にはマキベとクヌギがあり、クヌギは現在関東地方の平野において一般的な樹種であるのに対し、マキベは現在の関東地方には分布していないことからクヌギの可能性が高い。また、クヌギは水分の多い土地に見られる傾向があり、当該期にも自然堤防上や後背湿地に生育していたと推定されている。大宮台地東部の沖積地の遺跡で出土した炭化材がすべてクヌギであることから、同じ植生であり同じ樹種を使って炭を生産していたことが判った。

２．縄文時代

（１）土器について

小林八束１遺跡は標高10m 前後、小林八束２遺跡は標高11m の台地上に立地しており、出土土器には時期の違いが認められた。

小林八束２遺跡では炉穴28基が見つかり、縄文時代早期条痕文期の土器群が出土した。野島式の良好な個体が出土している（第２図）。

一方、小林八束１遺跡では、縄文時代の遺構の残存度は古墳時代前期の集落、方形周溝墓の構築などによって、良好なものとはいい難かったが、縄文土器の一定量の出土があった。

早期の条痕文系土器群、中期後半の加曽利Ｅ式土器なども認められるが、縄文時代後期の土器群が多く、中でも後期前葉の堀之内２式がややまとまっていた。

縄文時代の２軒の住居跡（第４・12号住居跡）の出土土器は堀之内２式を主体とするものである。

堀之内式は各類型に整理され、その変遷・様相が検討されており、当遺跡で主体を占める堀之内１式から堀之内２式へ推移する時期についても多様な土器群を巡る考察が行われている（市立市川考古学博物館1983、石井1984・1995）。

今回の調査では朝顔形深鉢形土器の好例である第10図１が第12号住居跡より出土した。波状３単位の構成で、波頂部下から隆帯が垂下し、縦長の文様区画を基本とする。向かい合う４つの三角形文様を地文縄文上に施した文様が繰り返される。波底部下においても縦位に区画がなされるのかもしれないが、胴部下端の文様区画とともに欠損しており、詳細は不明である。口縁部に巡る沈線は文様帯区画の上端として施されたものではないことから、堀之内１式末として捉えた。

第12号住居跡における第10図１以外の朝顔形深鉢形土器は充填縄文が安定して施される堀之内２式がほとんどである（第12図３～14、17～37、40～48）。口縁部の破片を見ると、横位の隆帯を施さない古い段階の資料が多いものの、中頃以降の段階のものも含むようである。

朝顔形の深鉢形土器以外では、地文縄文上に文様を施す土器（第10図２、第11図１～７・14～22）、朝顔形以外の充填縄文手法の土器（第11図23～26、28～36）がある。沈線文の土器（第11図37～47）には堀之内１式以来の懸垂文と斜行文、称名寺式以来の文様系統、格子目文等の粗製化した土器などがある。また、縄文のみを施文する土器、櫛歯状工具による文様を施す土器などを伴う。第４号住居跡出土土器もほぼ同様な構成からなる堀之内２式が出土している。

遺構外からの出土土器も堀之内２式が主体であるが、堀之内１式も認められた。朝顔形の深鉢形土器が一定の出土を示し、単位文構成の土器が少ない点から見て、称名寺式から堀之内１式の古い部分の土器群は今回の調査では欠落する時期と考えられる。

当遺跡周辺の後期前葉の遺跡として、伊奈町戸崎前遺跡、騎西町修理山遺跡などがある。戸崎前遺跡では当遺跡で欠落している称名寺Ⅱ式から堀之内１式の古い部分の土器群がまとまって出土している。騎西町修理山遺跡では第12号住居跡や土壙から堀之内２式が出土している。沈線間に縄文を充填施文する各種の土器、地文縄文上に沈線文を施す土器、沈線文のみを施文する土器など、当遺跡の傾向と似通っている。

後期の堀之内２式以降の時期は晩期にいたるまで、遺構外から断片的に加曽利Ｂ式、安行式土器の出土が認められた。当遺跡の８km 圏内には菖蒲町地獄田遺跡、蓮田市井沼遺跡、桶川市後谷遺跡などが分布し、県内でも屈指の安行期集落が所在する地域である。土器の出土にとどまらず安行期の土偶・石剣が出土していることからみて、当遺跡の他地点に当該期の集落の存在が想定されよう。

（２）筒形土偶について

小林八束１遺跡の第４号住居跡から出土した筒形土偶（第８図）について以下にまとめる。

この土偶は、全身の高さが4.4㎝と小型で、顔面がほぼ真上を向いており、正面形および側面形はいわゆる「つづみ」のような形をしている。胴下半部の最大径が約4.2㎝、頭部と胴部を分かつ括れ部までの高さが２㎝強と、「二頭身大」に作られている。通常の筒形土偶は、三頭身大から四頭身大のものが多く、これらに比して、下半身がかなり寸詰まりに作られていることが判る。

顔面は、最大幅3.1㎝、奥行き3.7㎝の楕円形を呈し、「Ｙの字」形に貼り付けた隆帯で眉と鼻梁を表現している。両眼は表現されず、小さな１個の刺突で鼻孔を表現している。口腔は、ほぼ楕円形で漏斗状の深く鋭い刺突で表現される。

括れ部の中央正面には、乳房が表現されている。いわゆる小突起型の乳房で、両乳房は一塊の粘土で成形されているため、すこぶる近接している。

胴下半部は、括れ部から裾部に向って徐々に広がり、底面から約９㎜の高さの箇所で、径が4.4㎝と最大になり、横断面形は、ほぼ円形を呈する。ここから底面までは、緩やかなカーブで収束し、底面の径は3.6㎝になる。また、土偶底部のほぼ中央に径1.5㎝、深さ1.2㎝ほどの凹みが抉られている。この凹みは、ヘラ状のもので無造作に抉ったままのもので、内面の整形は施されていない。

土偶には文様らしき文様はまったく見られないが、頭部の右側面に、幅２㎜前後の短い沈線が３本観察できる。これらの沈線が意識的なものかどうかの判別は難しいが、沈線の幅や深さは同時期の有文の土偶の手法に近似している。

筒形土偶は、関東地方および中部地方の一部に分布しているが、埼玉県内では、これまでに、川越市の賀ヶ良遺跡や上組Ⅱ遺跡、嵐山町の大野田西遺跡、桶川市の高井東遺跡などから出土が報告されている。菖蒲町から出土した本例は、県内で最も東部から出土した例といえる。

筒形土偶は、一遺跡から複数例が出土することは珍しく、単独で出土することが多い。県内でも２点の筒形土偶を出土しているのは賀ヶ良遺跡のみである。上組Ⅱ遺跡や大野田西遺跡、高井東遺跡などは、いずれも一例のみの出土である。特に、大野田西遺跡例は、弥生時代後期の住居跡に持ち込まれたもので、伴出関係は観られない。小林八束１遺跡の土偶は、縄文時代後期の住居跡からの出土が確認されているが、やはり１点のみの出土である。このような傾向は、茨城県や群馬県、神奈川県など、他県の出土例についても観られるようである。先行するハート形土偶や後出の山形土偶などが一遺跡から複数例出土することが常態なのとは対照的といえる。

筒形土偶に共通する形態的な要素としては、以下のような点をあげることができる。

１．頸部以下の形状が円筒形、又は徳利形であること。
２．胴部の内面が空洞、又は空洞を意識した作りで、原則として底部が開口すること。
３．四肢の表現が観られないこと。
４．顔面が上方、又は斜め上方を向いて作られていること。
５．顔面は基本的に楕円形で、Ｔ字型又はＹ字型の粘土を貼り付け、眉と鼻梁を表現している。口は、円形か楕円形の刺突で表現される。
６．乳房は、小突起型で、両乳房が近接した状態で表現されることが多い。
７．後頭部にアーチ状の装飾が付けられる場合がある。
８．胴部が基本的に円筒形であるため、自立する。

さて、小林八束１遺跡の土偶であるが、一見、筒形土偶としては異例の資料のように見える。し

かし、上記の要素について詳細に観察すると、「7」を除くすべての要素に当てはまることが判る。筒形土偶の重要な決め手である「1」の要素についても、「頭部」と「頸部から底部」までのバランスが、通常の「筒形土偶」と呼称されているものと異なるだけで、頸部以下が円筒形を意識して作られていることは疑いようがない。また、「2」にあげた「胴部を空洞にする」点や、「底部が開口する」点も表現方法が稚拙な点を除けば、ヘラ先で底面を抉ることで「空洞にする」ことと「開口する」ことの二つの目的を果たそうとしていた意図が覗える。このような点を考慮すると、この土偶が「筒形土偶」を意識して作られたことは間違いないであろう。

次いで、筒形土偶の断面形態について触れたい。

大略、筒形土偶の断面形態は、「口腔が顔面部から胴部の空洞部分まで貫通するタイプ」と、「口腔が貫通しないタイプ」の二種類に分類できる。さらに、口腔が貫通するタイプは、神奈川県東正院貝塚例などのように「顔面部と頸部以下の空洞部分を別々に作り接合したもの」と、群馬県壁谷遺跡例などのように「土偶全体を一塊の粘土から作り、底部に向けて開口した胴部の空洞部まで、口腔を貫通させたもの」が見られる。口腔が貫通しないタイプの代表例は、埼玉県嵐山町大野田西遺跡出土の土偶で、一塊の粘土から作られた土偶の口腔は、胴部の空洞から逸れた位置に深く鋭い刺突で表現される。

次に、底部の開口部は、「ラッパ状に外反するもの」(埼玉県大野田西遺跡例、群馬県壁谷遺跡例)、「自然に開口するもの」(神奈川県三ツ沢貝塚例)、「底面が内弯して開口するもの」(茨城県三反田遺跡例)、「細い棒状の空洞部が底部まで続くもの」(埼玉県上組Ⅱ遺跡例)、「一度底部を閉じた後に中央を穿孔しているもの」(神奈川県東正院遺跡例、長野県天神反遺跡例) など、これまでに報告されている例をもとに5種類に分類することができる。

以上の分類に基づけば、当遺跡の土偶は口腔が貫通せず、深く鋭い刺突が施されており、埼玉県嵐山町の大野田西遺跡出土例に次いで、このタイプの二例目になる。また、頸部以下が極端に短く(二頭身)、空洞部自体が形骸化し、径1.5㎝、深さ1.2㎝の底面から抉られた穴が、そのまま底部の開口部を兼ねるような形態は、棒状の空洞部が底部まで続く川越市上組Ⅱ遺跡例に近いと考えられる。

ここまで筒形土偶の外形及び断面の形態的な特徴をあげ、当遺跡の土偶との比較を試みてきたが、次に文様表現について触れておきたい。

筒形土偶の文様表現は、大略、「有文と無文」に分けられる。さらに有文のものは、「縦列の円形刺突が施されるもの」と、「沈線で文様が施されるもの」、「縦列の円形刺突と沈線が施されるもの」の三類に分類できる。「有文」で、縦列の円形刺突が施される例としては、賀ヶ良遺跡の1点や上組Ⅱ遺跡、栃木県後藤遺跡などの土偶をあげることができる。沈線で文様が施される例としては、群馬県壁谷遺跡、神奈川県三ツ沢遺跡などの土偶があげられる。縦列の円形刺突と沈線が施されるものとしては、神奈川県稲荷山貝塚例や東正院遺跡例などがあげられる。「無文」の例は、現在のところ、大野田西遺跡例などが知られている。小林八束1遺跡の土偶もこの「無文」の例に分類できる。

以上、小林八束1遺跡の土偶は、二頭身大であることを除けば「筒形土偶」としての条件を十分に満たしており、縄文時代後期堀之内2式期の筒形土偶と考えて差し支えない。4号住居跡出土土器の主体が堀之内2式であることも、この土偶が同時期の所産であることを裏付けている。

３．古墳時代

（１）古墳時代初頭の土器群の分類

小林八束１遺跡は、古墳時代前期の住居跡10軒と方形周溝墓３基が検出されている。遺構の切り合い関係から、周溝墓と重複する住居跡はいずれも周溝墓に切られていることから、住居跡より後に方形周溝墓が構築されていることが確認されている。住居跡はほぼ同じ軸方向で一辺３～４ｍであるが、第２号住居跡だけが一辺５ｍを超えるものであった。周溝墓でも大型の第１号方形周溝墓が第２号方形周溝墓を切っていることから、第２号方形周溝墓、第１号方形周溝墓の順に構築されている。本遺跡は集落から方形周溝墓の墓域へと変遷している。

本遺跡出土の土器分類と位置づけについては、住居跡出土遺物は後に構築された方形周溝墓により、住居跡と先後関係が明確なであることから土器変遷を追えよう。しかしながら、方形周溝墓に壊されている住居跡は、住居跡ごとの土器組成を現しているかは不分明である。

＜壺形土器＞

１．複合口縁壺

１Aa 類：複合部も含めて全体的に外反する口縁部を持つ壺である。肩部に縄文が施文されるもの（SJ11－１）である。

１Ab 類：複合部も含めて内彎気味の口縁部を持つ壺である。複合口縁部に縄文が施されるもの（SJ６－２）である。

１B 類：直立気味に立ち上がり複合口縁部で外反する壺である（SJ５－２）。

１C 類：大きく「く」の字状にほぼ直線的に開く複合口縁を持つ小型の壺である。胴部下半に最大径を持つもの（SJ２－１）である。

２．単純口縁壺

２Aa 類：外反気味に開く口縁部をもつ壺である。球胴形の胴部を持つ（SR３－１）。

２Ab 類：口縁部は不明であるが体部下半に最大径を持つ壺（SJ11－２）である。

２Ba 類：直線的に立ち上がる口縁部をもつ壺である。ヘラミガキが施される（SJ２－２、SR２－１）

２Bb 類：外反気味に立ち上がる口縁部を持つ中型の壺である。球胴系の胴部を持つもの（SJ10－１）である。

２Ca 類：口縁部は「く」の字状に開く小型の壺である（SR１－４）。

２Cb 類：扁平な球胴形の壺である。底部は丸状をしていないもの（SR１－５）である。

３．短頸壺

中型の短頸壺で直線的に外傾する短い単純口縁のもの（SJ２－６）である。

＜甕形土器＞

１．中型の甕

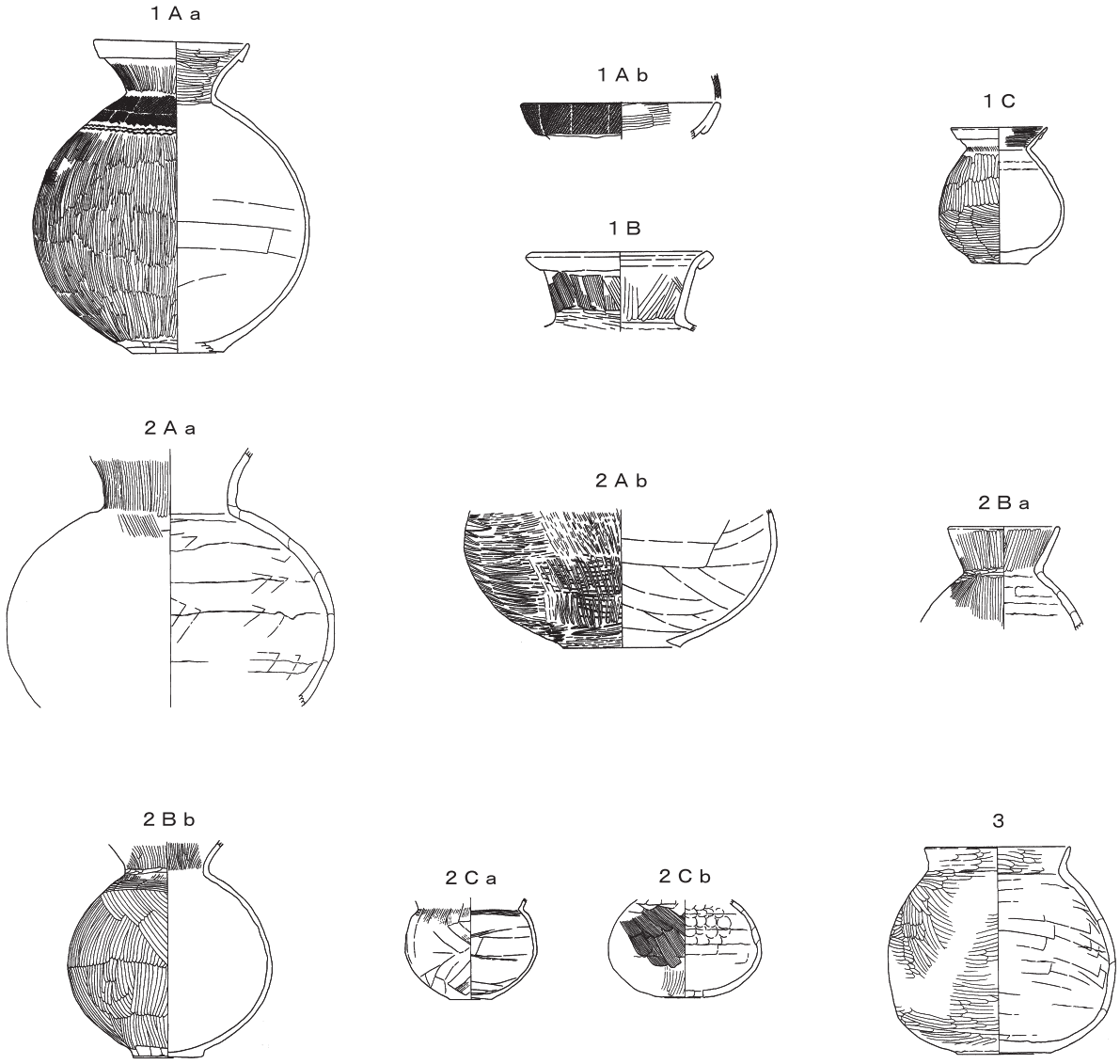
１A 類：口縁部が長く延び粘土帯巻上痕を２段以上残す甕である。口縁部には外反するもの(SJ６－１）である。球胴形を呈し、脚台部はしっかりしたものである。

１B Ⅰ類：「く」の字状口縁をもつ甕である。以下、口縁部・体部の形態で１B Ⅰ類～１B Ⅲ類に細分した。

１B Ⅰ類は、口縁部の「く」の字が緩やかで体部の上位に最大径を持つ甕（SJ１－５）である。１B Ⅱ類は、口縁部「く」の字が強く屈曲し、僅かに長胴化し、胴部中央に最大径を持ち、脚台部は小型化する甕（SJ10－２・３）で、１B Ⅲ類は、口縁部「く」の字が強く屈曲し、胴部中央に最大径を持ち、平底のもの（SJ１－３、SJ11－６）も含まれる。

口縁部に粘土帯巻上痕を２段以上残す甕は、大宮台地では東半の芝川、綾瀬川、元荒川流域の遺

壺形土器



第68図　壺形土器の分類

跡に類例が多くみられる。

1C類：「く」の字状口縁を持つ甕である。口縁部に刻み目を施す甕で、本遺跡では類例が少ない（SJ２－11、SR１－９）。

２．Ｓ字状口縁台付甕

口縁部がＳ字状に屈曲し、胴部上位に最大径を持つ甕（SJ11－４）で、本遺跡では１点のみである。

３．小型の甕

「く」の字状口縁の甕である（SR２－２・６）。

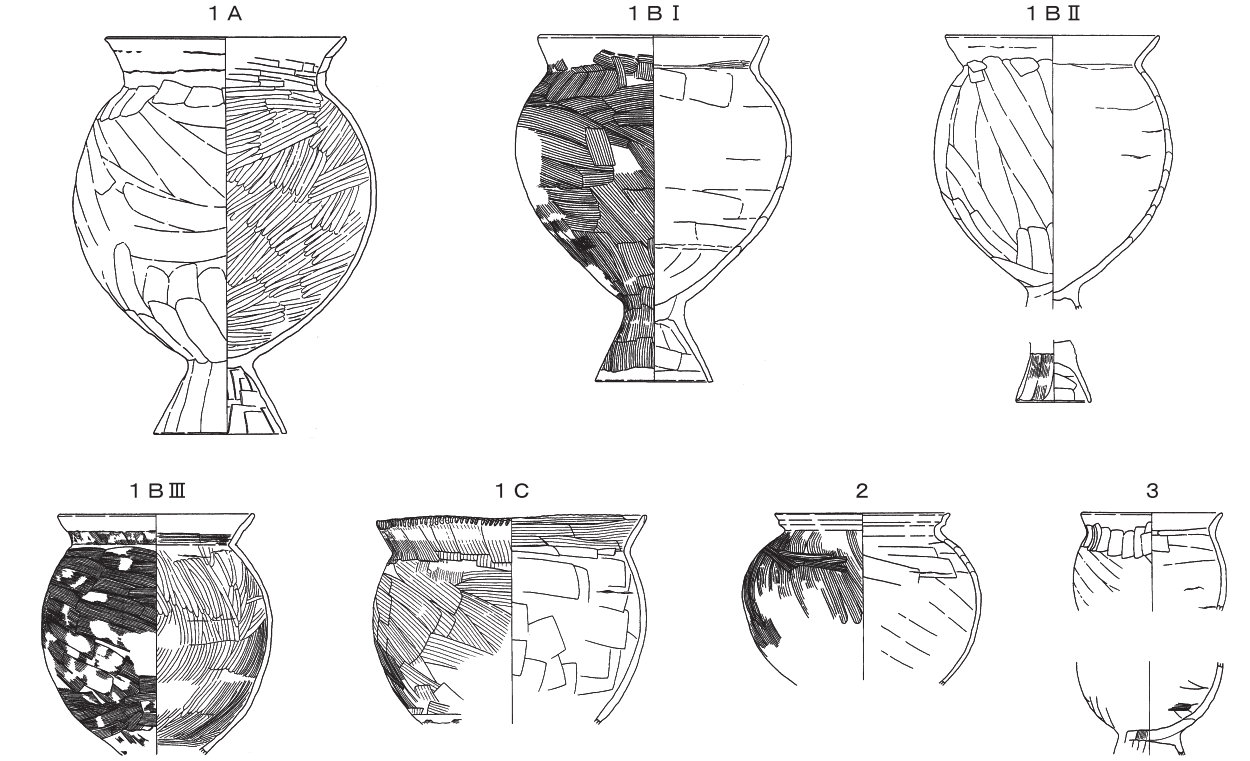
＜高坏形土器＞

１．高坏

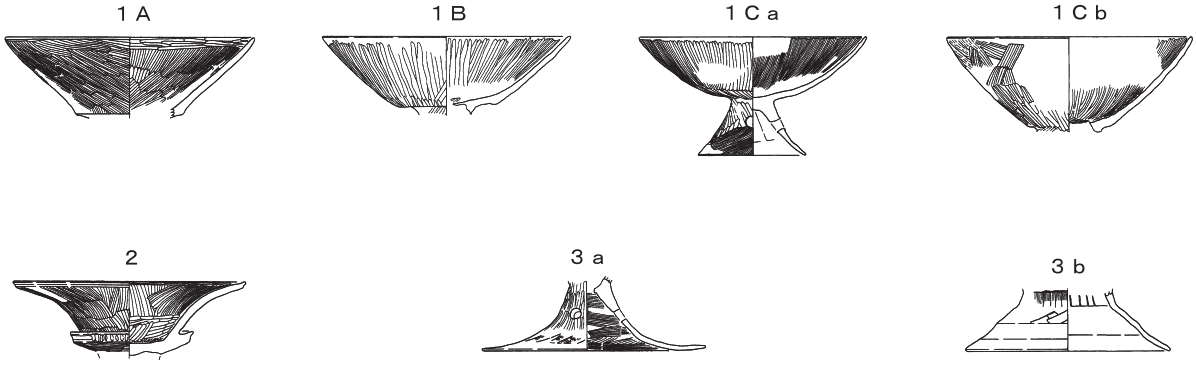
1A類：浅目の坏で坏部に明瞭な段をもち体部は直線的に開く（SJ２－７）。

1B類：浅めの坏で坏部下端に稜をもち、内湾

甕形土器



高坏形土器



第69図　甕形土器・高坏形土器の分類

気味に開く（SJ10－７）。

1Ca 類：浅い坏部で、内湾して開く、脚部は低く小型である（SJ10－６）。

1Cb 類：深い坏部で内彎気味に開き、坏部に段をもたない高坏（グリッド－５）。

２．装飾高坏

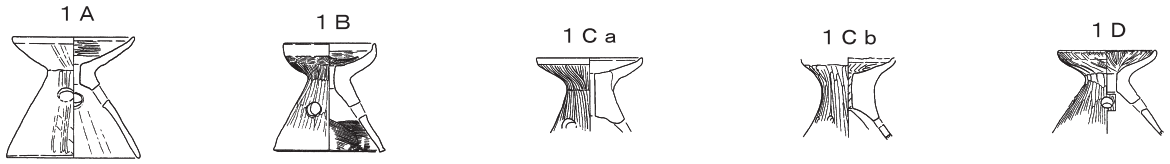
坏部下端に逆刺状の部分を有し、坏部は外反して開く（SJ10－５）。

３．脚部

3a 類：脚部が大きく開くもの（SJ10－８、SR１－19・20、グリッド－７）。

3b 類：脚部の途中で屈曲し開くもの（SR１－18・21）。

器台形土器



第70図　器台形土器の分類

＜器台形土器＞

１．小型器台

１Ａ類：漏斗状に開いた器受部をもち、台部が直線的に開く（SJ２－14）。

１Ｂ類：内彎して開き、器受け部先端が直立するもの（SR１－23）。

１Ca類：内湾気味に開く、浅い皿状の器受け部をもつもの（SR２－12）。

１Cb類：ａ類と同形態であるが、上下で貫通する穴が非常に細い（SR２－11）。

１Ｄ類：内湾気味に立ち上がり、器受け端部が緩やかに立ち上がるもの（グリッド－８）。

（２）古墳時代土器の位置付け

古墳時代初期の土器に関しては、在地固有の土器変化及び外来系土器の点的波及の段階から①小型器台を含む外来系土器群の波及・定着、②定型的な小型丸底壺・小型丸底鉢の参入、③柱状脚部を持つ高坏の参入と畿内的土器様式への収束、という共通した土器変化の大画期をもつことが確認された（書上1994）。

小林八束１遺跡では土器変化の画期としてあげられたことに関し、①については小型器台が方形周溝墓と一部の住居跡に見られること。②では小型丸底壺・鉢が検出されていないこと。③では「無透孔屈折脚高坏」などと呼ばれる高坏の参入があるという状況である。他には、Ｓ字状口縁台付甕などの東海西部（伊勢湾地域）からの影響下に成立し在地化したものがみられる。

上記の画期に基づく段階区分を設定し、①の画期を第１段階、②の画期を第２段階、③の画期を第３段階とした。

複合口縁壺で、肩部や口縁部に縄文が施される１Ａ類の壺は第６・11号住居跡から出土し、第11号住居跡の１Aa類は肩部に縄文を施された球胴系の壺のほかに、２Ab類の壺、２類のＳ字状口縁台付甕を伴っている。壺は、鎌倉公園遺跡第21号住居跡から同様の壺が出土しており、第１段階中期と捉えることができる。Ｓ字状口縁台付甕は、大宮台地周辺のさいたま市岩槻区上野遺跡第４号住居跡から出土しており、一般的には第２段階以降みられるようになる。

単純口縁壺の２Ba類は第２号住居跡・第２号方形周溝墓から出土し、口縁部が長く直線的に開くもので、ともに小型器台を伴う。上尾市三番耕地遺跡第１号住居跡で類似した壺が出土しており、三番耕地遺跡第５号住からは小型器台が出土し、両住居跡とも第１段階後期と捉えることができる。

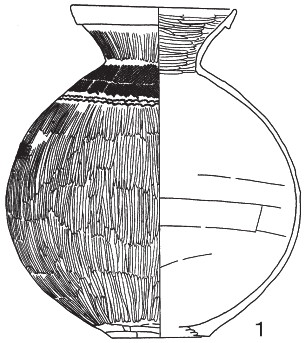
１Ａ類の甕は第２号住居跡のもので、口縁部に粘土巻上げ痕を残し、他類の「く」の字状口縁とは異なり口縁部が外反して長めであり、脚台部も他類と比較すると大型で直線的に開いている。

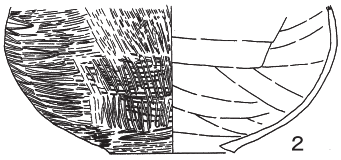
口縁部に粘土巻上痕を残すものは当遺跡でも１Ａ類以外でも１Ｂ類でみられ、大宮台地東半の元荒川・綾瀬川・芝川流域で類例が多くみられるものである。

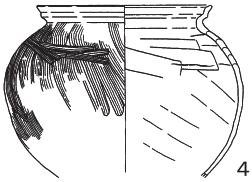
１Ｂ Ⅰ類は、第６号住居跡のもので１Ａ類より小型化し、口縁部も普通の長さになる。

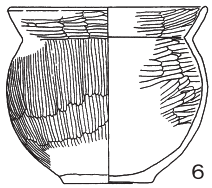
１Ｂ Ⅱ・Ⅲ類の台付甕は、口縁部「く」の字が強く屈曲し、小さめの脚台部をもつ。

ＳＪ11

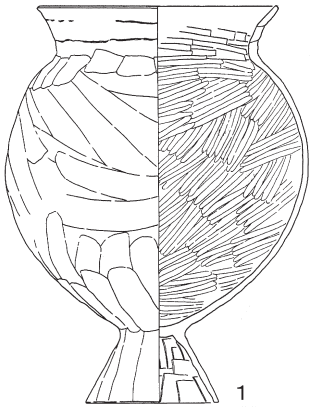


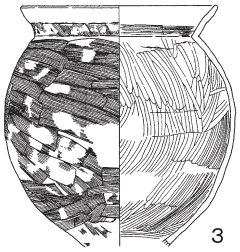


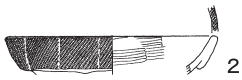




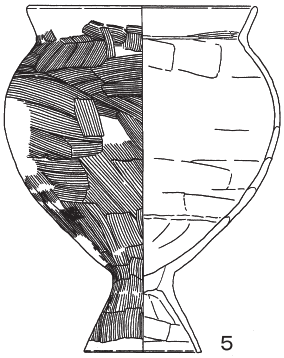
ＳＪ６

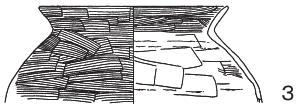


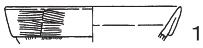




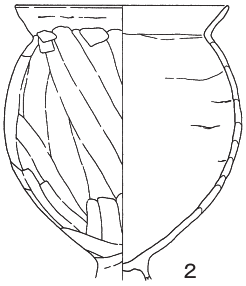
ＳＪ１

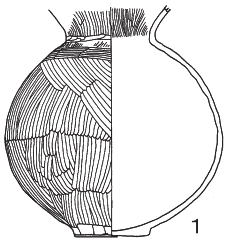


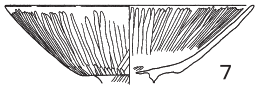




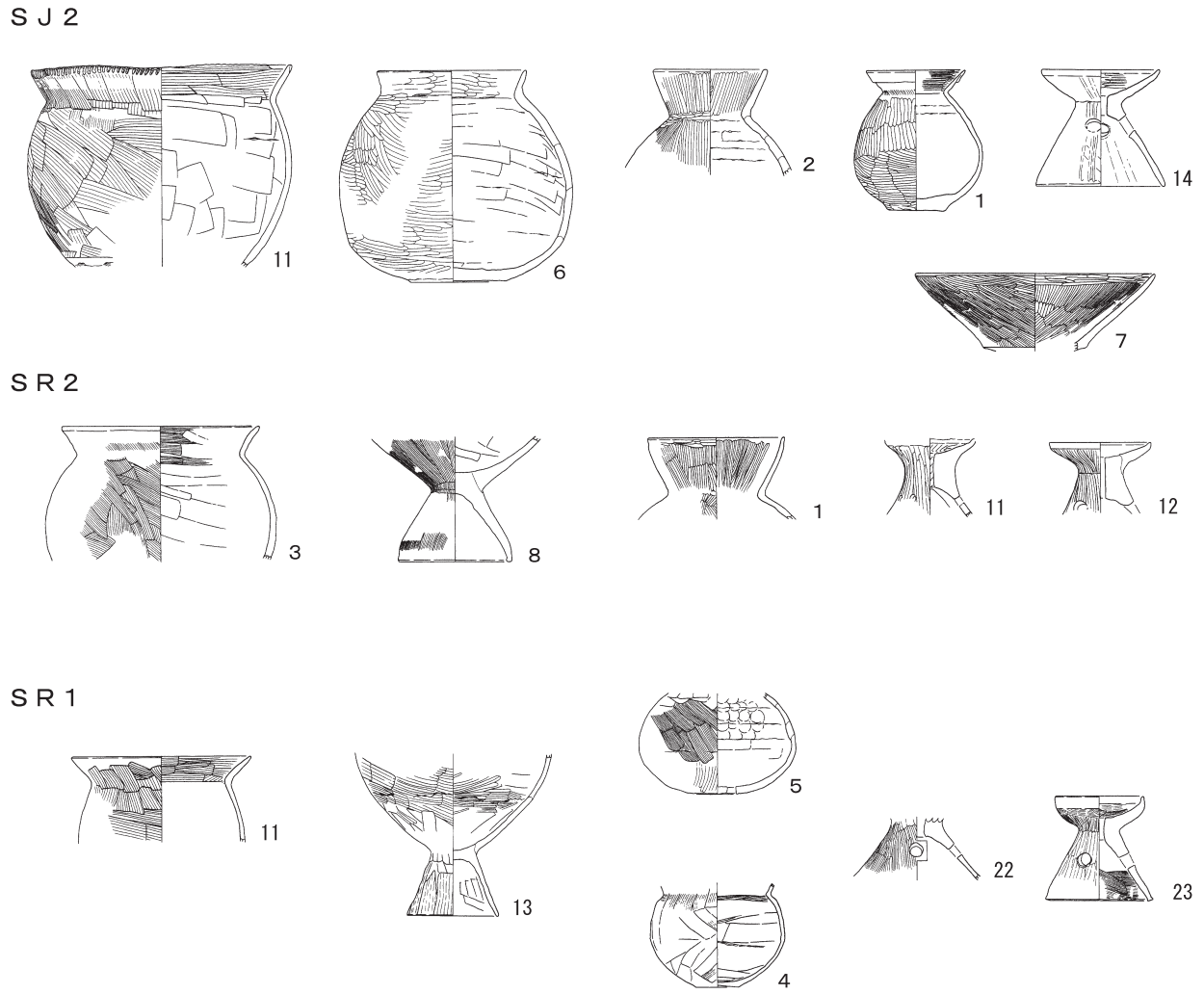
ＳＪ10







第71図　小林八束１遺跡出土土器（１）



第72図　小林八束１遺跡出土土器（２）

小型器台の波及と定着については、上尾市三番耕地遺跡第５号住では器台が定着した段階で１Ａ類がみられるが、器受け部に比し台裾部が大きく外反気味に開くが、当遺跡出土の１Ａ類は直線的に開くものであるが、第１段階後期と考えられる。

菖蒲町九宮２遺跡第２・４号住居跡で１Ca 類・１Ｂ類を伴う。九宮遺跡の位置付け（福田2008）は久台・ささら古段階の後に九宮、久台・ささら新段階とともに戸崎前２期（橋本1999）に位置付けられるとし、第２段階に入るものと考えられる。

第１号方形周溝墓と第２号方形周溝墓の先後関係は、第２号方形周溝墓が第１号方形周溝墓の周溝覆土の土層から明らかに切られていることから第２号方形周溝墓より第１号方形周溝墓が新しいことは確認できている。

小型丸底壺・鉢の出現によって画期とされているが大宮台地では３段階で見られるものの、埋没ローム台地の遺跡周辺ではみられない。地域性と当遺跡が第３段階まで及んでいないと考えられる。

第２号住居跡の大型の高坏は１Ａ類で坏部下端に明瞭な段をもつ高坏で稲荷台第53号住居跡・第58号住居跡でも出土しており、類似点がみられる。第１段階中期ないし後期と考えられる。

引用・参考文献

石井　寛　1984　「堀之内２式土器の研究（予察）」『調査研究集録』第５冊　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

石井　寛　1995　「原出口遺跡20号住居址出土土器群をめぐって」『川和向原遺跡・原出口遺跡』（財）横浜市ふるさと歴史財団

石川裕子　1982　「埼玉県本郷貝塚の土偶」　『古代』72号　早稲田大学考古学会

石坂俊郎　2000　『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第239集

市川　修　1988　「高井東遺跡の異形土器と土偶」　『埼玉県立博物館紀要』15

植木　弘　1990　「土偶の形式と系統について～東日本の後期前半における三形式の土偶をめぐって～」『埼玉考古』27号

上野修一　1999　「遺物研究　土偶（後期土偶）」『縄文時代文化研究の100年』縄文時代10号　縄文時代文化研究会

江坂輝彌　1960　『土偶』　校倉書房

小倉　均　1983　『北宿遺跡発掘調査報告書』　浦和市遺跡調査会報告書　第26集

小野美代子　1984　『土偶の知識』　東京美術社

小野美代子　2007　「縄文土偶と祭祀」『原始・古代日本の祭祀』　同成社

書上元博　1994　『稲荷台遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第139集

金子一成　1986　『上野遺跡』岩槻市教育委員会

黒坂禎二　1989　「土・石製品」『上組Ⅱ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集

市立市川考古学博物館　1983『シンポジウム堀之内式土器の記録』

鈴木仁子　1985　『三番耕地・十八番耕地。十二番耕地。神山』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第43集

鈴木保彦　1990　「筒形土偶」『特集―縄文土偶の世界』　季刊考古学30号　雄山閣

『土偶とその情報』研究会　1995　『関東地方後期の土偶―山形土偶の終焉まで―』土偶シンポジウム３　栃木大会資料集

田代　治他　1985　『宮ヶ谷塔遺跡群発掘調査報告書』　大宮市文化財報告書　第18集

谷井　彪　1979　『大山』埼玉県遺跡発掘調査報告書　第23集

橋本　勉　1999　『戸崎前Ⅱ／薬師道根Ⅱ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第218集

浜野美代子　1994　「土偶」『大野田西遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集

福田　聖　2007　「Ⅴ　まとめ」『久台遺跡Ⅲ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第339集

福田　聖　2008　「Ⅴ　調査のまとめ」『九宮１／九宮２』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第343集

藤原高志他　1983　『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第24集

増田逸朗　1971　『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告』　埼玉県遺跡調査報告　第８集

山形洋一　1984　『鎌倉公園遺跡』　大宮四夷遺跡調査会報告　第９集

　　1988　『南中丸下高井遺跡』　大宮市遺跡調査会報告　第23集

横川好富・塩野博　1972　『加倉・西原・馬込・平林寺』　埼玉県遺跡調査会報告　第14集

写 真 図 版

１　調査区全景（南西より）

２　調査区全景（北東より）

３　第１号住居跡

図版２

１　第２号住居跡

２　第２号住居跡
遺物出土状況（１）

３　第２号住居跡
遺物出土状況（２）

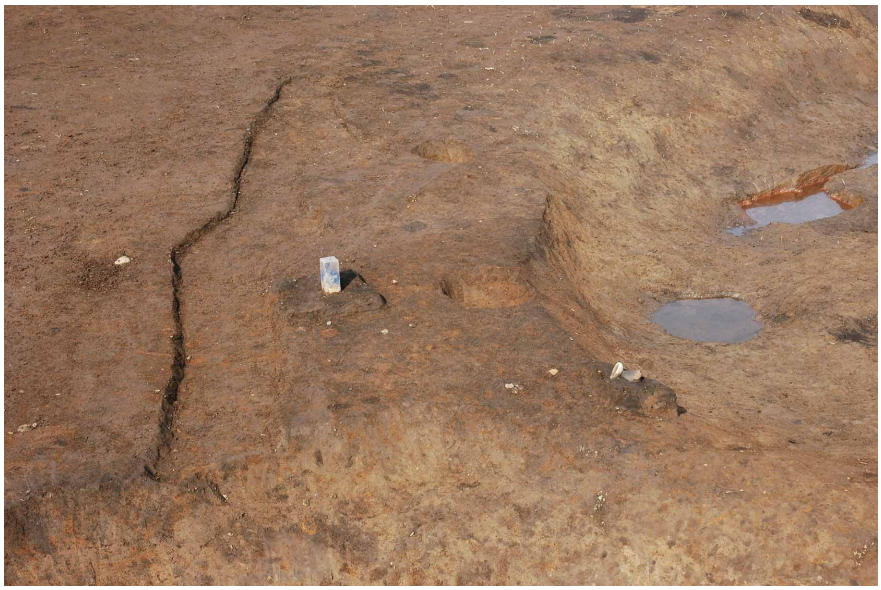
１　第２号住居跡
　　遺物出土状況（３）

２　第３･４号住居跡

３　第５号住居跡

図版４

１　第６号住居跡



２　第９号住居跡

３　第10号住居跡

１　第10号住居跡遺物出土状況

２　第11号住居跡

３　第12号住居跡

図版６

１　第１･２号方形周溝墓

２　第１号方形周溝墓

３　第１号方形周溝墓
遺物出土状況

１　第２号方形周溝墓

２　第３号方形周溝墓

３　第１号炭焼窯

図版８

１　第１号炭焼窯遺物出土状況

２　第１号炭焼窯土偶
出土状況

３　第４号住居跡　正面
（第８図）

１　第４号住居跡　側面（第８図）

２　同左　底面

３　第12号住居跡（第10図２）

４　第12号住居跡（第10図３）

５　第１号炭焼窯　表（第50図1）

６　同左　裏

図版10

1（第7図－２）
2（第7図－３）
3（第7図－５）
4（第7図－７）
5（第7図－12）
6（第7図－13）
7（第7図－17）
8（第7図－22）
9（第7図－23）
10（第7図－24）
11（第7図－27）

第４号住居跡

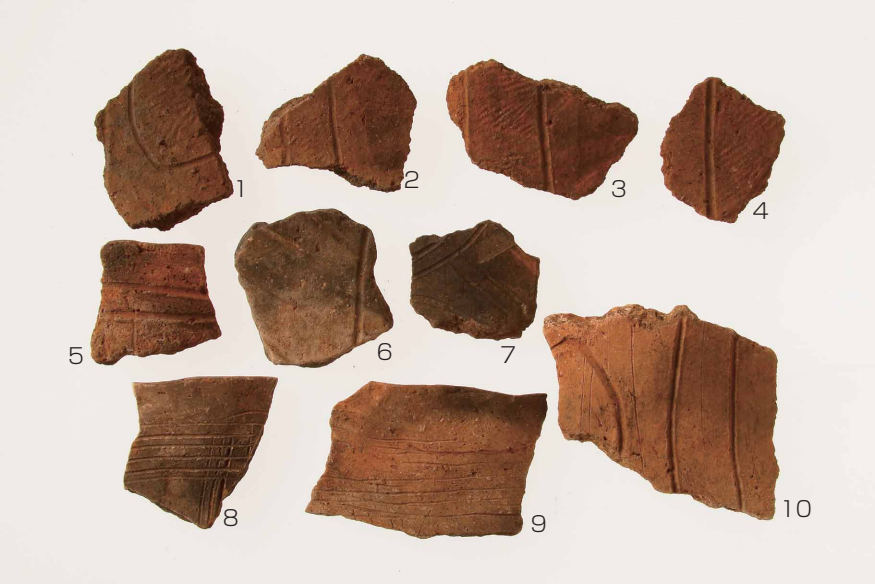
1（第7図－28）
2（第7図－29）
3（第7図－30）
4（第7図－32）
5（第7図－33）
6（第7図－35）
7（第7図－36）
8（第7図－37）
9（第7図－38）
10（第7図－41）
11（第7図－43）
12（第7図－45）
13（第7図－47）

第４号住居跡

第12号住居跡（第10図１）

１（第11図－２）
２（第11図－７）
３（第11図－８）
４（第11図－１）
５（第11図－13）
６（第11図－14）
７（第11図－10）
８（第11図－21）
９（第11図－23）

第12号住居跡



１（第11図－28）
２（第11図－30）
３（第11図－34）
４（第11図－35）
５（第11図－37）
６（第11図－38）
７（第11図－40）
８（第11図－50）
９（第11図－51）
10（第11図－41）

第12号住居跡

１（第12図－１）
２（第12図－６）
３（第12図－７）
４（第12図－16）
５（第12図－12）
６（第12図－17）

第12号住居跡

図版12

1（第12図－23）
2（第12図－21）
3（第12図－27）
4（第12図－36）
5（第13図－５）
6（第12図－35）
7（第13図－３）
8（第13図－７）
9（第13図－10）
10（第13図－11）

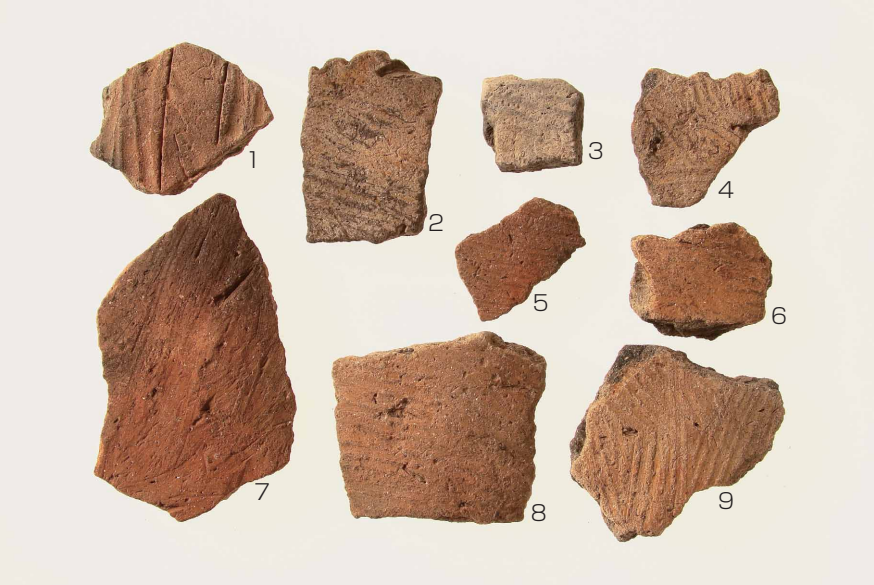
第12号住居跡

1（第15図－４）
2（第15図－９）
3（第15図－11）
4（第15図－13）
5（第15図－32）
6（第15図－44）
7（第15図－49）
8（第15図－51）
9（第15図－57）

土壙（１）

1（第16図－８）
2（第16図－15）
3（第16図－17）
4（第16図－19）
5（第16図－20）
6（第16図－30）
7（第16図－33）
8（第16図－43）

土壙（２）



１（第17図－１）
２（第17図－２）
３（第17図－３）
４（第17図－４）
５（第17図－７）
６（第17図－９）
７（第17図－５）
８（第17図－12）
９（第17図－13）

グリッド（１）

１（第17図－27）
２（第17図－31）
３（第17図－36）
４（第17図－37）
５（第17図－38）

グリッド（１）

１（第18図－１）
２（第18図－４）
３（第18図－６）
４（第18図－８）
５（第18図－９）
６（第18図－11）
７（第18図－13）
８（第18図－15）
９（第18図－16）
10（第18図－18）
11（第18図－24）

グリッド（２）

図版14

1（第18図－31）
2（第18図－29）
3（第18図－32）
4（第18図－30）
5（第18図－42）
6（第18図－38）
7（第18図－44）

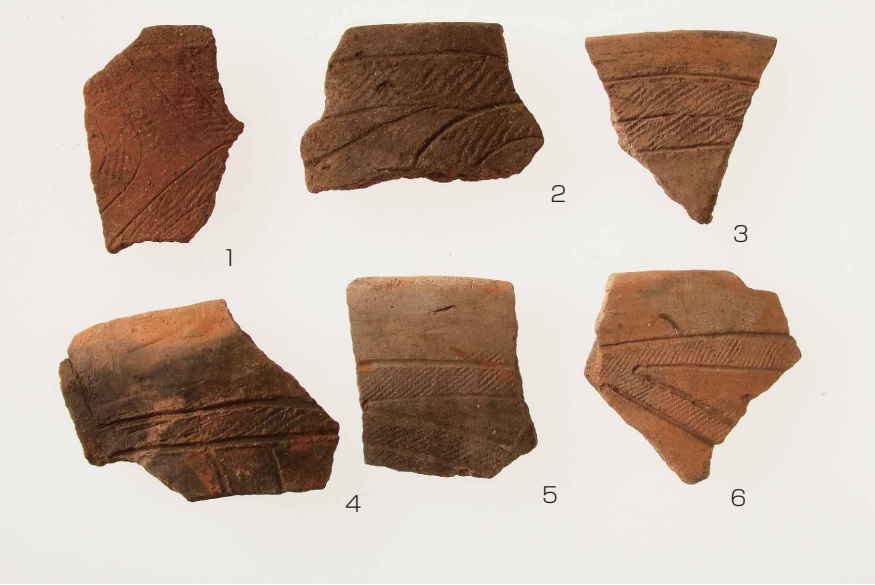
グリッド（2）

1（第19図－２）
2（第19図－１）
3（第19図－３）
4（第19図－４）
5（第19図－７）
6（第19図－14）
7（第19図－18）
8（第19図－20）
9（第19図－24）
10（第19図－21）

グリッド（3）

1（第19図－25）
2（第19図－29）
3（第19図－30）
4（第19図－35）
5（第19図－37）
6（第19図－39）
7（第19図－40）
8（第19図－47）
9（第19図－49）
10（第19図－51）

グリッド（3）



１（第20図－２）
２（第20図－５）
３（第20図－10）
４（第20図－22）
５（第20図－24）
６（第20図－30）

グリッド（４）

１（第20図－34）
２（第20図－37）
３（第20図－38）
４（第20図－39）
５（第20図－40）
６（第20図－41）
７（第20図－43）
８（第20図－45）
９（第20図－46）
10（第20図－48）
11（第20図－51）

グリッド（４）

１（第21図－１）
２（第21図－３）
３（第21図－７）
４（第21図－８）
５（第21図－９）
６（第21図－18）

グリッド（５）

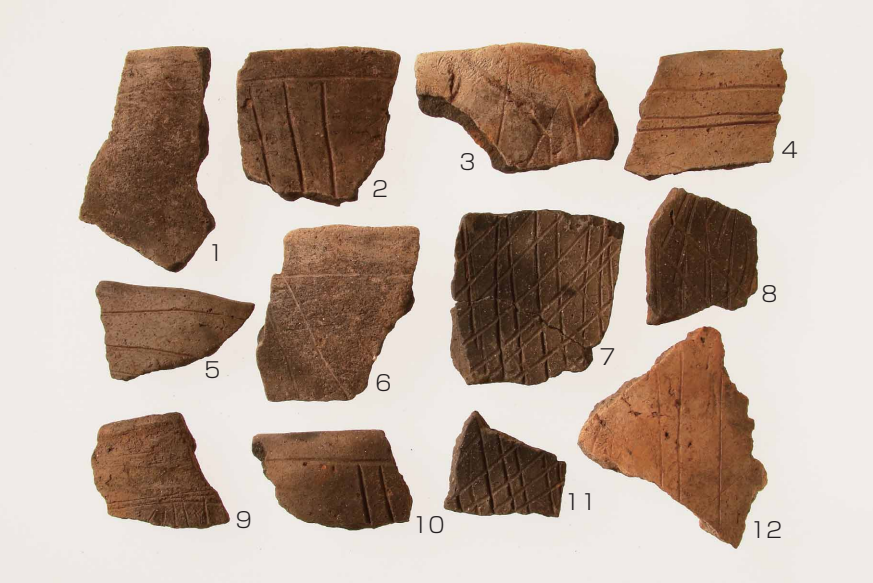
図版16

1（第21図－20）
2（第21図－21）
3（第21図－22）
4（第21図－24）
5（第21図－26）
6（第21図－32）
7（第21図－35）
8（第21図－36）

グリッド（5）

1（第22図－１）
2（第22図－２）
3（第22図－３）
4（第22図－４）
5（第22図－５）
6（第22図－７）
7（第22図－８）
8（第22図－11）

グリッド（6）



1（第22図－15）
2（第22図－24）
3（第22図－25）
4（第22図－28）
5（第22図－29）
6（第22図－31）
7（第22図－33）
8（第22図－36）
9（第22図－30）
10（第22図－32）
11（第22図－34）
12（第22図－38）

グリッド（6）

１（第23図－５）
２（第23図－８）
３（第23図－９）
４（第23図－10）
５（第23図－11）
６（第23図－17）
７（第23図－18）
８（第23図－20）

グリッド（７）

１（第23図－25）
２（第23図－27）
３（第23図－29）
４（第23図－30）
５（第23図－33）
６（第23図－34）
７（第23図－37）
８（第23図－36）
９（第23図－42）

グリッド（７）

１（第24図－１）
２（第24図－２）
３（第24図－４）
４（第24図－５）
５（第24図－８）
６（第24図－３）
７（第24図－６）
８（第24図－７）
９（第24図－10）

グリッド（８）

図版18

１　第１号住居跡（第26図５）

２　第１号住居跡（第26図３）

３　第１号住居跡（第26図２）

４　第１号住居跡（第26図４）

５　第２号住居跡（第28図１）

６　第２号住居跡（第28図６）

１　第２号住居跡（第28図10）

２　第２号住居跡（第28図11）

３　第２号住居跡（第28図７）

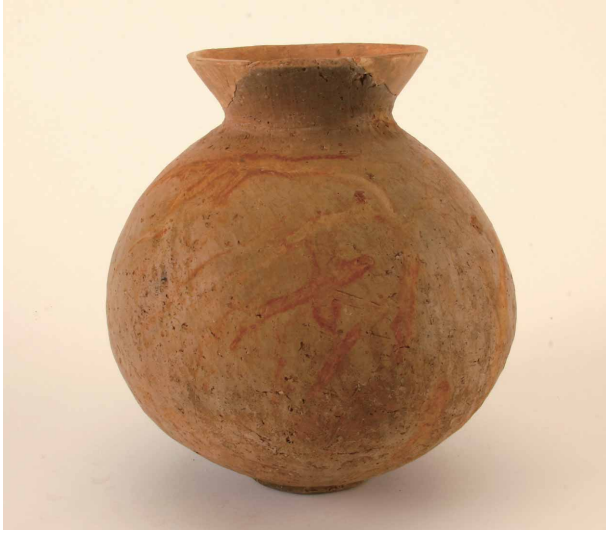
４　第２号住居跡（第28図14）

５　第６号住居跡（第33図１）

６　第６号住居跡（第33図３）

図版20

１　第６号住居跡（第33図４）



２　第10号住居跡（第39図１）

３　第10号住居跡（第39図２）

４　第10号住居跡（第39図６）

５　第10号住居跡（第39図５）

６　第10号住居跡（第39図7）

１　第11号住居跡（第41図１）

２　同左（細部）

３　第11号住居跡（第41図４）

４　第11号住居跡（第41図６）

５　第11号住居跡（第41図５）

６　第１号方形周溝墓（第43図４）

図版22

１　第１号方形周溝墓（第43図12）

２　第１号方形周溝墓（第43図13）

３　第１号方形周溝墓（第43図14）

４　第１号方形周溝墓（第43図21）

５　第１号方形周溝墓（第43図23）

６　第２号方形周溝墓（第45図３）

１　第２号方形周溝墓（第45図８）

２　グリッド（第48図１）

３　グリッド（第48図２）

４　グリッド（第48図６）

５　グリッド （第48図８）

６　表採（第48図９）

1　調査区全景（南西より）

2　第１号炉穴群

3　第２号炉穴

１　第３・４号炉穴
遺物出土状況

２　第３号炉穴遺物出土状況

３　第４号炉穴遺物出土状況

図版26

1　第５・８号炉穴

2　第２号炉穴群

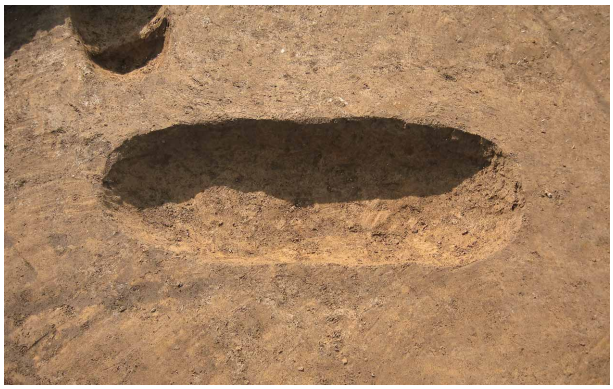
3　第３号炉穴群

1　第４号炉穴群

2　第24～32号炉穴

3　第32号炉穴 遺物出土状況

図版28



1　第１号土壙

2　第９号土壙

3　第10号土壙

4　第15号土壙

5　第17号土壙

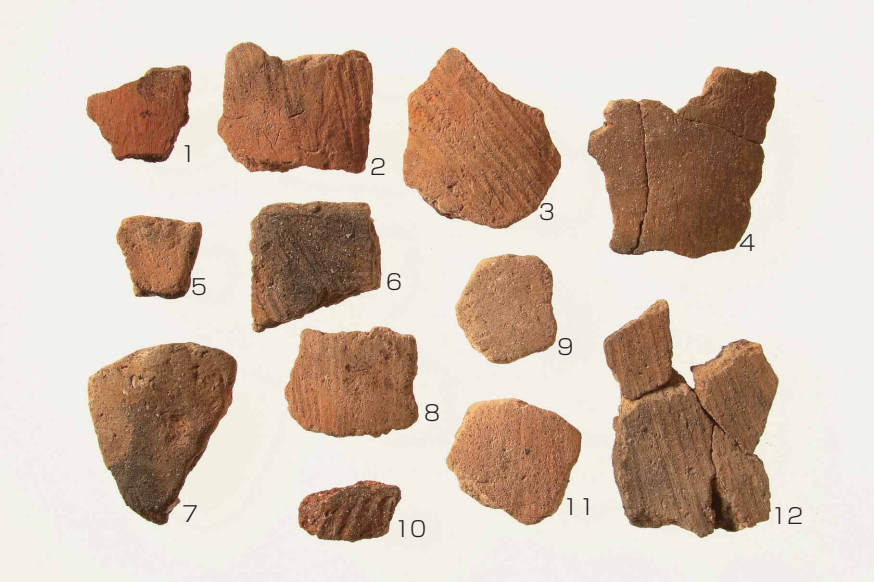
6　第18号土壙

7　第25号土壙

8　第33号土壙

１（第60図４）
２（第60図７）

１　第３・４号炉穴



１（第60図８）
２（第60図10）
３（第60図11）
４（第60図12）
５（第60図19）
６（第60図20）
７（第60図26）
８（第60図27）
９（第60図21）
10（第60図22）
11（第60図33）
12（第60図29）

２　第１号炉穴群・
第16･18･19号炉穴

３　第32号炉穴（第61図１）

報告書抄録

ふりがな	おばやしはっそくいち／おばやしはっそくに
書名	小林八束１／小林八束２
副書名	河川改修工事（元荒川／小林調節池）関係埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第356集
著者氏名	山本　禎
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369－0108　埼玉県熊谷市船木台四丁目４番地１　　TEL　0493－39－3955
発行年月日	西暦2008（平成20）年11月28日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
小林八束１遺跡（おばやしはっそくいち）	埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字小林4740－１番地他（さいたまけんみなみさいたまぐんしょうぶまちおおあざおばやしばんち ほか）	11446	044	36°03′14″	139°36′10″	20080201～20080324	500	河川改修工事
小林八束２遺跡（おばやしはっそくにいせき）	埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字小林4675番地他（さいたまけんみなみさいたまぐんしょうぶまちおおあざおばやしばんち ほか）	11446	045	36°03′10″	139°36′05″	20070928～20071031	352	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小林八束１遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡　２軒 土壙　７基	縄文土器　土偶（筒型土偶・木菟土偶） 石器	住居跡から筒型土偶が出土
		古墳時代	住居跡　10軒 方形周溝墓　３基	土師器　管玉	
		古代～近世	炭焼窯　１基 溝跡　３条 土壙　１基	縄文土器　土師器	
小林八束２遺跡		縄文時代	炉穴群　４群 （炉穴）　29基 土壙　37基 溝跡　１条 ピット　６基	縄文土器	

要約

小林八束１遺跡・小林八束２遺跡は、埼玉県菖蒲町の菖蒲町役場の南側に造られた調節池の東に位置する。周辺は、星川、野通川、元荒川を初めとする大小の河川や用水が南東方向に流れ、肥沃な水田地帯を形成している。遺跡付近は北側を流れる星川によっ形成された後背湿地にあたり、その下には埋没ローム台地があり、その台地上に縄文時代早期・後期、古墳時代前期の集落跡が形成されている。小林八束１遺跡では縄文時代後期の住居跡２軒、土坑７基が検出され、第４号住居跡から筒型土偶が出土した。また、古墳時代前期の住居跡10軒・方形周溝墓３基のほか炭焼窯・土壙・溝などが検出された。古墳時代前期に、集落廃絶後に墓域へと変遷していくことが確認された。小林八束２遺跡では縄文時代の炉穴が29基検出され、縄文時代早期の土器が出土した。その他に多数の土壙を検出し、一部の土壙からも縄文時代早期の土器が出土した。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第356集

小林八束１／小林八束２

河川改修工事（元荒川／小林調整池）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

平成20年11月20日　印刷
平成20年11月28日　刊行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108　埼玉県熊谷市船木台四丁目４番地１

電話　0493-39-3955

http : //www.saimaibun.or.jp

印刷／関東図書株式会社